

# 札幌市文化財調査報告書

I

1973

札幌市教育委員会



# 白石神社遺跡

1973. 3

札幌市教育委員会



## 序

当市の遺跡につきましては、過去において小規模な発掘調査が行なわれておりました。

ご存知のとおり、札幌市は各種開発事業が急速に進み、市内全域にわたり住宅地、工場街あるいは道路新設工事等大きく変化しております。昭和47年度は当市で初めてといっても過言でない各種開発現場における遺跡の発見が続出し、貴重な埋蔵文化財の破壊散逸のおそれが生じ文化財保護対策の確立が急務とされたわけであります。

調査体制確立に当っては、さまざまな制約の中で、いかにすれば十分な成果を挙げ得られるか等、関係機関と種々協議し検討したわけですが、幸いに多くのご援助を受け、札幌市教育委員会に自主調査を可能ならしめる調査体制を作り調査の運びとなったわけであります。

このたびの白石神社遺跡発掘調査に当り直接ご指導を下さいました諸先生の献身的なご協力と工事施行者、北海道大学、札幌大学等のご協力により茲に初期の調査を完了し、貴重な調査を終え、本報告書の発刊を見ることが出来ましたことを深く感謝いたします。

又、直接調査の指導から本書の執筆、刊行に至るまでご努力下さいました北海道大学大場先生、札幌大学石附先生をはじめ関係の方々に重ねて感謝の意を表するとともに、広く考古学研究の一助となれば幸いと存ずる次第です。

昭和48年3月

札幌市教育委員会

教育長 高橋 喜 敬

## 序 文

近年北海道内で、遺跡の調査件数が急増していますが、その理由の一つは、国土開発に伴い開発資源の豊富な北海道に、開発のための諸事業が集中されてきたためであります。そのための工事によって、学術調査が行われていない地帯で、遺跡が発見されますが、工事の性質上遺跡を保護することができずに、やむをえず破壊することになり、事前に遺跡の調査を行なわざるをえなくなったからであります。

遺跡はいうまでもなく、私達の祖先の人々の実生活の跡でありますから、私達の歴史を知るためには調査研究が必要であります。したがって、遺跡を未調査のままで破壊してしまうことは、私達の過去を抹殺し、歴史を否定することにもなりかねないのであります。しかも遺跡はどこにでも無限に残存しているというものではありませんので、もし遺跡と確認された場合には、極力これを保護すべき性質のものなのであります。しかしどうしてもやむをえない場合に限り、工事を前提にして、学術調査を行って資料を残すこととなります。

札幌市内に存在している先住民族の遺跡に関しては、すでに先覚者による研究があって、数ヶ所の遺跡が確認され、数篇の調査報告書がありますが、必ずしも十分な資料とはいえません。先に述べた北海道内の各地で起っている開発に伴う遺跡保護の問題と同様の事情が、ここ数年来札幌市にも起ってきております。すなわち、市郊外の市街化に伴う宅地造成、道路建設などの土木工事によって、先住民族の遺跡が相ついで発見され、遺跡保存か、緊急調査かの問題に直面しているのであります。

昨秋急遽遺跡の発掘調査を行ない、ここに調査報告書として刊行される、「札幌市白石神社遺跡」も、そうした事情の一例であります。白石神社地帯は現在市街の中心部に位置し、ここに予定された工事は幹線道路ですので、遺跡を現状のままで保護することは、困難な事情がありますので、工事に先だって学術調査を断行したのであります。調査に当たって市教育委員会は、有能な遺跡調査員を任命して、これに対処したのでありますが、時宜をえた配慮といえましょう。本遺跡の調査は、札幌市が担当した最初の事業であります。したがって本報告書でありますので発掘調査の成果については、関係官庁をはじめ専門学会が、等しく注目することと思いますので札幌市としては意義深いものがあります。

なお、北海道全域の遺跡の考古学的な調査研究は、南部地方並びに北部地方は、比較的早くから研究が行なわれ、したがってその外貌が判明しているのですが、両者の中間地域に位置する札幌地帯については、遺跡を発見する機会がすくなかったこともあって、大規模の調査は皆無であり、したがって調査研究も看過されがちで、本地方の先史時代については、不明なことが多かったのであります。しかし幸い今回の調査によって、縄文文化期殊に縄文文化中期ないし、同後期の年代における、先住民族の生活の実態が、かなり鮮明にされたといえることができます。

本調査並びに本報告書刊行を契機にして、更に今後札幌市内における先住民族の生活の実態が

一層明らかにされんことを祈願いたします。

最後に本調査の遂行並びに本報告書の完成に尽力された、市教育委員会の担当者の方々並びに遺跡調査員の方々の御努力に対し敬意を表し、本書の刊行を心からお喜び申しあげる次第です。

昭和 48 年 3 月 31 日

札幌市文化財保護委員  
北海道大学文学部教授 大 場 利 夫

## 例 言

1. 本書は、昭和47年10月20日から11月15日にかけて実施した道々西野一白石線敷地内白石区白石神社旧境内に存在する遺跡発掘調査報告書である。
2. 本調査は、北海道大学教授、札幌市文化財専門委員大場利夫、札幌大学助教授石附喜三男の指導のもとに、札幌市教育委員会嘱託上野秀一、加藤邦雄、羽賀憲二の3名が現場の仕事を遂行した。
3. 本書の執筆、は大場利夫教授、石附喜三男の指示のもとに、上記3名が討議の上、各項目別に担当し、文末に文責を明記した。
4. 発掘調査・整理においては、下記の人々より協力と助言を賜わった。  
北海道教育委員会文化財保護主事 藤本英夫、高橋稀一  
北海道開拓記念館学芸員 野村 崇  
東白石小学校教諭 畑 宏 明
5. 発掘調査には、下記の人々が従事した。  
青山幸夫、芳賀荘一、中田主亮、七十刈昭夫、大山真充、藤田 登、石橋孝夫、浜崎雅昭、直井孝一  
北海道大学、北海学園大学、札幌大学、北海道教育大学、札幌商科大学、藤女子短期大学学生
6. 遺物整理については、下記の人々の協力があった。  
林 文子、前浜恵美子、八巻恵子、藤山裕子、宮本たか子
7. 挿図浄書は、3名の嘱託の外  
小尾栄子、森本雅子、吉島ひなが当たった。 (以上順不同敬称略)
8. 石質鑑定は、北海道大学理学部地質学鉱物学科岩石学講座勝井義雄教授の石器表面の肉眼による鑑定をお願いした。
9. 骨器は、北海道大学文学部附属北方文化研究施設研究生西本豊弘氏にご教示いただいた。

## 凡 例

- ① 挿図は、完形土器実測図縮尺4分の1、土器拓影縮尺3分の1、底部実測図縮尺3分の1、石器実測図縮尺2分の1、骨器実測図縮尺2分の1。
- ② 写真は、完形土器縮尺2分の1、土器縮尺3分の1、石器縮尺2分の1、但し、図版23図Bは図版中に明示してある。
- ③ 石器実測図輪郭に沿った(——)線は、エッジに整形ないし使用による細かい剝離があることを示し、(┌┐)線は、エッジが磨耗していることを示している。
- ④ 石器説明中 a 面とは、背面ないし実測図中の左側正面図を指し、b 面とは、腹面ないし右側正面図をいう。

# 目 次

序 言	
第1章 札幌市における考古学的研究の回顧	1
第2章 遺跡の位置と環境	9
第3章 発掘調査の方法と層序	12
第1節 調査の方法	12
第2節 層 序	12
第4章 遺構及び出土遺物	15
第1節 ピットおよびその他の遺構	15
第2節 住 居 跡	24
第5章 遺構外出土遺物	32
第1節 土器及び土製品	32
第2節 石器及びその他の遺物	63
結 語	90

## 挿 図 目 次

- |  |  |
|--|--|
| <p>第1図 白石神社附近出土遺物</p> <p>第2図 遺跡地形図</p> <p>第3図 発掘区配置図</p> <p>第4図 a-b(1)セクション図</p> <p>第5図 a-b(2)セクション図<br/>c-d セクション図</p> <p>第6図 神社跡及びピット関連図</p> <p>第7図 第1号、第2号ピット実測図</p> <p>第8図 第1号、第2号ピット出土土器拓影</p> <p>第9図 第1号、第2号ピット出土石器実測図</p> <p>第10図 第3号ピット実測図</p> <p>第11図 第4号ピット実測図</p> <p>第12図 第4号ピット出土土器拓影</p> <p>第13図 第5号ピット出土土器拓影</p> <p>第14図 第1号堅穴住居跡実測図</p> <p>第15図 第1号堅穴住居跡出土土器拓影</p> <p>第16図 第1号堅穴住居跡・第1号堅穴住居跡状遺構出土石器実測図</p> <p>第17図 第1号堅穴住居跡状遺構実測図</p> <p>第18図 第1号堅穴住居跡状遺構出土土器拓影</p> <p>第19図 第1号堅穴出土(1)、発掘区出土(2~4)土器</p> <p>第20図 第I群土器拓影</p> <p>第21図 第II群(1~12)、第III群(13~18)<br/>第IV群(19~22)、第V群(23~27)土器拓影</p> <p>第22図 第VI群土器拓影</p> <p>第23図 第VI群(1~10)、第VII群(11~22)土器拓影</p> | <p>第24図 第VII群土器拓影</p> <p>第25図 第VII群土器拓影</p> <p>第26図 第VIII群土器拓影</p> <p>第27図 第IX群(1~6)拓影<br/>縄文時代中期土器底部実測図</p> <p>第28図 第X群(1~14)、第XI群(15~34)土器拓影</p> <p>第29図 第XI群土器拓影</p> <p>第30図 第XI群土器拓影</p> <p>第31図 第XII群土器拓影</p> <p>第32図 第XII群土器拓影</p> <p>第33図 縄文時代後、晩期土器底部実測図</p> <p>第34図 第XIII群土器拓影、第XIV群土器底部実測図</p> <p>第35図 土製品</p> <p>第36図 石器実測図(1)(石鏃、石銚、石槍)</p> <p>第37図 石器実測図(2)(ナイフ状石器、削器)</p> <p>第38図 石器実測図(3)</p> <p>第39図 石器実測図(4)(石錐、搔器、削器)</p> <p>第40図 石器実測図(5)(扁平石核、クレストッド・フレーク、縦長剝片)</p> <p>第41図 石器実測図(6)(削器)</p> <p>第42図 石器実測図(7)(一括剝片)</p> <p>第43図 石器実測図(8)(石斧)</p> <p>第44図 石器実測図(9)(石斧)</p> <p>第45図 石器実測図(10)(すり石、くぼみ石、礫器、砥石)</p> <p>第46図 有孔石製品実測図</p> <p>第47図 骨器実測図</p> |
|--|--|

## 図 版 目 次

<p>1 A 遺跡遠景（東より）            B 遺跡遠景（南より）</p> <p>2 A 遺跡発掘前の状態（北東より）            B 湧水</p> <p>3 A 第1号竪穴住居跡（北西より）            B 第1号竪穴住居跡セクション</p> <p>4 A 第1号竪穴住居跡状遺構（北西より）            B 第1号竪穴住居跡状遺構土器出土状態</p> <p>5 A 第1号ピット（南東より）            B 第2号ピット（南東より）</p> <p>6 A 第3号ピット（西より）            B 第4号ピット（南より）</p> <p>7 A 神社跡（北東より）            B 発掘風景</p> <p>8 A、B 発掘区遺物出土土器</p> <p>9 完形土器</p> <p>10A 第1号竪穴住居跡出土土器            B 第1号竪穴住居跡状遺構出土土器</p>	<p>11A 第1号、第2号ピット出土土器            B 第4号、第5号ピット出土土器</p> <p>12A、B 土器 (1) (2)</p> <p>13A、B 土器 (3) (4)</p> <p>14A、B 土器 (5) (6)</p> <p>15A、B 土器 (7) (8)</p> <p>16A、B 土器 (9) (10)</p> <p>17A、B 土器 (11) (12)</p> <p>18A 土器 (13)            B 骨器</p> <p>19A、B 石器 (1) (2)</p> <p>20A、B 石器 (3) (4)</p> <p>21A、B 石器 (5) (6)</p> <p>22A 石器 (7)            B 石器 (8) 遺構出土石器(1)</p> <p>23A 遺構出土石器 (2)            B 石器使用痕、附着物の拡大写真</p>
---	---

## 表 目 次

<p>第1表 遺構出土石器一覧表</p> <p>第2表 石器一覧表(1)</p> <p>第3表 石器一覧表(2)</p> <p>第4表 石器一覧表(3)</p>	<p>第5表 石器一覧表(4)</p> <p>第6表 石器一覧表(5)            （附載、札幌市関係文献目録）</p>
--	---



1:50,000 札幌

1000 0 1000 2000

毎段

## 序 言

この十数年来、日本全域における自然界に与える人的改変は、生物の適応変化の追従を許さぬ速さで進められ、誠に憂うべき状態にあるといわねばなるまい。とりわけ大都市近辺における宅地造成、道路新設等の時代、住民の要請に答えねばならぬ工事の激増は、想像に絶するものがある。かかる自然破壊、およびこれに必然的に伴う埋蔵文化財の破壊について、我々考古学を専攻する者のみならず、多くの識者が人間生活に最も必要なものは何かという立場から、抜本的対策を再考せねばならぬ時に至っていると言えよう。

一時代昔まで、緑の中に存在する都市として、その牧歌的旅情を全国に詩われて来た札幌市も近時、急速に激増する人口を収容する必要に迫られ、その変容を余儀なくされている。

この様な状況のもとにあって、身近に存在した札幌市周辺の自然は、宅地造成、道路工事等の重機械力の前に、急速に遠い存在となりつつあることを認めない訳にはいかない。

かつては、市内小中学校生徒の遠足の場として親しまれていた、白石周辺も例外とはなり得ず白石神社周辺に存在する遺跡も湮滅の危機にさらされるところとなった。

昭和47年8月初旬、近くの東白石小学校教諭畑 宏明氏は、神社移転に伴ない鳥居・植木等の移転が行なわれ、遺跡の現状変更がなされている事を憂い、石附にこの旨連絡があった。石附は、直ちに札幌市教育委員会菊地主事、札幌市文化財専門委員大場利夫博士の同道を得て現場を踏査した。その結果、本地区が道々西野―白石線の道路予定地とされて工事中寸前にある事が判明した。

その後、札幌市教委、札幌市建設局、大場博士、石附の4者によって数次にわたる協議の機会を得た。そして最終の会合にて路線計画、用地買収、工事の進行状況等の総合的見解より、路線計画変更は不可能であり、札幌市教育委員会が主体となり、事前調査を行なうという結論を得たのである。

かくして、10月札幌市教育委員会に埋蔵文化財調査担当嘱託職員が着任し、白石神社遺跡の発掘調査が行なわれる運びとなった。

白石神社周辺が埋蔵文化財の包蔵地であることは、昭和43年文化財保護委員会編『全国遺跡地図(北海道)』にも記載されており、更に採集遺物の紹介も二、三なされている。しかし、いまだ学術調査を一度も実施される事なく、周囲の宅地化の波に蚕食されるにまかせてあった。今回の調査地点は、白石神社の境内であったがために、かろうじて保存されていた最後の場所と言えよう。

これを契機として、札幌市の埋蔵文化財に取り組む姿勢がより一層前進的なものとなる事を期待する。

(石附喜三男)

# 第1章 札幌市における考古学的研究の回顧

## I

北海道において本格的に考古学的研究による先史時代の解明が始められるのは、昭和に入ってからである。それ以前にも数々の研究が行なわれているのであるが、今日と比較して研究者も少なく、研究の規模も小さなものであった。

札幌市の場合、考古学的研究のフィールドとして、大々的に脚光をあびるという事はなく、地味な存在であった。現在札幌市中には、100カ所余の遺跡の存在が知られているのであるが、本格的な研究目的をもって発掘調査された例は少ない。

1. 1932（昭7）年、発寒村・発寒神社裏ストーンサークルとアイヌ墳墓
2. 1937（昭12）年、後藤寿一が報告している真駒内種畜所構内の堅穴住居跡
3. 1953（昭27）年、北海道大学構内の堅穴住居跡群
4. 1954（昭28）年、手稲遺跡（この発掘は、札幌市に合併される以前に行なわれている。）
5. 1964（昭38）年、平岸坊主山遺跡
6. 1966（昭40）年と翌年の2度にわたって北栄遺跡

の6例を数える。明治初年より北海道開拓の中心地として、開発優先の街づくりは地下に埋れていた遺跡・遺物を根こそぎ破壊するという大きな犠牲の上に立つものであった。この様な遺跡破壊は、すでに明治中頃には顕著に認められ、1911（明44）年発行の『札幌区史』によると、札幌の各地にみられた大規模な堅穴住居跡群がほとんど破壊されていると記している。

札幌市中に存在する遺跡の分布について大規模に調査された例は少ない。昭和に入るといくらか調査が行なわれ、報告が発表される。

1. 1937（昭12）年、後藤寿一が札幌市及びその附近の遺跡24カ所について報告
2. 1955（昭31）年、『琴似町史』の記載で琴似町の26カ所の遺跡の報告
3. 1963（昭38）年、岩崎隆人らによる分布調査により、札幌市及びその附近の113カ所の遺跡の報告
4. 1968（昭43）年、文化財保護委員会編『全国遺跡地図（北海道）』に100余カ所の遺跡の記録

この4つの報告が、現在の札幌市中に存在する遺跡の分布を知る上において重要な手がかりを提供している。しかし、それぞれ調査の不備な地帯を残しており、今後大規模な分布調査が行なわれなければならないだろう。

## II

明治から大正にかけて札幌において行なわれた考古学的研究は、1884（明17）年10月坪井正五郎らによって東京人類学会が創立されて以来、中央学会ではなばなく争われたアイヌ・コロボックル論争に刺激され推進されたといっても過言ではない。東京人類学会報告に渡瀬荘三郎が寄稿した「札幌近傍ピット其他古跡の事」という報文が、坪井のコロボックル論にしばしば引用さ

れるなど、アイヌ・コロボックル論争の双方の論の裏付けの資料を提供するために研究が活発化していったといえる。

1891（明24）年、「札幌博物学会」の発足

1892（明25）年、「札幌史学会」の発足

1895（明28）年、「札幌人類学会」の発足

と北海道における考古学的研究もその後自立した歩みを始めている。

この頃の札幌市中の遺跡の状態は、すでに開発の為破壊される遺跡が多く見られている。1911（明44）年発行の『札幌区史』によると、「明治27、8年頃に調査した所によると北大構内を第1として100以上、琴似川流域に600、博物館構内、円山山鼻一帯の丘陵地帯に多数の堅穴がみられたのだがそのほとんどの遺跡は開拓によって破壊され壊滅してしまっている。」と記されている。

大正時代に入ると、考古学的研究も興味本位な状態から脱脚し始める。1918（大7）年には、河野常吉を主軸に「北海道人類学会」が発足し、翌年3月には「北海道人類学雑誌」が刊行される。この間に河野常吉は遺跡、遺物の保護をうったえ、広範な保存運動を展開している。この運動は1918（大7）年、第18回道議会に「遺跡・遺物の調査並びに保存に関する件」という動議を提出可決させている。

最初は、興味本位なくまでも個人的に小規模に行なわれていた考古学的研究を、遺跡の保護という点において、社会的な目を向けさせた事実は、現在行なわれている、考古学研究の在り方にも非常に有意義な問題提起をしていると思われる。

### III

昭和に入ると、札幌における考古学的研究も本格的な軌道に乗る。第2次世界大戦が始まるまで数々の調査、研究が行なわれ、論文も若干数発表されている。その中でも特に重要と思われる河野広道らによって発見、発掘調査された、発寒神社裏のストーンサークル状配石遺構とアイヌ墳墓の報告と、1937（昭12）年、後藤寿一が『考古学雑誌』27巻9号に発表した「札幌市及び其附近の遺跡、遺物の2、3について」の2つの報告について、概略を記してゆこう。

琴似町発寒神社遺跡には、ストーンサークル状配石遺構とアイヌ墳墓がみられ、1932（昭7）年河野広道・高倉新一郎によって発掘され、翌年報告されている。河野の記述によると、ストーンサークル状配石遺構は、ほとんど破壊され、その概要を明らかにすることはできなかった。同時に発見されたアイヌ墳墓は2基発掘され、2体の人骨。多数の副葬品を得たと報告している。2基の墳墓は、重複する形で掘り込まれており、伸展葬の遺体を埋葬した後、新しい墓壙がそれと重複される状態で掘られている。しかし、すでにその部分には、遺体が存在していたため、遺体をきゅうくつな姿勢のまま小さな墓壙に埋葬したものと考え、伸展葬された墓の方が古いと、新旧関係を考察している。2基の墳墓とも非常に多くの副葬品が出土しており、その中の宋銭より鎌倉時代以降のものと説明している。

ストーンサークルについては、そのほとんどが破壊され形態が明確にされなかったので、くわし

い説明は行っていないが、音江遺跡等ですでに発見されているストーンサークルと関連があるかもしれないとしている。

後藤寿一の報文は、主に札幌市及び近辺に発見されている遺跡の記録と概要を記したものである。現在では完全に都心部となっしまい、その存在を確認する事ができない遺跡を多数報告している点が注目される。

以下記載されている遺跡を列記すると、

1. 南8条西14丁目 厚手縄文土器片・磨製石斧片
2. 南12条西18丁目 擦文土器片
3. 南14条西16丁目 擦文土器・擦文文化期の竪穴住居跡
4. 南13条西13丁目 擦文土器片・擦文文化期の竪穴住居跡
5. 南16条西14丁目 磨製石斧片
6. 円山3丁目 厚手土器
7. 円山1丁目 擦文土器
8. 円山段丘 黒耀石片
9. 伏見 縄文土器・石匙
10. 藻岩村上山鼻 石斧
11. 北大構内 擦文土器・須恵器・竪穴住居跡群
12. 北1条西8丁目 甲冑・刀剣
13. 北4条西12丁目 刀剣
14. 真駒内種畜所構内 擦文土器・擦文文化期の竪穴住居跡3基
15. 平岸天神山 チヤシ・関東式類似の土器
16. 平岸台地上冷水 竪穴状墳墓・擦文土器
17. 平岸台地 厚手式・後北・擦文土器
18. 平岸台地東裏 平岸天神山と類似の土器
19. 月寒
20. 望月寒
21. 陸軍射撃所附近
22. 千城台
23. 向ヶ丘 関東式類似の土器
24. 垂別 厚手式縄文土器・石器

以上24カ所の遺跡を報告している。

真駒内種畜所構内の擦文時代の竪穴住居跡は、発掘しており若干の考察を加えて、報告されている。住居跡は方形を呈し壁の一部に粘土による造り付けのかまどと煙道を有していたという。中からは、刻線による幾何文様をもった擦文土器が出土している。

平岸天神山については、チヤシの外堀の存在を報告している。出土している土器はその特徴よ

り関東式類似の土器ではあるが、層位的に不明で、只一般に厚手期の土器と称したいと、深い考察は行なっていない。

後藤がこの報文を発表したのは、日本がまさに第2次世界大戦に突入せんとしていた前夜ともいえる暗くしずんだ頃であった。後藤も文末に戦争が始まりそうだといった危機感を述べている。以後終戦となり世の中が安定するまで、全道各地の考古学的研究も沈黙する。

#### IV

札幌市及びその周辺において、本来の考古学的研究にもどるのは、戦後の混乱期が過ぎてからである。1953（昭27）年の北大遺跡の発掘調査以後続々と研究の成果が発表される。

文化財保護法施行以来、発掘調査された遺跡は、北大遺跡、手稲遺跡、平岸坊主山遺跡、北栄遺跡の4カ所である。しかし、手稲遺跡は、手稲町がまだ札幌市と合併される以前に発掘されている。これを含めて、いずれもその概要が知られているので、個々について記してゆこう。

北大遺跡、1953（昭27）年、北大調査団によって発掘される。この遺跡は古くから堅穴住居跡群として知られていた。北海道大学構内、農学部附属農場内の標高10m前後の台地一帯に直径6～7m程度の円形状を呈する凹部が多数みられ、明確に堅穴住居跡とわかるものが73個、やや不明確なものが10個と合計83個がみられたという。発掘は8基の堅穴住居跡に対して行なわれている。結果は38号住居跡中より若干の土器と石製品をえたのみで、他には全くみられなかったという。出土遺物による堅穴住居跡の年代決定はなしえなかったが、遺跡にみられる火山灰の降灰年代より4、500年前の所産と推測している。堅穴住居跡の構造が非常に貧弱である事より、産卵期の魚類（サケ・マス類）を捕る為に一次的に居をかまえた、いわば仮小屋的存在であったらうと、報告者は考察している（北大調査団「北大遺跡について」『北方文化研究報告』10、1955（昭30）年）。

手稲遺跡、1954（昭28）年、札幌市と合併される前に大場利夫・石川徹によって発掘されている。紅葉山砂丘上に形成された遺跡で、縄文時代後期中頃の示準遺跡として良好な資料が出土している。報告者は、出土土器を第Ⅰ（A・B）様式・第Ⅱ様式・第Ⅲ様式・その他の様式に分類しその概要を報告している（大場利夫・石川徹『手稲遺跡』1956（昭31）年）。

吉崎昌一によって行なわれた縄文時代の編年によると、手稲遺跡出土の土器は、縄文時代後期中頃に位置付けられ、東北地方の宝ヶ峰式あるいは十腰内3式に対比されるであろうととらえている（吉崎昌一「縄文文化の発展と地域性—北海道」『日本の考古学』Ⅱ1965（昭40）年）。

平岸坊主山遺跡、1964（昭39）年、宅地造成の為に破壊される部分ができるため、札幌市教育委員会主催、大場利夫担当で緊急発掘が行なわれた。この遺跡は、すでに後藤寿一が平岸台地上で関東式類似の土器がみられたとしてその存在を報告しており、古くから知られていた遺跡である。発掘報告は、1966（昭41）年、畑 宏明によってなされている。それによると、上部になんらかの上屋構造をもつと思われる遺構が検出され、多数の土器が出土している。土器はⅠ・Ⅱ・Ⅲ群に分類し、その概要を述べている。Ⅰ群には、縄文時代中期の北筒式土器、Ⅱ群には、余市式土器、Ⅲ群として装飾的な形態・文様を特徴とする天神山遺跡出土の土器と類似する資料をあ

げている。

報告者は、これらの資料を、円筒上層 b 式土器に対比し、サイベ沢 VI 及び VII 文化層に対比されるであろうと記している。

編年としては、円筒土器との関連から考えると「Ⅲ→Ⅰ→Ⅱ群土器」の編年がなされるかもしれないが、3群の土器は相互に大きな時間的差異はみとめられないとしている（畑 宏明「札幌市附近の遺跡—資料篇Ⅱ—札幌市平岸坊主山遺跡」“Aynu Moshiri”Ⅱ、1966（昭41）年）。

北栄遺跡、宅地造成によって破壊されるため、札幌市教育委員会主催、松下亘担当で行なわれた緊急発掘である。1966（昭41）年4月、翌年5月と2度にわたって発掘されている。本報告書は、まだ発表されていないのだが、縄文時代晩期の土器が出土しているという。（石附喜三男「札幌市北栄遺跡の発掘」『古代文化』第19巻2号 1967（昭42）年）。

以上4件行なわれた発掘調査中、平岸坊主山遺跡、北栄遺跡の例の様に開発に伴い緊急発掘が行なわれる様になった点に、特に注目したい。

遺跡分布状態に関しては、後藤寿一による報告以後、河野広道「先史時代」『琴似町史』（1957（昭32）年）、北海道教育大学の諸氏による報告（1963（昭38）年）、文化財保護委員会編『全国遺跡地図（北海道）』（1968（昭43）年）となされている。

『琴似町史』によると、発寒川・琴似川及びその支流附近の小高い丘陵地帯に多くの遺跡が存在し、種類もストーンサークル・アイヌ墳墓・チャン・堅穴住居跡とバラエティーにとんでいる事を記している。以下琴似町に存在している遺跡を列記すると

1. 新川東牧場に2地点いずれも擦文土器の出土がみられる
2. 東発寒 793 江戸時代末期のアイヌ墳墓と思われる遺跡
3. 東発寒・発寒神社裏 ストンサークル・堅穴住居跡・アイヌ墳墓
4. 発寒 989 厚手、薄手の縄文土器・擦文土器・石器類がみられる
5. 東発寒 薄手縄文土器片・擦文土器片
6. 西発寒46 余市式土器の包含層
7. 西発寒 643 厚手土器の包含層
8. 西発寒にいずれも厚手土器の出土がみられる地点が3カ所
9. 西発寒三谷氏所有地 厚手土器
10. 西発寒線路北 厚手土器
11. 西発寒 736 古式尖底土器及び石器類
12. 発寒 厚手土器
13. 24軒南には、近接して擦文土器の出土がみられる地点が5カ所あり、堅穴住居跡群が存在していたであろう
14. 24軒南 340 薄手縄文土器と擦文土器がみられる
15. 24軒 薄手縄文土器と擦文土器
16. 琴似製菓所有地 人骨出土

17. 駅前通り西側 刀剣・人骨出土
18. 山ノ手 厚手及び薄手の縄文土器と土師器
19. 山ノ手 391 チャン
20. 十二軒沢附近 土器片

以上26遺跡をあげているのであるが、その立地条件と出土遺物による時代決定から、古い時期に属する遺跡は、山ノ手・発寒・円山等の比較的高い地域に分布し、新しい時期のものはその生活圏を低い地帯まで範囲を広げて行くという事実を指摘している。

北海道教育大学の諸氏による精力的な札幌を中心とした分布調査の活動は、そのまとめとすべき、収録篇・分布図篇として発表された。この報告は、後藤寿一の報告（後藤寿一 1937）、『琴似町史』（1957（昭32）年）、『豊平町史』（1959（昭34）年）等に記載された遺跡と新たに発見された遺跡を集大成したものであるといえる。これによると、札幌市中には、現在の都心部、発寒川、琴似川の流域、丘珠、平岸より真駒内にかけての丘陵地帯、円山から藻岩山にかけての山麓地帯、白石、西岡より月寒にかけての丘陵地帯、厚別より野幌にかけての台地上等に100カ所余の遺跡が存在している事がわかる。ほぼ札幌市全域にわたっての遺跡の分布を報告した例は、初めての事であった。

その後、1968（昭43）年に文化財保護委員会より発行された、『全国遺跡地図(北海道)』によれば、札幌市には、100カ所余の遺跡が記録されている。これは、前述の北海道教育大学の諸氏による報告をそのまま引用しているのであるが、遺跡の正確な地番・規模・時代に関する記載がなされておらず、その地点のみを列記したものである。

北海道における先土器文化研究は白滝周辺を中心にその分布が調査され、1954（昭29）年には、樽岸遺跡の発掘が行なわれ急速に関心が高まり、札幌においても数件この時代と思われる遺物の発見の報告がなされている。

1958（昭33）年、君 尹彦が白石本通りにて採集したブレードと、札幌北高校郷土研究部が平岸天神山で採集したブレードを報告している。

1958（昭33）年8月には、札幌西高校郷土研究部が白石町月寒川の中にて採集したブレードについて。

1959（昭34）年12月には、札幌光星高校郷土研究部が、白石神社境内で発見したブレードについて報告している。

いずれの資料も表採資料であり出土層位も明確にされていない為正確な時期はわからない。今後良好な遺跡の発見が期待されよう。

先に記した北海道教育大学による、札幌周辺の遺跡に対する精力的な研究は着々と行なわれている。

重要な報告を見ると

1963（昭38）年、宇田川 洋が、札幌市石山で採集された尖底土器について報じている。

同年には、前述した。分布調査の成果をまとめた「札幌市附近の遺跡について—収録篇・分布

図篇一」を、1966（昭41）年には岩崎隆人らによって「発寒小学校裏遺跡」の報告がなされている。これは、河野広道が従来厚手式土器群・発寒式尖底土器と称していた土器を出土する遺跡の資料報告である。遺跡は、標高13～14mに存在しているという。出土土器は、縄文時代早期の静内中野式（尖底）土器群とされる資料として考察している（岩崎隆人ら「札幌市附近の遺跡—資料篇Ⅰ—札幌市発寒小学校裏遺跡」『北海道の文化』10）。

同年には、前記の、平岸坊主山遺跡の発掘報告が畑 宏明によって「札幌市附近の遺跡—資料篇Ⅱ—」としてされている。

1968（昭43）年には、「札幌市周辺の遺跡—考察篇Ⅰ—札幌扇状地における遺跡の先史地理学的考察」が発表される。この論は、札幌扇状地において発見され、まとめられている65遺跡について、先史地理学的に考察を加えたものである。まず先土器時代よりアイヌ文化期までを、A～H期の8期に分類し、各地に存在する遺跡の立地条件、標高差等より、札幌扇状地の成立を考古学の面より追求したものである。これによると札幌面には、縄文時代中期以降の遺跡・遺物がみられ、標高10～30mに集中、中ノ島面では、縄文時代早期以降の遺跡が分布しており、標高40～5<sup>0</sup>mに集中している。平岸面では、先土器時代以降の遺跡の存在がみられ、標高30～60mに分布しているという。

これらの事実より札幌扇状地が形成され、人が住める様になるのは、きわめて新しい時期に入ってからである事を結論している。この論考は、北海道教育大学による一連の札幌に関する考古学研究の総括的なものをなしているのである。

その他にも報告された研究は非常に多いのであるが、近年発表された、天神山遺跡・手稲砂山遺跡は、縄文時代中期に属する良好な資料が得られている。

1967（昭42）年、菊地俊彦が、天神山に建てられたホテルの造成現場より採集した土器についてくわしく記述している。

報告によると資料が多く、セット関係としてとらえられるとしている。第1形式(A・B類)、第2形式、第3形式に分類して考察している。第1形式は、サイベ沢ⅥあるいはⅦ文化層に対比され、余市式土器の特徴をも備えているものも含んでいる。第2形式については、第1形式の口縁部の装飾が退化したタイプをあげ、第3形式は、後期初頭のものに類似しているとしている。編年的には、第1、2、3形式ともに大きな時間差が認められないが層位的にとらえられていないため、今後の調査をまたなければ、結論を出しえないとしている。（菊地俊彦「札幌市平岸天神山出土の土器について」『北海道考古学』3 1967（昭42）年）。

手稲砂山遺跡、1967（昭42）年、石川 徹が、縄文時代中期後半より後期初頭にかけての土器の出土を報告している。この報告された資料の場合も発掘されておらず、層位的に明確にされていない。（石川 徹「札幌郡手稲砂山出土の土器について」『北海道考古学』3 1967（昭42）年）。

## V

開発が急速に進み、つい最近まで空地であったり、畑地であった所が、住宅地、工場街へと変

化してゆく様子は、一見文化が非常に発展したかの様な幻想をいだかせる。札幌市は、北海道開拓の中心地として、非常な速度で開発を押し進めてきた。この開発優先政策はそれまで地下に埋蔵されていた遺跡の破壊すら顧みない野蛮きわまりないものであった。北海道教育大学の諸氏による精力的な分布調査によって、確認されている100余カ所の遺跡のうち、現在破壊の危機に直面していない遺跡はほとんど無い程である。もうすでに破壊されつくし、その存在すら確認ができない遺跡も多く存在していると思われる。

戦後、文化財保護法施行以後、正式に発掘された遺跡は、北大遺跡・手稲遺跡・平岸坊主山遺跡・北栄遺跡の4カ所にすぎない。うち2カ所は、開発に伴う緊急発掘であった。

明治末には、河野常吉によって遺跡・遺物の保存・保護運動が広範に展開され、1918（大7）年には、第18回道議会に「遺跡・遺物の調査並に保存に関する件」なる動議を提出可決させている。研究者によって保存・保護の具体的な提起がなされたのは、日本において始めてであったろうと思われる。近時開発によって破壊される遺跡が急激に増大し、社会問題化している状況を考えると、現在このまま河野常吉の提言をとりあげてもなんらそんな色ないであろう。この事実は河野常吉による提言以後、文化財を守るべき立場の行政当局は何ら遺跡の破壊を防ぐ事に策をこらじなかったという状態を示している。

日本全国に先きがけて広範な保存・保護運動が展開された北海道も現在に至っては、本州各地域と比較して非常なたちおくれを露見させているのである。

遺跡は個人の所有に帰するものではない。一度破壊を許してしまえば、再び元の姿に戻すことができない民族の歴史的遺産としての属性がある。これを本来あるべき姿で後世に伝えてゆくことが我々に課せられた責務である。従って、遺跡の保存・保護は研究者をも含めた国民全体の問題である。この河野常吉の提言より65年間の空白をうめるべく広範な保存・保護運動の展開される事が急務であろう。

（羽賀憲二）

## 第2章 遺跡の位置と環境

白石神社遺跡は、札幌市の都心部より東方に位置し、国道12号線と道道西野—白石線が交差する白石神社境内に存在している。地番は、白石区本通 789 番地である。

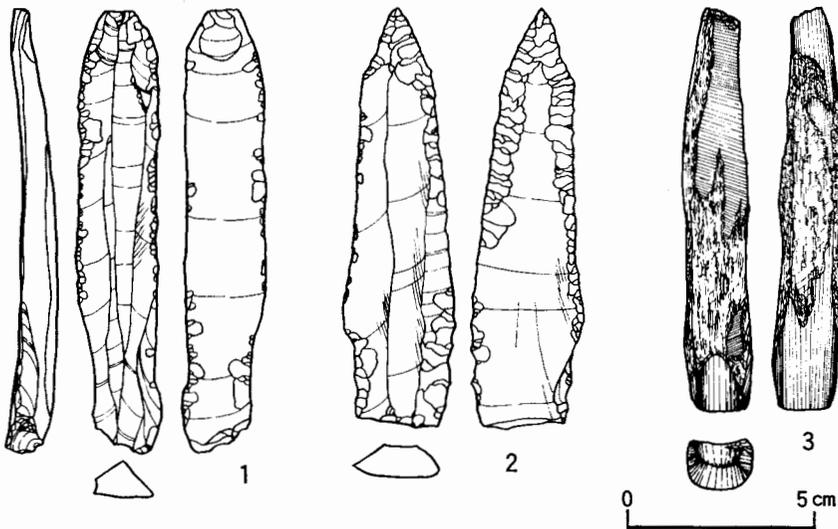
眼下に月寒川、広くは大谷地一帯をみわたせる標高22m~23mの南向き台地である。遺跡の中心部には湧水がみられ、この湧水部分が小支谷をかたち作っている（湧水の標高は17,642mである）。しかし、現在では、開拓当初より幾度かにわたって整地されており、台地の原形をとどめていない。

遺跡は、湧水部分を中心に営まれていたと思われる。湧水量は、現在も非常に豊富であり、水神宮がまつられている。遺跡の営まれた時代においても、人々が生活上、この湧水の存在は重要な役割をなしたと考えられる。

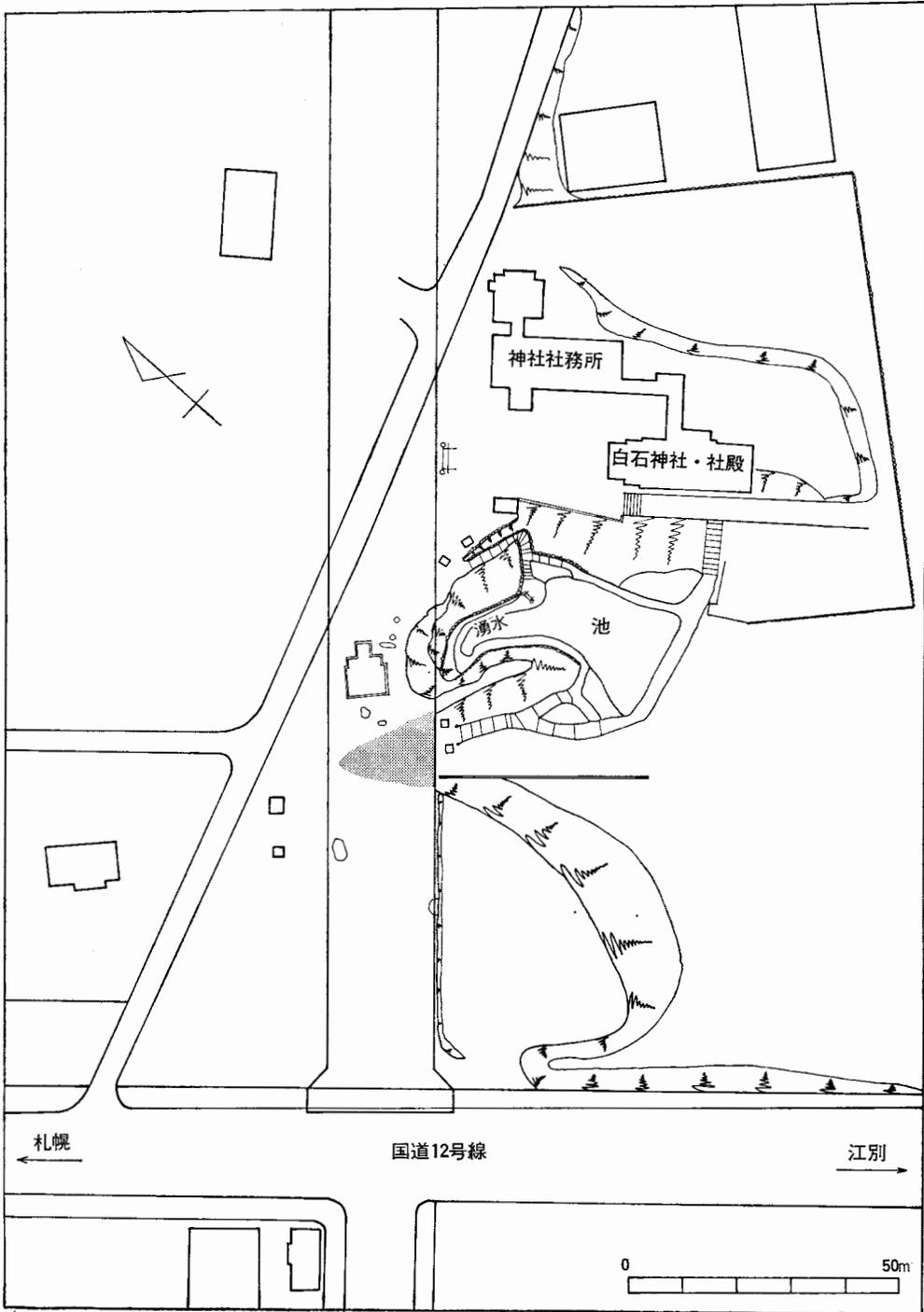
文化財保護委員会編『全国遺跡地図(北海道)』によると、白石周辺には、白石神社を中心として、7カ所の遺跡が記載されている（巻頭図版）。

1. 北郷
2. 本通り
3. 白石神社境内に3地点
4. 本郷通り
5. 大谷地

これらの遺跡は、すべて月寒川流域に関連する台地上に存在している。月寒川流域の台地上にはまだ発見されていない遺跡が多く存在していると考えられる。



第1図 白石神社附近の出土遺物



第2図 遺跡地形図

白石近辺の遺跡は、1958（昭33）年、君 尹彦が白石本通りにて採集したブレードを報告して以来、札幌市中にも先土器時代の遺跡が存在している可能性を提示し、多くの研究者から注目されてきた。

白石に在住の田島一郎氏採集資料によれば、縄文時代早期から擦文時代に至る遺跡の存在が窺える。特に石器類は非常に多く、ブレード状の石器（第1図1）、多数の石鏃、石匙、玉類、石斧、丸のみ形石斧（第1図3）とバラエティーにとんでいる。

#### 第1図の説明

1. 白石本通りにて田島一郎氏が採集し現在時計台に展示されている資料である。この資料は君 尹彦によってすでに報告されている（君 尹彦 1958）。

長さ12cm、幅2cm、厚さ1cmの大きさである。打点は非常に小さく長さに対して幅が非常にせまく、高度な剝離技術をもって剝されたと思われる。君は、報告の中で下部を欠失していると記しているが、その部分は細かい剝離が加えられており、一つの面が作り出されている。この面を打点としているかは解らなかったが、逆方向の一条の剝離が入っている。それは丁度彫器の刃部状をなしているとも思えるが、彫器と断定するには、若干のためらいを感じさせる。黒耀石製。

2. 白石区大谷地にて、君 尹彦が採集し、現在時計台に展示されている資料である。長さ11cm、幅3cm、厚さ0.8cmの大きさである。縦長の石刃のバルブ面に入念な押圧剝離をほどこし、尖頭器状の尖頭部を作り出している。長さに対して幅が非常にせまい点が1と同様な特徴である。黒耀石製、非常に高度なブレード・テクニックをもって狭長の石刃を作り出す点、石刃に押圧剝離を加えて尖頭器状の石器を作り出す技術等を考えると、その類例は、先土器時代よりも道東北部を中心にその文化の存在を知られている石刃鏃文化により近いと感じられる。

1、2とも表採資料であり他に伴出遺物が明らかにされていず、出土層位も確認されていないため正確な所産は、今後の調査をまたなければならない。

3. 白石本通りにて田島一郎氏が採集し現在時計台に展示されている資料である。全長11cm、最大幅1.5cm、素材面を若干残している。特に先端部の刃部は入念に研磨され、鋭い丸のみ状としている。石材は、片状角閃石である。重量は44.7gである。

この種の石器は、特異な形態を有する事より、古くから多くの注目をあびていた。道内においては、石狩川流域を中心に多くの発見例が発表されている。しかし、その時代は、現在に至るまで明らかにされていない。

1966（昭41）年、大塚和義は、石狩町花畔出土の丸のみ形石斧を報告している。伴出遺物が明確にされていないが、形態よりみて入手困難な金属製丸のみを模倣し、それを補う役割をはたしたもので、続縄文時代以降、擦文時代の可能性が最も強いとしている。

1969（昭44）年、本田栄作氏は『空知地方の文化財』において、縄文時代中期の所産として説明している。

白石出土のこの丸のみ形石斧については、伴出遺物、正確な出土地点が不明である。

（羽賀憲二）

### 第3章 発掘調査の方法と層序

#### 第1節 調査方法

今回の調査は、道々西野一白石線敷設に伴う緊急調査で、発掘用地が道路のため、発掘区は、北東—南西方向に縦に長く20m×90mの約1800m<sup>2</sup>であった。

発掘区設定は、原則として20m×20mの大グリッド方式を採用した。南からⅠ～Ⅴ区とする。これを、さらに2m×2mの小グリッドに分割した。小グリッドの名称は、東西方向は、西からA～Jと称し、南北方向は南から1～10と呼称する。発掘方法は、千鳥り掘りである。Ⅰ区とⅡ区およびⅤ区は、包含層がほとんど削られていたため、テストグリッドをあけるにとどめた。発掘総面積は、約1000m<sup>2</sup>である。

#### 第2節 層序 (第4・5図)

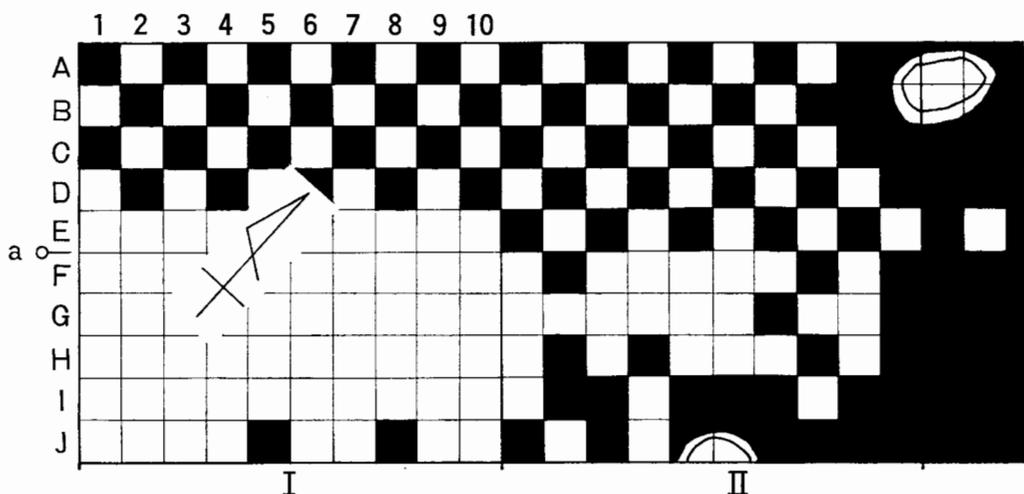
セクション図は、グリッドの長軸方向(a—bセクション)と短軸方向(c—dセクション)の2本をとっている。a—bセクションは、南西—北東方向で、E—F列のラインである。ⅢE5南東壁からVF4北西壁まで図示した。c—dセクションは、南東—北西方向で、Ⅲ区の6—7列のラインである。

層は、13層に分類できた(ローマ数字)。

第Ⅰ層：整地層。二次堆積の盛土である。

第Ⅰ'層：攪乱層

第Ⅱ''層：第Ⅴ層と第Ⅶ層の混じった攪乱層。



第3図 遺跡発掘

第Ⅱ層：赤褐色土層。木の根による攪乱層である。腐植度が強く、赤味を帯びている。

第Ⅲ層：黒色土層。多少粘質性がある腐植土層である。

第Ⅳ層：暗茶褐色土層。土質は、第Ⅲ層と同じである。

第Ⅴ層：暗褐色土層。土質は、第Ⅲ層と同じである。

第Ⅴ'層：粒子の粗い暗褐色土層。

第Ⅴ''層：処々に黒い部分のある暗褐色土層である。

第Ⅵ層：暗黄褐色土層。若干粘土質が強く、黄色味を帯びている。

第Ⅶ層：暗黄褐色粘質土層(漸移層)。地山の黄褐色粘土層上面の暗色に汚染された層である。

第Ⅷ層：黄褐色粘土層。若干の円礫を含み、炭化物が散発的に混入している。地山である。

第Ⅸ層：黄褐色粘土のブロック状の二次堆積である。

第Ⅹ層：砂層。二次堆積である。レンズ状に入っている。

第Ⅺ層：炭層。昭和42年に、神社が焼けた時のもので、神社遺構とその周辺部にある。

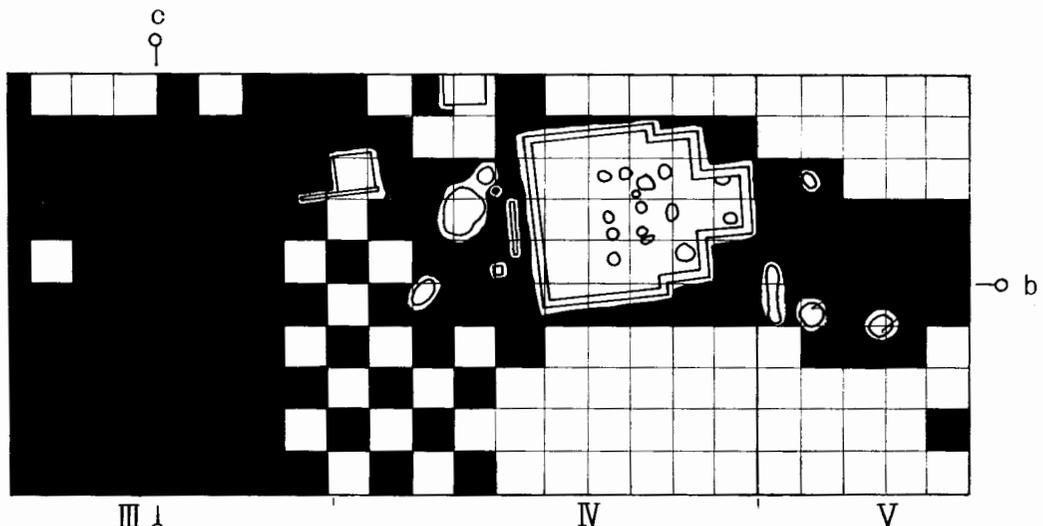
第Ⅻ層：二次的な粘土張りで、神社遺構のレンガの礎石の内部にのみある。基壇であろうか。

第Ⅼ層：木の根の跡である。第Ⅱ層ほど腐植化は進んでいない。

I・II区およびIII区1～5列、さらにIV区4列からV区4列までは、ほとんど腐植土層は削りとられ、プライマリーな包含層は局部的にしか残っていない。III区6列からIV区3列までは緩らかな谷である。

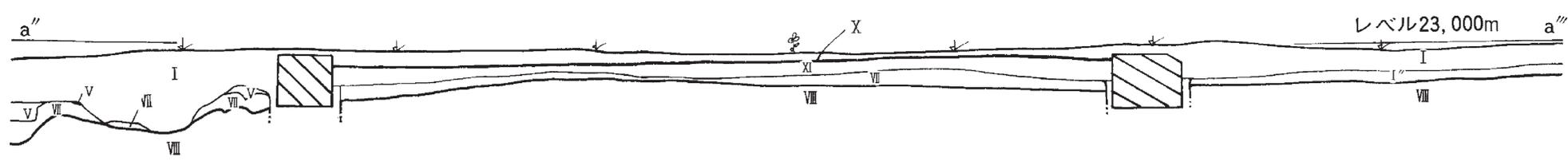
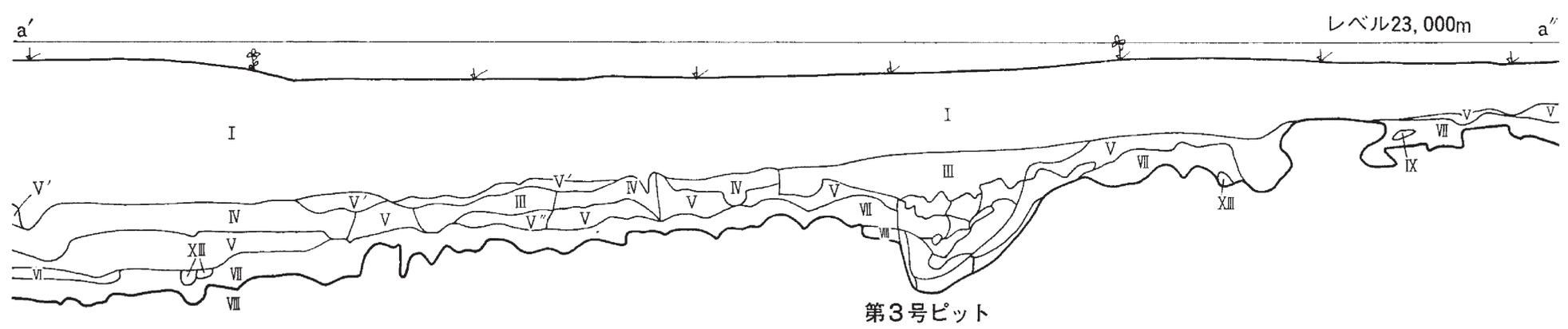
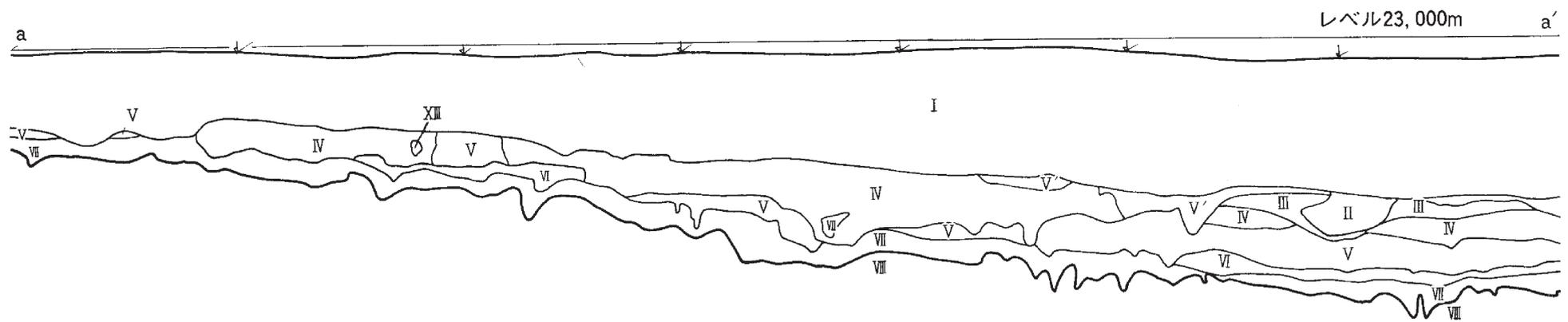
遺物包含層は、第Ⅲ～Ⅴ層である。第Ⅵ層からも若干出土している。遺物は、層位的に捉えることはできなかったが、III・IV区は、縄文中・後期の資料が主体で、V区は、続縄文期の資料を多く出土している。

VF5 グリットは、現地表下2.85mまで掘った。簡単にそれを説明しておく(アラビア数字)。

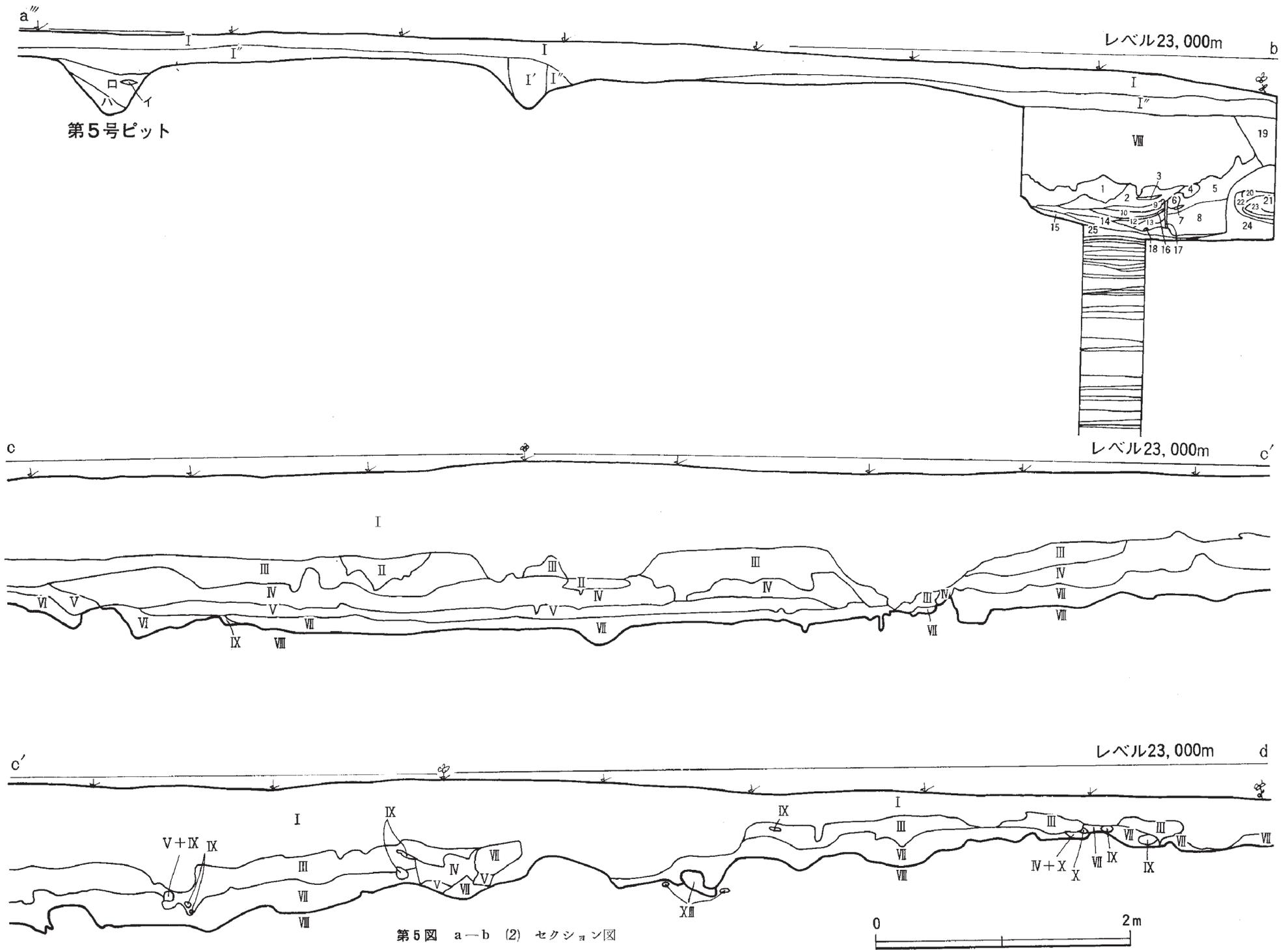


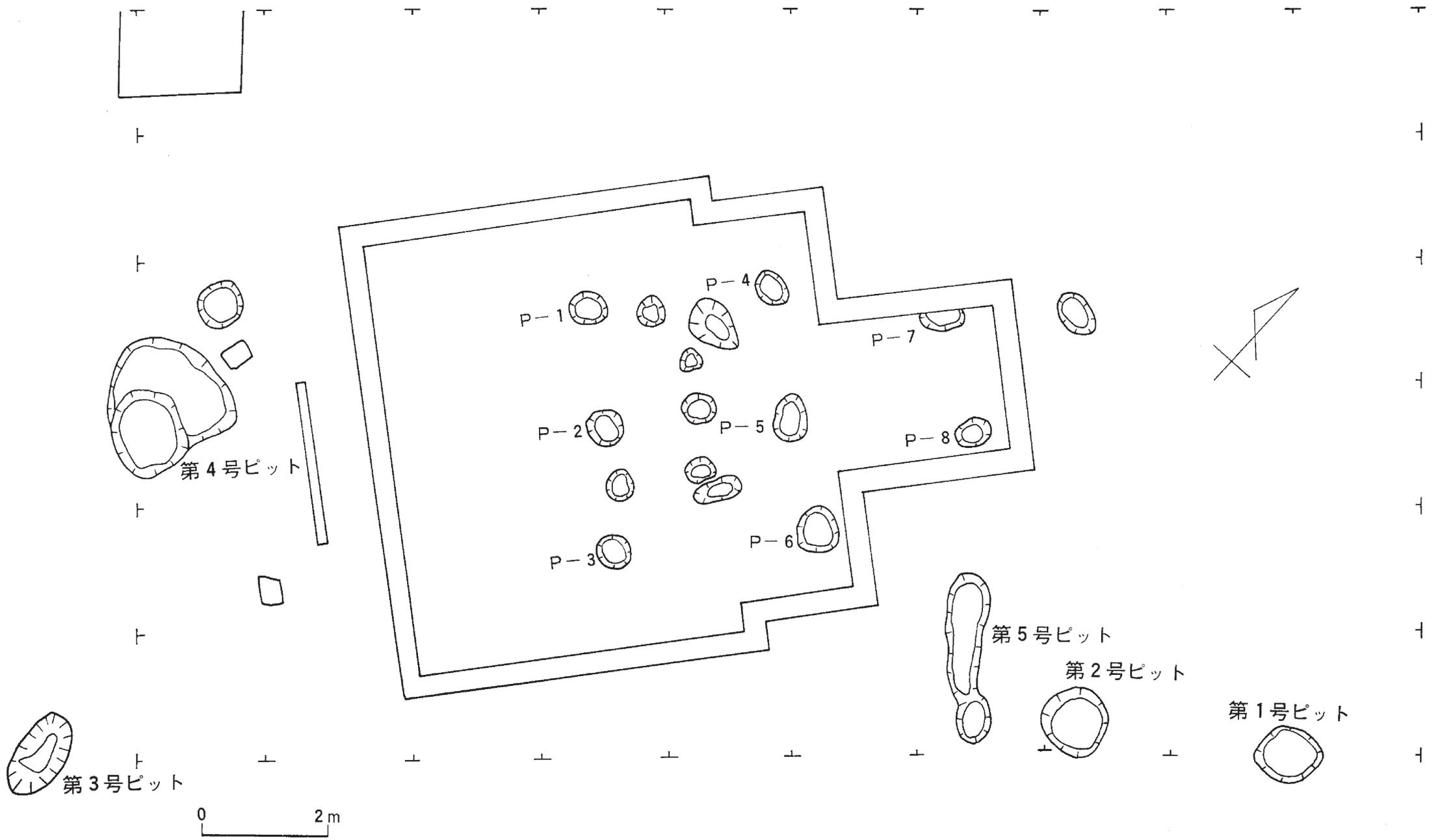
区配置図

- 第1層：褐色粘土層Ⅰ。砂粒を含み、多少吸湿性がある。
- 第2層：黄褐色粘土層Ⅰ。砂粒を含み、多少吸湿性がある。
- 第3層：褐色粘土層Ⅱ。ブロック状で、砂粒を含み、多少吸湿性がある。
- 第4層：褐色粘土層Ⅲ。砂粒を含み、多少吸湿性がある。
- 第5層：褐色粘土層Ⅳ。第4層より多くの砂粒を含み、多少吸湿性がある。
- 第6層：褐色粘土層Ⅴ。第5層より多くの砂粒を含み、多少吸湿性がある。
- 第7層：褐色粘土層Ⅵ。性状は、第6層に近い。
- 第8層：黄褐色粘土層Ⅱ。砂を多量に含む。
- 第9層：黄褐色粘土層Ⅲ。砂をほとんど含まない。
- 第10層：褐色粘土層Ⅶ。砂を多少含み、吸湿性がある。
- 第11層：黄褐色粘土層Ⅳ。多量の砂を含む。
- 第12層：黄褐色粘土層Ⅴ。多少砂を含み、吸湿性がある。
- 第13層：黄褐色粘土層Ⅵ。砂を多少含み、吸湿性がある。
- 第14層：褐色粘土層Ⅷ。砂を多少含み、吸湿性がある。
- 第15層：褐色粘土層Ⅸ。砂の含有量は微量である。
- 第16層：暗褐色粘土層。木炭と砂を若干含む。
- 第17層：褐色粘土層Ⅹ。微量の砂を含む。
- 第18層：淡褐色粘土層。多量の砂を含む。
- 第19層：暗黄褐色粘土層。砂は全く含まないが、全体に黒く汚染され、粘着性はあまり強くない。
- 第20層：暗褐色砂層。多量の砂を含み、多少粘質性がある。
- 第21層：黄褐色砂層。多量の砂を含み、多少粘質性がある。
- 第22層：褐色粘土層Ⅺ。砂を多少含む。
- 第23層：青褐色粘土層。砂を多少含む。
- 第24・25層以下は、火山性の細砂と粗砂、礫層との互層である。
- 第Ⅷ層および第1～19層は、月寒火山灰層——いわゆる大谷地黄褐色粘土層と思われる。第24・25層以下は、豊平浮石層（支笏軽石流堆積物）の二次堆積した火山灰質砂と安山岩の小礫・浮石礫の互層からなる厚別（あしりべつ）砂礫層である。共に洪積世の所産である。（小山・杉本・北川1956）。
- （上野秀一）



第4図 a-b (1) セクション図





第6図 神社跡およびピット関連図

## 第4章 遺構および出土遺物

### 第1節 ピットおよびその他の遺構

#### 第1号ピット (第7図1、図版5A)

直径98cm、深さは掘り込み面より50cmの円形状のピットである。壁は直立に近く非常にはっきりとしている。底面は平らである。掘り込み面は黒色土層下面からと思われ、黒色土層を剥ぎ取った段階で、ピットの存在が確認されている。覆土中には若干の土器片と石器類を含んでいる。埋没状態を層によって観察すると順序よく重なり合っているのがみられ、なんら人為的に埋めもどされた様な形跡を残してはいない。覆土中に含まれていた遺物は、統縄文時代に属する土器が主体をなしており、このピットが掘られた時代は、統縄文時代かそれ以降であろうと推測される。このピットの性格は明らかにすることができなかった。

#### 層位

第I層：黒色土層I。(暗褐色が強い)。

第II層：黒色土層II。(黒色である)。

第III層：黒色土層中に焼土が若干含まれている。

第IV層：焼土のブロック。

第V層：灰褐色土層。

第VI層：黒色土層III。(黒色を呈す)。

第VII層：黒色土層中に粘土が若干含まれている。

第VIII層：粘土中に黒色土ブロックが含まれている。

第IX層：黒色土中に粘土ブロックが含まれている。

第X層：黄褐色粘土層である。

(羽賀憲二)

#### A. 土器 (第8図1~10) (図版11A)

##### 縄文式土器(1~3)

斜行縄文を施文する土器のみである。2は、口縁部破片である。器形は、すべて深鉢形をなすであろう。

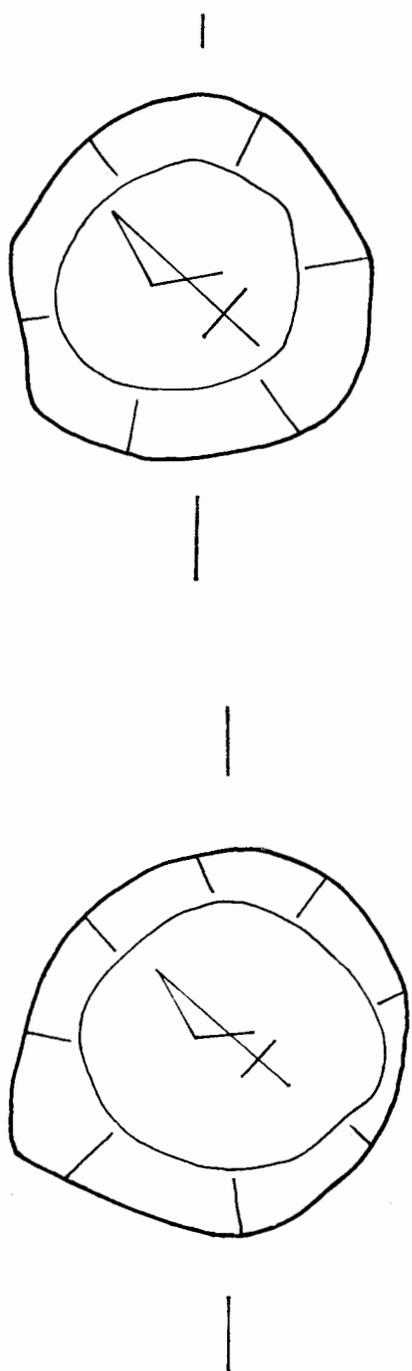
焼成は、概して良好で、色調は灰色に近い。器厚は1.2cm前後である。

##### 統縄文式土器(4~10)

口唇上に小さな刻み目をつけ、口縁に横走するやや太めの隆起帯をつける。以下、微隆起線、三角形の刺突文、帯縄文で曲線文様をなす(4)、口縁に横走する刻み目を有する2条の隆起帯をめぐらす(5)、6~9も同様な破片である。器形のすべてを知り得るものはないが、鉢形となる。

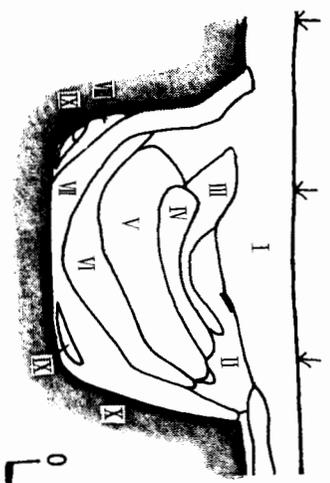
焼成は、概して良好で、色調は茶褐色となり、すべてに炭化附着物が見られる。

器厚は、0.7cm前後である。

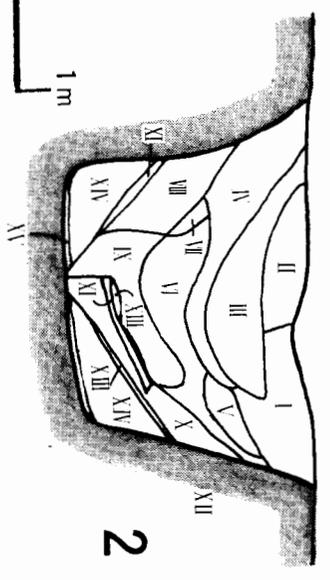


1/23,000 m

1/23,000 m



1



2

第7図 第1号・第2号ピット実測図

縄文式土器の出土数は、非常に少なく時代を明確に判定し得ないが、縄文時代中期に属するであろう。

続縄文式土器は、いわゆる後北C<sub>2</sub>式、後北D式土器に属する。 (加藤邦雄)

**B. 石器 (第9図) (図版23A)**

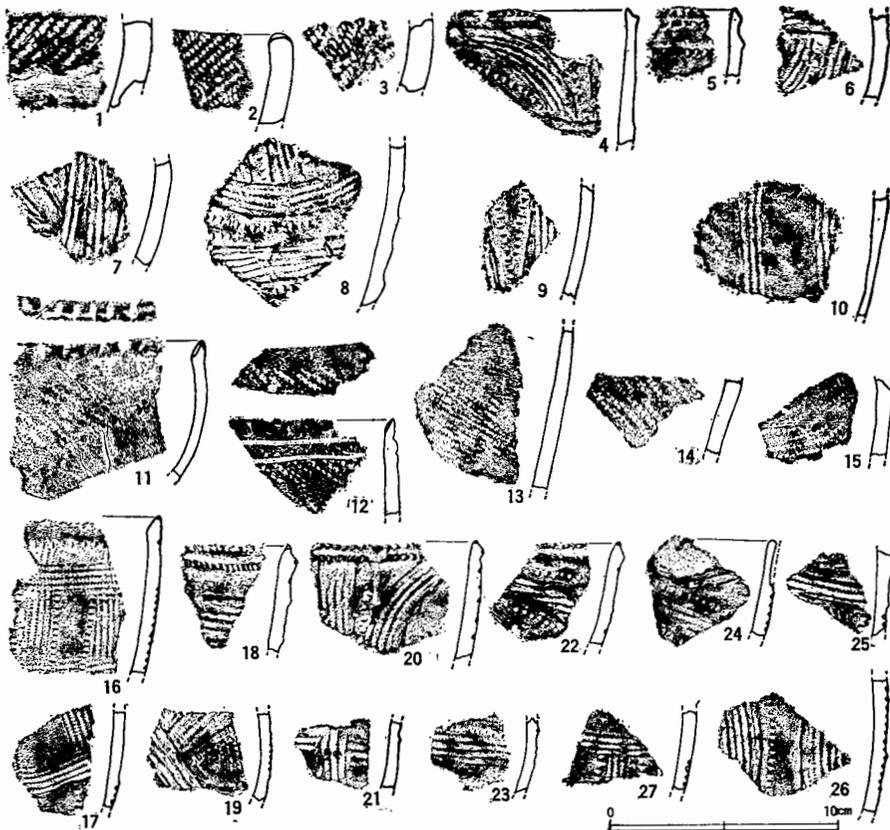
本ピットからは、石鏃と縦長剥片、各1点しか出土していない。

石鏃 (1) 両面加工で、基底部に扶ぐりを入れた無茎鏃である。この無茎鏃は、当遺跡では、唯一の出土である。

縦長剥片 (2) a面両側に不規則な剝離がある。バル側は欠損している。 (上野秀一)

**第2号ピット (第7図1、図版5B)**

直径105cm、深さは掘り込み面より60cmの円形状のピットである。壁は直立に近く非常にはっきりしている。底面は平らであり、アンペラ状を呈する炭化物がうすく一面にみとめられた。掘り込み面は、黒色土層下面からと思われ、黒色土層を剥ぎ取った段階で、ピットの存在が確認されている。覆土中には若干の土器片を含んでいるが、ピットの底面には一切の遺物は認められなかった。埋没状態を層により観察すると極めて乱雑に堆積している。ピット底面部に粘土の固く



第8図 第1号(1~10)、第2号(11~27)ピット出土土器拓影

しまったブロックが円錐状に見られた。その他は相互の土層が混り合った状態を呈して堆積している。この事実は、自然堆積により埋没したとは考えられず、人為的に埋めもどされたものと理解される。覆土中に含まれていた遺物は、続縄文時代に属する土器が主体をなしており、このピットが掘られ、埋めもどされた時期は、続縄文時代かそれ以後であろうと推測される。底面にアンペラ状の炭化物がうすく一面に存在しているのであるが、その材質を明らかにし、ピットの性格を決める事は出来なかった。

#### 層 位

第Ⅰ層：黒色土層（若干粘土ブロックを含んでいる）。

第Ⅱ層：黒色土層。

第Ⅲ層：焼土。

第Ⅳ層：黒色土層中に若干の粘土を含んでいる。

第Ⅴ層：黒色土層。

第Ⅵ層：粘土中に黒色土が含まれ、暗褐色を呈する土層である。

第Ⅶ層：黒色土中に若干の粘土を含んでいる。

第Ⅷ層：黒色土を若干含む黄褐色粘土層。

第Ⅸ層：粘土を含んだ黒色土層。

第Ⅹ層：黄褐色粘土層である。これは、明らかに二次堆積したものである。

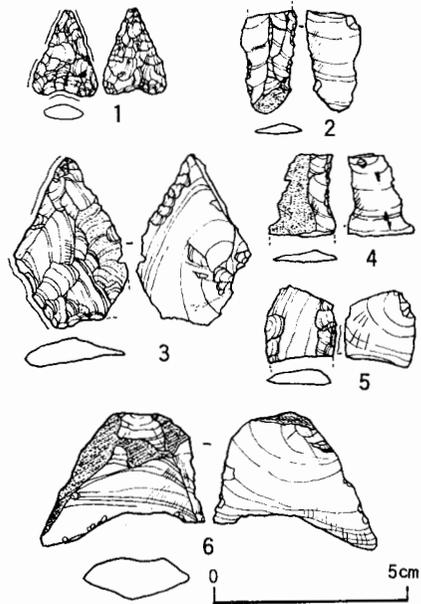
第Ⅺ層：粘土を含む黒色土層。

第Ⅻ層：黄褐色粘土層。

第ⅩⅢ層：暗灰褐色土層である。これは粘土と黒色土がまじり合った状態を呈している。

第ⅩⅣ層：円錐状に入りこんだ非常に堅い淡黄褐色粘土層。

第ⅩⅤ層：アンペラ状を呈する炭化物の薄い層。



第9図 第1号・第2号ピット出土石器実測図

(羽賀憲二)

#### A. 土 器 (第8図11~27) (図版11A)

##### 縄文式土器 (11~15)

口唇部に、表裏よりU字状の工具を押圧し刻み目をつける。表面は、以下縄文のみを施文する(11)、口唇内面に縄文を施文し、表面は、口縁に2条の沈線を横走させ、その下部は縄文とする(12)。胴部破片で、縄文のみを施文する(13~15)。

器形は、鉢というより碗形に近い(11)、その他は、鉢形となろう。

焼成は良好で、色調は灰色に近い。

器厚は、0.7 cm前後である。

続縄文式土器（16～27）

縄文式土器（16、17、27）

口唇上に刻み目を施文し、微隆線文が見られず、直線的な三角形の刺突文、帯縄文を施文する(16、17、27)。

器形は、確実には知り得ないが、鉢形となろう。焼成よく、色調は灰色を呈し、器厚は0.6 cm前後となる。

続縄文式土器（18～26）

口唇上のすべてに刻み目をつけ、口縁に隆起線をめぐらし、以下曲線の三角形の刺突、帯縄文、微隆起線文の組み合わせる文様をつける(18、20、22)、他の胴部破片も全くこれに類する(19、23～26)。

器形は破片で知る限りにおいては鉢形であろう。

焼成は良好で黒色を呈し、器厚は、0.7 cm前後である。16、17、21、23、27を除いたすべてに炭化附着物が見られる。

縄文式土器は、縄文時代晩期に比定することが出来よう。

続縄文式土器は、いわゆる後北C<sub>2</sub>式、後北D式土器である。 (加藤邦雄)

#### B. 石器（第9図）（図版23A）

本ピットからは、剥片に簡単な二次加工を施こした石器3点しか出土していない。

ナイフ状石器（3）横剥ぎの剥片を素材にして、a面左上と下縁、b面左上に二次加工がある。a面左上辺は、縦にそいだ面で、a面右下辺は欠損面か、切断面である。石鏃の未成品か、尖頭状のナイフである。

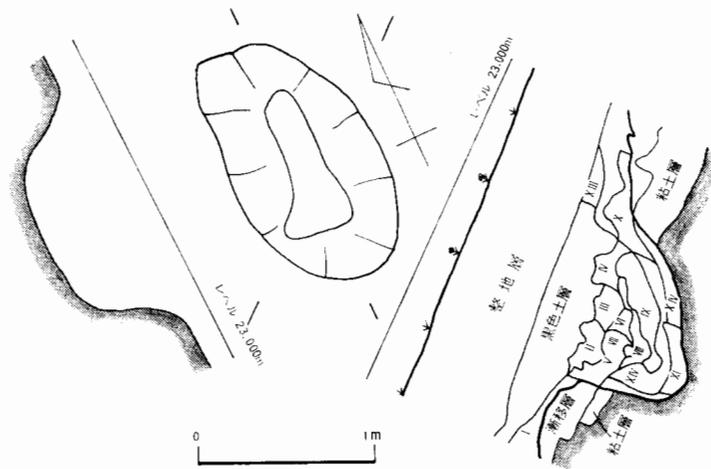
縦長剥片（4、5）4は、a面右側に細かな二次加工のある縦長剥片である。下部欠損。5は剥片の両側に二次加工がある。打面にも細かな二次加工がある。下部欠損。 (上野秀一)

#### 第3号ピット（第10図、図版6A）

長径140 cm、短径80 cm、深さは掘り込み面より50 cmで、長軸方向を南北に持つ楕円形状を呈するピットである。壁面は、はっきりとせず、底部はまるみを帯びている。掘り込みは、漸移層上面より行なわれたと思われ、基盤の黄褐色粘土層を掘り抜いてその底部は基盤の下層である厚別砂礫層にまで達している。覆土中にも底面にも遺物は全く検出されなかった。埋没状態は層を観察すると極めて乱雑な堆積を示している。壁には、黄褐色粘土がはりついたように存在している。その他は相互に異なった土層が混り合った状態を呈して堆積している。この事実は自然堆積により埋没したとは考えられず、人為的に埋めもどされたものと理解される。遺物が全く見られない為、このピットが掘り込まれ埋めもどされた時期の判断はなされず、ピットの性格についても明らかにすることは出来なかった。

層位

第I層：暗褐色土層I（黒色土層中に若干の褐色粘土ブロックを含んでいる）。



第10図 第3号ピット実測図

第Ⅱ層：赤褐色土を含んでいる黒色土層。

第Ⅲ層：暗褐色土層（Ⅱ層の土を若干含んでいる）。

第Ⅳ層：暗茶褐色土層。

第Ⅴ層：黒色土を若干含む赤褐色土層。

第Ⅵ層：黒色土を含みただらに黒い部分を呈する暗褐色土層。

第Ⅶ層：灰褐色土層（黒色土層と赤褐色土層がまじり合った状態を呈する）。

第Ⅷ層：若干の粘土を含んだ暗灰褐色土層。

第Ⅸ層：粒状の粘土を含む暗灰褐色土層。

第Ⅹ層：褐色粘土と黒色土がまじり合った層である。

第Ⅺ層：砂粒をかなり多く含んだ粘土層に黒色土が若干入り混っている。

第Ⅻ層：暗褐色土層中に褐色粘土がまだら状に入り込んでいる。

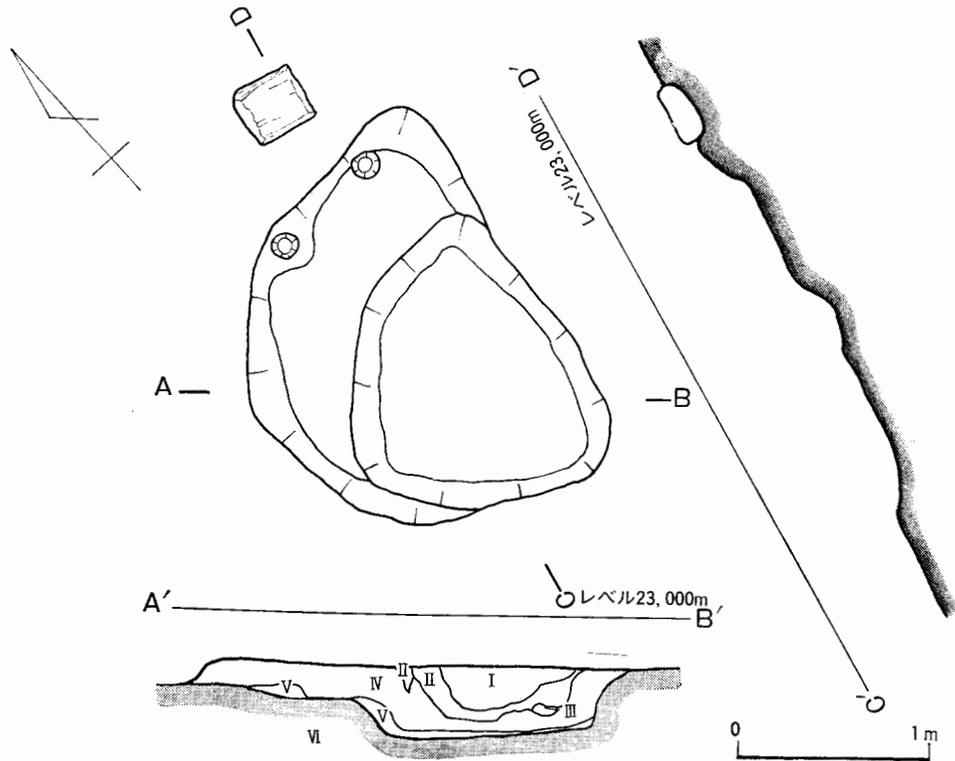
第ⅩⅢ層：暗茶褐色土層。

第ⅩⅣ層：暗黄褐色粘土層。

（羽賀憲二）

#### 第4号ピット（第11図）（図版613）

長径200cm、短径150cm、深さは掘り込み面より10cmの皿状を呈するピットであり、南側半分が直径100cm、深さ30cmとさらに掘り込まれている。壁はなだらかな立ち上りをしており、底面は平らである。掘り込みは漸移層の上面からと思われ、漸移層の面よりピットの存在が確認されている。北側の浅い部分の壁ぎわに直径15cm、深さ5cmの小ピットが2個検出されている。覆土中には若干の土器片が含まれているが、ピット底面には全くみられていない。ピットの埋没状態を層によって観察すると、きわめて自然な堆積を示しており、ピット外部の土層がピット内部に流れ込んでいる状態がみられる。この事実は、人為的に埋めもどされたものとは思われず自然堆積によって埋没したことを示している。覆土中に含まれる遺物は、縄文時代中期の土器が主体をな



第11図 第4号ピット実測図

しているため、このピットが掘られた時期は、縄文時代中期かそれ以後であろうと考えられる。ピットの性格は同様に明らかにはできなかった。

#### 層位

第Ⅰ層：黒色土層（若干の粘土を含んでいる）。

第Ⅱ層：黒色土中に粘土を含んでいる暗褐色土層。

第Ⅲ層：粘土の非常にかたいブロック。

第Ⅳ層：黒色土を含んだ暗黄褐色粘質土層。

第Ⅴ層：黄褐色粘土層（二次堆積）。

第Ⅵ層：黄褐色粘土層（地山）。

（羽賀憲二）

#### A. 土器（第12図）（図版11B）

口唇上にヘラ状工具による連続押圧文をつけ、口縁部にも同一工具による沈線を数状めぐらし地文として縄文をつける。焼成よく、茶色を呈する。器厚は0.7cmである(1)。口唇上に縄文をつけ、表面も同一原体による縄文となり、筒形に近い深鉢形となろう。焼成は、不良で褐色である。器厚は1.0cm内外である(2、5)。底部破片であり、底部は、かなりの外反を見せる。かなりの傾斜を示して口縁部へと立ち上がる器形となろう。焼成良く、褐色である(5)。

以下すべて胴部破片で斜行縄文を施文し、焼成は粗にして、黄褐色となる(6、7)表面は風化して文様の窺いえない(8)、条線文が見られ、灰色に近いもの(9)がある。

器厚は、1.0 cm前後である。

縄文時代中期に属するであろう。

(加藤邦雄)

### 第5号ピット (第6図)

直径50cm、深さは掘り込み面より50cmの円形状を呈するピット。長軸方向を N-38°-E に向けた長径 200 cm、短径60cm、深さは掘り込み面より50cmの細長い楕円形状のピットの2個が接して発見された。両方のピットとも黒色土層下面より確認された。両方のピットとも壁面は直立に近くしっかりしている。底部は両ピットとも丸みを帯びている。両ピットの覆土中には若干の土器片と石器類を含ん

でいる。埋没状態は、楕円形状ピットの層を観察すると黒色土が流れ込んだ様に存在しており、人為的に埋めもどされた乱雑な堆積は示していない。覆土中に含まれていた遺物は、縄文時代中期の土器が主体をなしている為、これらのピットが掘られたのは、縄文時代中期に属するか、それ以後の時代であろうと考えたい。2個のピットは、切り合う形で存在はしておらず、遺物も同じタイプの物を含んでおり、その新旧関係は、明らかにできなかった。またこれらのピットの性格も一切不明であった。

層位 ( 第5図 a-b(2) セクション)

第I層：黒色土層。

第II層：茶褐色土層。

第III層：黒褐色土層。

(羽賀憲二)

### A. 土 器 (第13図) (図版5B)

口縁部破片であり、2条の横走る半截竹管工具の内面を用い、連続刺突文をめぐらす。筒形の深鉢となろう(1)。以下すべて胴部破片であり羽状縄文となる(2、3)、斜行縄文(4~13)、口縁部の破片であろうが横走る貼付帯を有する(14)、燃糸文を施文するもの(15)がある。

器形は、円筒形の深鉢となろう。1、2、8、13は、繊維質を混入する。

色調は、褐色であり、器厚は、薄いもので1.0 cm、厚いもので1.6 cmである。

縄文時代中期に属するものである。

(加藤邦雄)

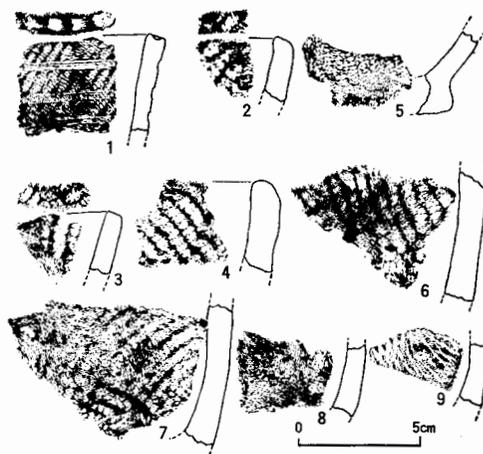
### B. 石 器 (第9図) (図版23A)

本ピットからは、黒耀石の横剥ぎの剝片(6)が1点出土している。バルブ部分は部厚い。特に加工はない。

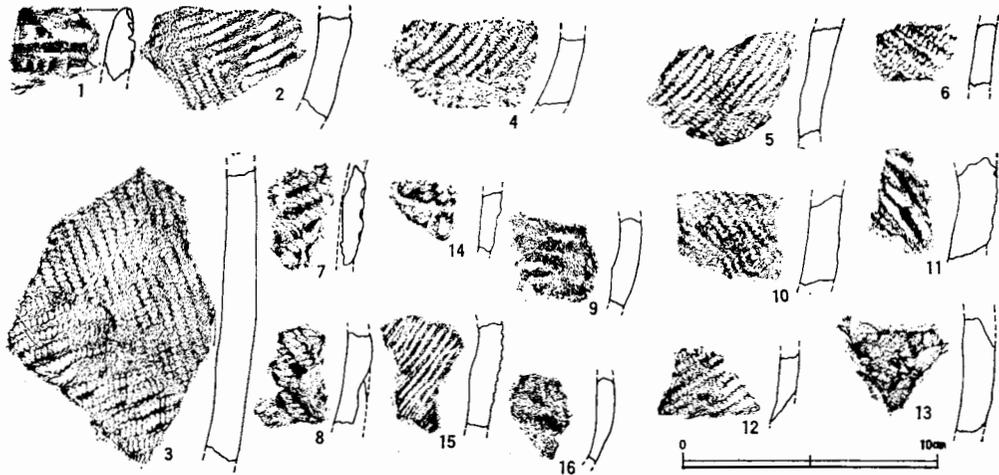
(上野秀一)

### 神社遺構 (第6図、図版7A)

レンガ積みの旧社殿の土台跡と、その内側に15個のピットが検出されている。



第12図 第4号ピット出土器拓影



第13図 第5号ピット出土土器拓影

まず内側に検出されたピットの概要について記して行く。直径50cm、深さ50cmの円形を呈するものが大部分であり、中に砂がつまった状態で発見された。この内8個のピット（第6図P-1・P-2・P-3・P-4・P-5・P-6・P-7・P-8）は、方形をなす一定の規則的な配列をもって存在している。

1921（大10）年発行の『白石村誌』「神社・仏閣」の記載によると、白石神社は、1872（明5）年4月にこの地に置かれ、1891（明24）年5月に白石村民の鎮守として神武天皇をまつり村社として新築され、本殿間口1間（約1.8m）、奥行1間4尺（約3m）、拝殿間口3間（約5.4m）、奥行7間（約3.6m）であったと記されている。先きの8個のピットは、この数値の配列と完全に一致している。これらのピットは、明治24年に新築された社殿の礎石を埋めたピットか、あるいは柱穴であろうと考えられる。尚この社殿は、1897（明30）年に焼失し、1901（明34）年に再建されたという。

レンガ積みの旧社殿跡は、1967（昭42）年2月に焼失した神社社殿の土台である。1970（昭45）年発行の『白石発展100年史』によれば、1925（大正15）年にこの社殿が新築され、本殿間口1.8m、奥行3.6m、拝殿間口9m余、奥行6.3mであり、その後1940（昭14）年に改築され、本殿間口1.8m、奥行3m、拝殿間口5.4m、奥行6.3mになったと記載されている。しかし、発掘された社殿の土台は、大正14年再建されたとしているものより若干小さく、昭和15年改築されたとされるものより大きい。

現在の白石神社宮司の説明によると昭和42年に焼失した社殿は、大正年間に建てられ、その後改築が若干行なわれているものの大規模な変更はなされていないという。そして社殿の規模は、本殿間口1間（約1.8m）でその両側に「たたみ」が1枚ずつしかかれていた。拝殿間口は4間（約7.2m）、奥行3間（約5.4m）で造りは「流れ造り」であったという。発掘されたレンガ積み社殿跡は宮司の説明された数値と一致している。2度にわたって火事に会い焼失している事は、レ

ンガ積み土台内側にしきつめられた粘土層上面に炭化物の層がみられる事よりも理解される。

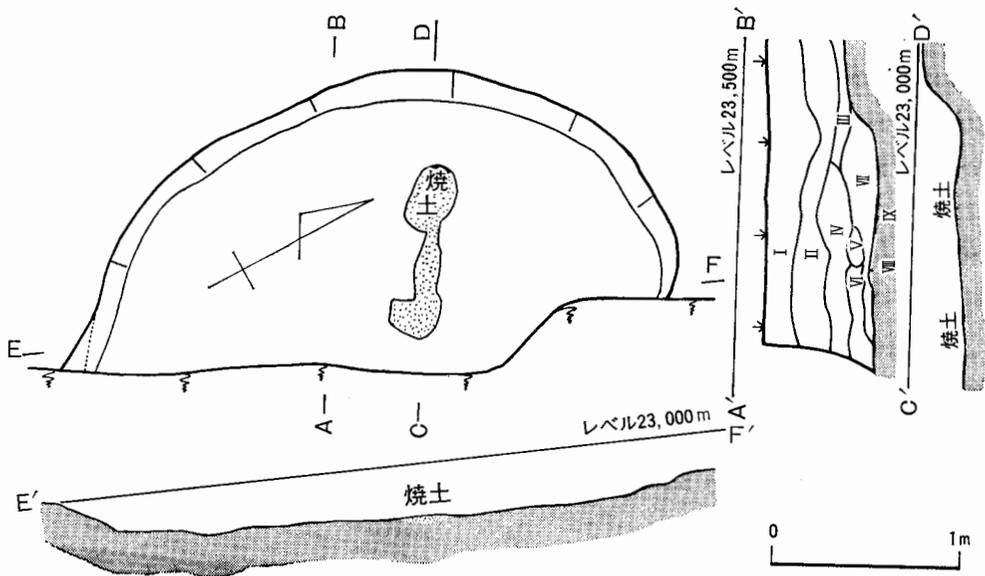
レンガ積み土台内側より検出されたピット中8個は、その性格が明らかにされたのであるが、その他のピットは、レンガ積み土台に伴い社殿をささえる支柱をうめたピットであったのではとも推測されたが、規則性をもって配列されてはおらず明確な性格は不明である。

(羽賀憲二)

## 第2節 住 居 跡

### 第1号竪穴住居跡 (第14図) (図版3)

Ⅱ区 J5, 6区にわたって存在する。南東隣接地が造成工事により削平されており、その切断面にセクションが露呈していた。現存部分は約3分の1程度であろうかと推察される。



第14図 第1号竪穴住居跡実測図

竪穴の埋没状態は、次のとおりである。

第Ⅰ層：黒色土層。草木の根が入り込み明らかに2次的攪乱を受けている。

第Ⅱ層：黒色土層。草木の根があまり届いておらず、吸湿性を有し粒子が細かい。

第Ⅲ層：真黒色土層。2次的な移動を受けることなく存在し、第Ⅱ層より更に吸湿性にとみ、粒子が細くなる。

第Ⅳ層：黒褐色土層。第Ⅱ層の黒色土が多く、これに黄褐色基盤粘土層が若干混じる。

第Ⅴ層：焼土。若干の焼土がブロック状に存在する。

第Ⅵ層：褐色土層。黒色土と黄褐色基盤粘土の混在により作られる。

第Ⅶ層：暗褐色土層。いわゆる漸移層的な土層で第Ⅲ層真黒色土と第Ⅸ層黄色基盤粘土の混合

によって作られる。

第Ⅷ層：褐色土層、第Ⅵ層に近い状態であるが、粒子が若干細くなる。

第Ⅸ層：黄褐色粘土層。本台地の基盤をなすものである。

竪穴住居跡掘込み面は、第Ⅸ層に至って確認される。

現存部は、壁上端より南北 315 cm、東西残存部 150 cmを算する。

平面形は、現存部分より想像をたくましく推察すれば、円形、楕円形が考えられる。しかし、後述する如く北海道の該時期の竪穴住居跡の形態には、特異なものが見られる故、定かなことはいえない。

壁の状態は、深い部位で約20cm、浅い部位では約10cmである。立上りは、割合なだらかであり覆土と明確に区別できる。

焼土は、中央部より北東部にわたって細長く見られる。厚さ 5 cm 約であり、中央部近くと、北東に偏した 2 箇所約 30cm にわたって多く見られる。他のものは、この両者より散乱した如く状態にある。北東に存在する炉の西側に若干の木炭が見られる。

床面の状態は、炉近辺においては、堅緻に踏み固められており、周辺にしたがって軟弱となる。中央に向ってゆるやかな傾斜を見せる。

柱穴、及び他のピット類は現存部には一切見られなかった。

この住居跡の構築年代を決定するに足りる十分な量の土器は得られなかった。あえて求めるならば平岸天神山遺跡（菊地1966）出土土器に近いものか、或はこれよりわずかに新しい時期に位置づけられよう。

該時期における住居跡の報告例は、道央部においてはいまだなされておらず、これに近いものを求めるならば、道南地区の該時期とほぼ時を同じくするであろうサイベ沢 B 遺跡（森田1967）、本住居跡よりやや新しく位置されるであろう函館市見晴町遺跡（森田・高橋1966）が得られる。サイベ沢 B 遺跡においては、サイベⅦ式土器期に同定できる 2 基 見晴町式土器期に同定できる 1 基の計 3 基の住居跡が発掘されている。しかし、サイベⅦ式土器期に比定される住居跡は複合しており、更に農道工事により削除されており、全容を窺いえるにはやや不十分である。見晴町式土器期とされる 1 基は、平面プランは五角形に近い隅丸方形を呈し、6 個の柱穴と 2 箇所の地床炉を有する。サイベ沢Ⅶ式土器期とされる 2 基もこれに近い形となろう。

見晴町遺跡の場合も、そのプランを定かに推定し得るだけの資料とはなり得ない。現存する隅丸方形を呈する一辺より想像をたくましくすれば、五角形状を呈する隅丸方形プランとなり得る可能性を十分に秘めていると言えよう。

以上の類例より本住居跡を見れば、楕円形、又は、見晴町式土器期に見られるプランを呈するものと考えられよう。

（加藤邦雄）

#### A. 土 器 （第15図）（図版10A）

覆土出土土器（1～17）



第15図 第1号竪穴住居跡出土土器拓影

口縁部に磨消帯をつけ、以下に幅約0.3cmの隆起帯を横走させる小形土器破片である。色調は灰褐色を呈し、厚さ0.4cmである(1)。口縁部破片で、撚りのゆるい縄文原体を回転させ施文する(2、3)。器形は、小形の鉢形土器であり、3は小突起が見られ、口縁が若干外反する。焼成は良好で、2は灰色、3は黒色を呈する。器厚は1.0cm前後である。2、3に類似する胴部破片(4~6、10、11)。口縁部破片であろうが、表面が剝離して詳細は不明である(12)。黄褐色を呈する6、10の他は黒色である。12は、胎土中に微量の繊維質を混入する。器厚は、1.2cm内外である。胴部破片で縄文のみのもの(7~9)と底部近くの破片であり無文のもの(13、16、17)、上半に縄文を施文し、底部近くを無文とするもの(14)、縄文を施文するもの(15)がある。

器形は、円筒形深鉢で、焼成は良く、色調は茶褐色を呈する。器厚は0.7~1.5cmである。

褐色土層出土土器(18~22)

指頭による押圧をつける貼付帯を垂下し、地文に縄文を配する(18)、縄文のみのもの(19~22)、縄文を回転せずに押圧するもの(20)。

器形は、すべて円筒形の深鉢形である。焼成は概して良好であり、色調は茶褐色である。胎土中には、22を除いてすべて繊維質を含む。器厚は、1.5 cm前後である。

床面直上出土土器 (23~28)

口唇上に縄文を有し、口縁部より頸部にかけて4条の沈線を横走し、口唇部より縄文原体を押圧する貼付帯を長さ約4 cmにわたって垂下する。地文として縄文を底部近くまで施文する。器形は、若干波状口縁をなす小形の土器で、胴部がわずかに脹る鉢形土器である。内面には炭化附着物が見られる。焼成は粗であり、色調は茶色となる。器厚は0.8 cmである(23)。

縄文のみの胴部破片(24~27)と底部破片(28)がある。これらは胎土中に繊維を混入する。焼成がよく、茶褐色を呈する。器厚は1.0 cm前後である。

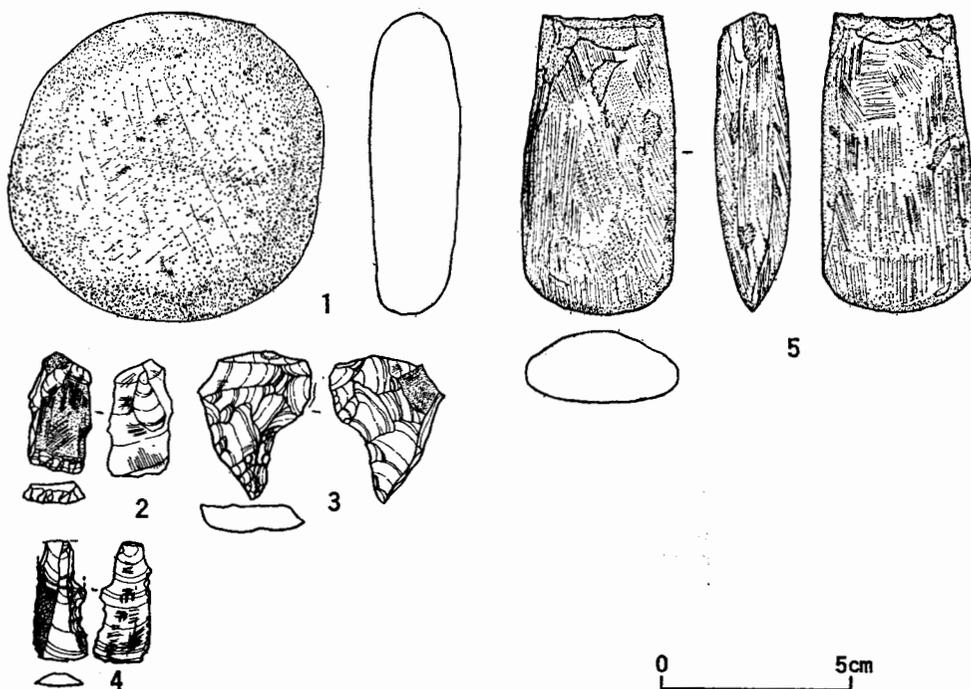
床面出土土器 (29~32)

縄文を施文した小破片のみで、その全貌をうかがうことは出来ない。30は、胎土中に繊維質を混入する。その他は、床面直上出土の土器と同一である。

出土土器の総数を拓影に示したが、これらをもって積極的に年代を決定することは、非常に困難である。

7、8の土器は、平岸天神山遺跡出土土器に類似する。2~6、9~12の土器は、縄文原体の様相より見れば、本遺跡出土第Ⅱ群土器に近く、いわゆる伊達山式土器(岩崎他1970)に最も近いものといえよう。

18~32は一括資料として取り扱える状態にあって出土しており、18、23は、手稲砂山遺跡出土



第16図 第1号竪穴住居跡・第1号竪穴住居跡状遺構出土土器実測図

土器（石川1967）に最も近い存在にあると言える。本遺跡発掘区出土土器に対比して見ると、その焼成、胎土、色調等の総合的所見により第Ⅰ群土器に最も近い。第Ⅰ群土器は、その組成より平岸天神山遺跡出土土器に近いものである。しかし18、23に見る文様は、平岸天神山遺跡出土土器に全く見られないところより、平岸天神山遺跡出土土器よりやや新しく位置づけられる可能性も考えられよう。（加藤邦雄）

#### B. 石器（第16図）（図版22A、23A）

石器は、本堅穴からは少量しか出土していない。

##### 褐色土層出土石器（1、2）

すり石（1）円盤形の河原石である。ほとんど原石面のままであるが、a、b両面を粗くこすっている。石器製作に関連したすり石と思われる。

搔器（2）縦長剝片を素材にして、a面下部に背の高い二次加工を入れ刃部を作出している。a面には幅広く原石面が残る。

##### 床面出土石器（3、4）

石錐（3）半両面加工を施こし、先頭部および柄部を作っている。a面左には切断面があり、右には背の高い二次加工がある。

縦長剝片（4）a面右に二次加工があり、b面右には使用による不規則な刃こぼれがある。a面右上と左上は欠損している。b面には、短軸および長軸方向の短かい擦痕が無数に観察される。（上野秀一）

#### 第1号堅穴住居跡状遺構（第17図）（図版4）

ⅢA10、ⅢB10、ⅡA1、ⅡB1、にわたって存在する。

堅穴の埋没状態は

第Ⅰ層：整地層。整地による2次堆積が明瞭な層である。

第Ⅱ層：黒色土層。粒子が粗く粘質をおびる。

第Ⅲ層：黒色土層。粒子が細かく極く微量の黄褐色粘土が混入する。

第Ⅳ層：黄褐色土層。第Ⅲ層の黒色土と第Ⅷ層の黄褐色粘土の混合によるもので、第Ⅷ層が多く混合する。

第Ⅴ層：褐色土層。第Ⅲ層黒色土と第Ⅷ層黄褐色粘土が混り合う。

第Ⅵ層：暗黄色土層。第Ⅷ層の黄褐色粘土に若干の黒色土が混入する。

第Ⅶ層：黄色土層。第Ⅵ層より、より第Ⅷ層に近いが、若干暗い感じがする。

第Ⅷ層：黄褐色粘土層。本遺構を乗せる台地の基盤をなす。

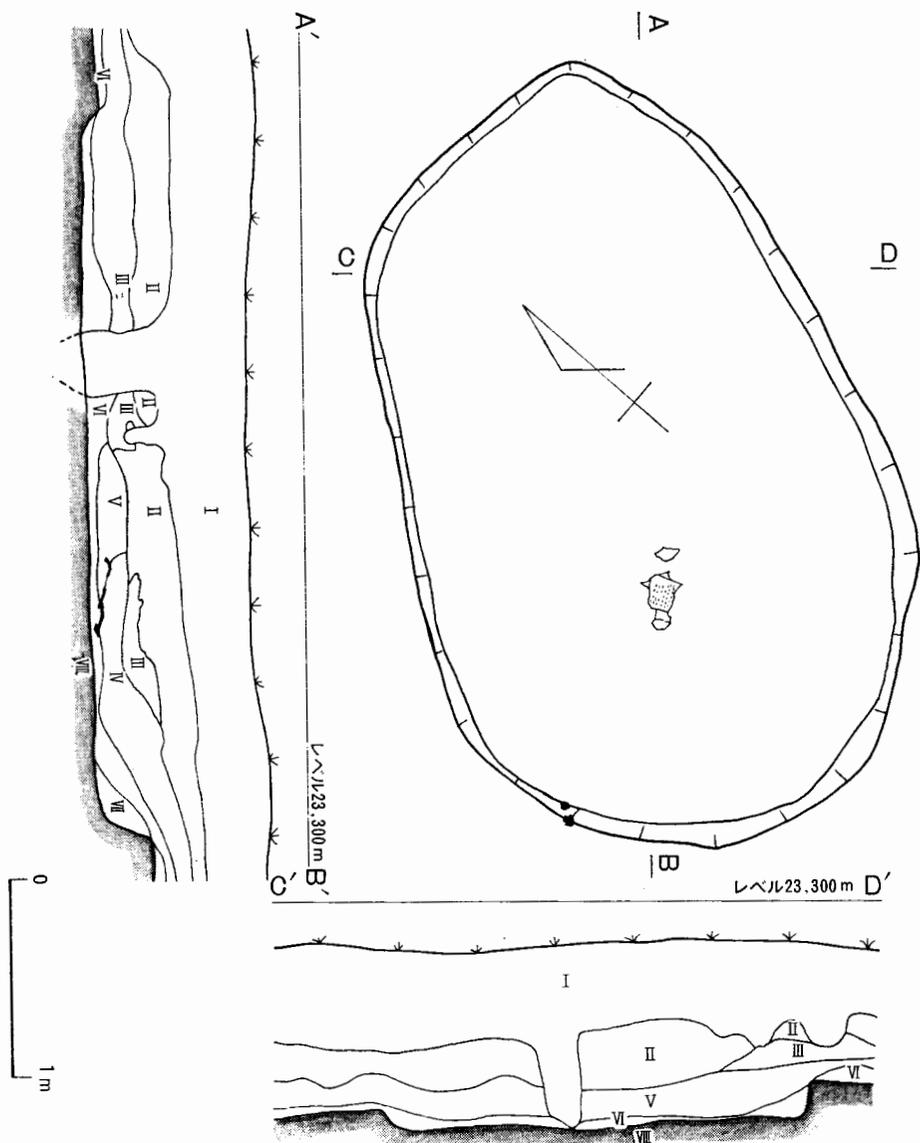
堅穴の掘込み面は、第Ⅷ層黄褐色粘土層により明確に確認出来る。

大きさは、壁上部で長径412cm、短径最大幅253cmである。

平面形は、卵形に類する五角形に近い状態となる。

長軸は、N-40°-Eとなる。

壁の状態は、地山が北西にゆるやかな傾斜を見せているために、南東の壁高がより高くなる。



第17図 第1号竪穴住居跡状遺構実測図

東壁高20cm、南壁高25cm、北壁高12cm、西壁高9cmを計ることができる。立ち上りは、東側部では急傾斜を見せるが、他の部分ではゆるやかな傾斜となる。

焼土は、これを認めることができなかった。

底面は、平坦に掘り込んでいるも、極めて軟弱であり、人為的に踏み固められた状態は見られなかった。

柱穴、及びピット類は、発見することが出来なかった。

本遺構を一見するとその形状は、あたかも竪穴住居跡であるかの如く感じが強い。しかし、覆

土中よりわずかの遺物と底面近くに完形土器1個体分が発見されたのみで、床面と考える底面にも炉と思われる焼土はおろか、一切の焼土・炭化物等を検出することができなかった。床面と考えるには、その状態が極めて軟弱であり、生活の痕跡が何ら残されておらず、柱穴、及び他のピット類の検出は全くできなかった。

以上述べた如く、本遺構を住居跡とする積極的な証左を得ることができなかった。堅穴状の落ち込みが明瞭に認められているのみで、その性格を決定する条件は、何ら具備しておらず不明である。

時期は、朝日トコロ遺跡出土第6類土器に当てられよう。

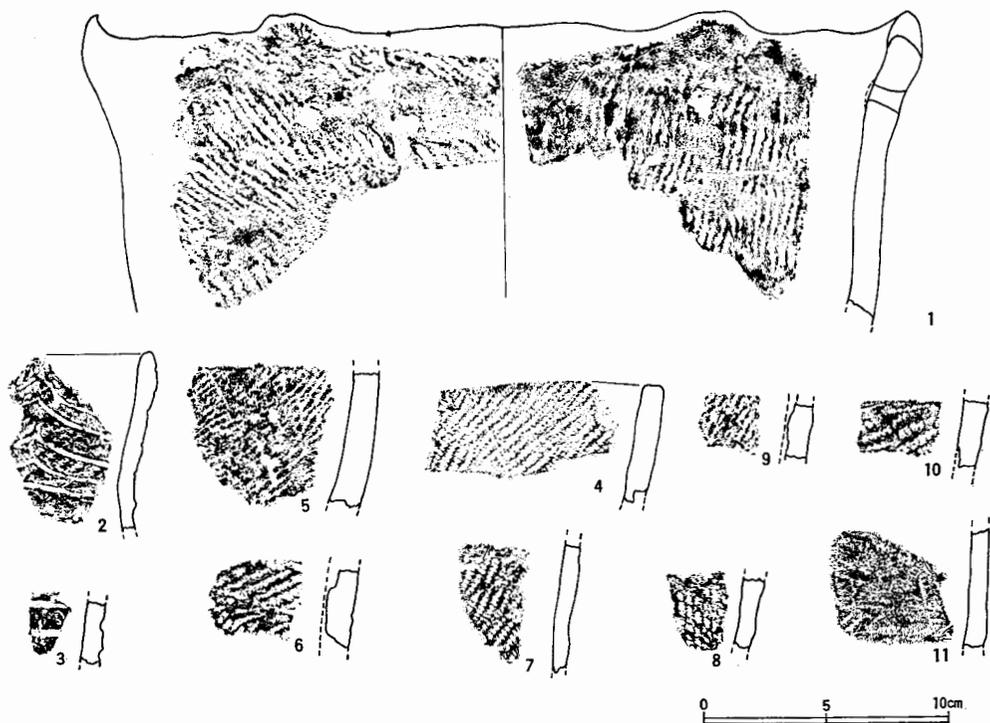
(加藤邦雄)

#### A. 土器 (第18、19図) (図版9、10B)

##### 完形土器 (第19図1、図版94)

口径16.8cm、高さ25cm、口縁部に6個の小突起を有する波状口縁となる。頸部にて若干のくびれを見せ、肩部より胴部上半に脹みを有し底部へと移行する。底面はわずかに揚底となる。口唇上に連続刺突を施文し、口縁部に円形工具による刺突文(内面突縮文)を2cmの間隔にてめぐらす。底部約4cm幅以外すべてに縄文を施文する。縄文原体は、長さ約4cmの紐を使用し両端に結節を有する。縄文は不鮮明となる部位が多い。

胎土中に小石を含み、繊維を含む。焼成は概して良好である。色調は、口縁部より頸部にかけて黒色、以下黄褐色となる。



第18図 第1号堅穴住居跡状遺構出土土器拓影

器厚は0.9cm前後である。

#### 土器片（第18図、図版10B）

表裏に縄文を施文し、頸部近くに約3cm間隔にて刺突文（内面突瘤文）を施文する。その一部は、完全に裏面に突き抜けている。

器形は、6個の小突起を有し、頸部がわずかにくびれ、胴部にやや脹みをもたせた深鉢形である。

胎土中に小石と微量の繊維を含み、焼成良好で、黒色を呈する。器厚は1.1cmであり、復元推定によれば、口径約30cmとなる(1)。

地文としての縄文と沈線による文様の組合せである。口縁部が波状となり、これに平行な沈線を描く(2)、横走る沈線となる(3)がある。

器形は、波状口縁となり、頸部にわずかにくびれを見せる。焼成は良好で、褐色を呈し、器厚は0.7cmとなる(2)。器形は、うかがい得ないが、焼成良好で黒色となる。器厚は0.8cm(3)。

口縁部破片で縄文のみのも、平口縁の鉢形土器であり、裏面は、器面調整を行ない光沢をおびる。表面は黒色にして、器厚は0.9cmである(4)。

胴部破片であり縄文を施文する(5~10)。器形は、全形を知り得ないが鉢形となろう。7は、薄手であり、8は、底部近くの破片である。黄褐色を呈する(5~6、8、9)、黒色となるもの(6)がある。10は、灰黒色を呈する無文土器である。器厚は7が0.6cm、他は1.0cm前後である。

遺構底面近くで発見された2個（第18図1、第19図1）は、朝日トコロ貝塚出土第6類土器と全く同一時期のものであろう。

覆土中より出土した土器は、2・5・7より見て縄文時代後期中葉の土器とできよう。

（加藤邦雄）

#### B. 石器（第16図）（図版22B）

石器は、本堅穴の覆土中から1点出土したのみである。

石斧(5) 素材を荒く打調し、全面を研磨したものである。定角式で、b面の曲面は弱く平坦である。両刃で、断面は少し非対称形である。整形痕は、a面が右下りが主体で、長軸方向が若干あり、b面は、長軸方向が主体で、短軸方向が若干ある。側面は長軸方向である。刃部の平面形は少し右下りである。柄部は、少し欠損している。

（上野秀一）

## 第5章 遺構外出土遺物

本遺跡の各発掘区より得られた遺物は、前述の如く、何ら層位的な出土事実は得られなかった。以下にそれらの概要を述べよう。

### 第1節 土器及び土製品

出土土器は、縄文時代中期より縄文時代後期、縄文時代晩期、続縄文時代、擦文時代の広範にわたり、それらが雑多に出土している。ここでは、従来発表されている知見をもとに、便宜的に幾つかの群別を行ない説明を加えた。

#### 完形土器 (第19図2~4、図版9-2~4)

(2) 口径12.2cm、高さ16cm、口縁部に4個の突起を有する波状口縁となる。頸部にわずかなくびれをみせ、肩部に脹みをもたせる深鉢形となる。器面胴部まで斜行縄文を施文し、以下無文となる。縄文は、ところどころ消失している。

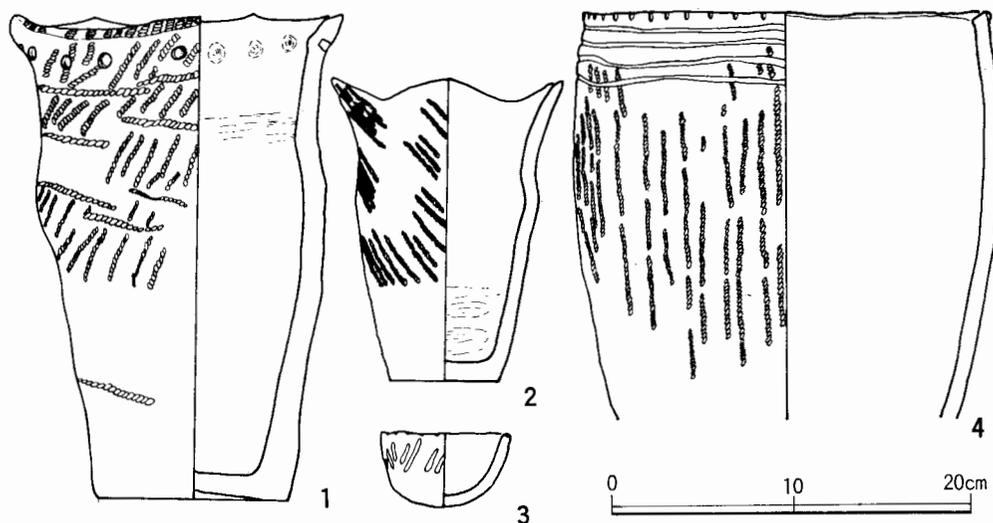
胎土中に若干の砂礫を混在し、焼成は、概して良好と言え、色調は灰色に近い。

器厚は、約0.8cmである。第VI群土器に属する。

(3) 口径7cm、高さ4cm、小形の土器である。口唇上に刻み目を施し、器面に、長さ1cmから2cmの刻み目をつける。

胎土中に微少の石英片を含み、焼成よく灰色に近い褐色を呈す。器厚は0.6cm、第XI群土器に属する。

(4) 口径21.5cm、高さ現存約21.5cm、樽形の器形となる。口唇を若干外反させ、刻み目をつけ



第19図 第1号竪穴住居跡状遺構出土土器(1)、発掘区出土(2~4)土器

る。頸部に4条の横走する沈線を配し、以下縄文である。

焼成よく灰色を呈する。第Ⅱ群土器に属するものであろう。

### 第Ⅰ群土器（第20図1～30）

#### A類（1～15）

縄文を地文とし貼付帯を有し、口唇上、貼付帯上、あるいは、頸部より胴部にかけて連続刺突文を施文する。本類における連続刺突方法について簡単に説明する。

（a）半截竹管工具を用い、土器器面左から右方向へ順次施文する。施文工具を器面に対して、約 $20^{\circ}$ ～ $30^{\circ}$ に当て、右から左方向へ加える力と、器面外側より内側へ加える力を、同一時に働かせることにより施文する。その後、次の施文位置へと施文工具を移動する際に、施文原体を器面からはなすことなく、浅い沈線を描きながら移動する。為に、この文様を拓影によってのみ見れば、あたかも単なる沈線としか見えない。文様は、前述の異なる方向より2つの力を同一時に加える刺突と、単に、器面外側より内側に加える単一方向の力によってのみ施文される2通りが見られる。この二者が同一個体に見られる。

（b）円形竹管工具により（a）と同一施文を行なうもの。

（c）先端の平らなヘラ状工具により（a）と同一施文を行なうもの。

（d）半截竹管の内面を、器面に対して $20^{\circ}$ ～ $30^{\circ}$ の角度に当て（a）と同一施文手法を用いて施文するもの。

尚、縦方向に施文する場合にも、（a）と同様な施文手法を用いる。

地文としての縄文を施文した後、口縁部に横走する2条の貼付帯と、更に、これより垂下する貼付帯を配し、貼付帯上に（a）の手法による文様を施文する。刺突を施文後、貼付帯に整形を加えており、刺突の形が均一でなく崩れが見られる。これらの作業の終了後、口縁より頸部に至る4条の（b）の手法による施文が横走する。土器内面に幅約3.0cmにわたって縄文を施文する（1）。

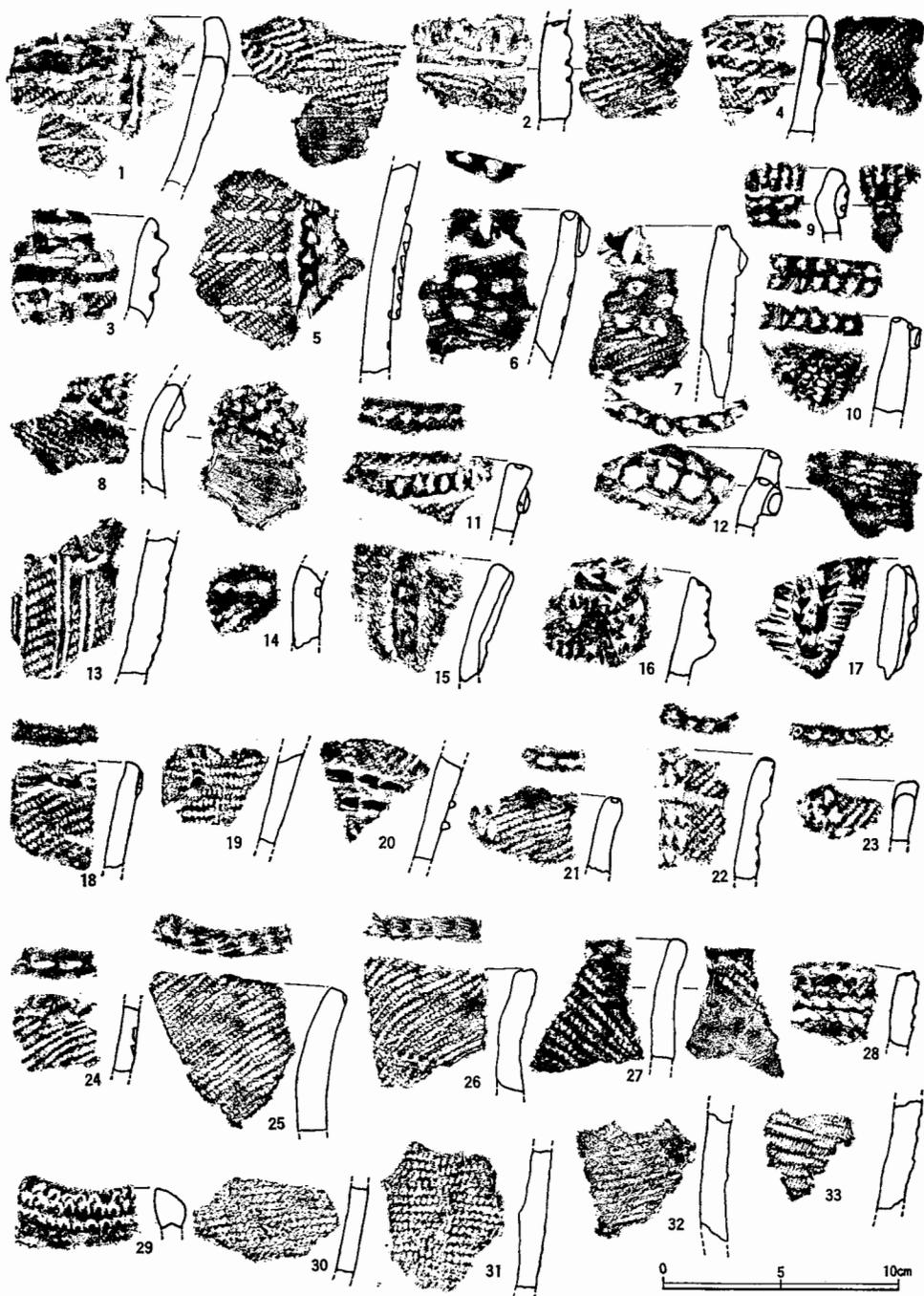
口唇部に横走する貼付帯は剥脱している。口唇上と貼付帯・口縁の境には、それぞれ（a）による文様があり、頸部には、横走する2条の（c）による文様が施文される。表面には、縄文が施文されていたようである。内面は、現存部すべてに羽状をなす縄文を有する（2）。

口唇部に横環する貼付帯を持ち、口唇上と貼付帯上に（d）の手法による文様、口縁部に（d）と同一原体を用い（a）の手法による横走する文様を構成する。地文は縄文である（3）。

懸垂する貼付帯と胴部に（a）による手法の文様を有し、地文に縄文を配する（5）。

6、7は同一個体であろう。地文の縄文を施文後に太い貼付帯をめぐらし、底部方向より口縁部に向け力を加えながら、竹管状工具の側面を用いて押圧する刻み目を施文する。口唇上には半截竹管工具の先端による刺突を、貼付帯直下には、円形竹管工具の先端による刺突を施文する。その下には、約 $50^{\circ}$ くらいの角度に竹管を土器面に当て（b）と同様手法による文様をつける。以下このくりかえしである。

地文として縄文を施文後、口縁部にやや太めの沈線をめぐらし、口縁内面、口唇上、貼付帯上



第20圖 第 I 群土器拓影

に細い半截竹管工具の先端による刺突を作る(8、9)。

縄文を地文とし、口唇部に貼付帯をめぐらし、口唇上、口唇と貼付帯の境、及び貼付帯上に、半截竹管工具の先端による施文を行なう(10)。

口縁部に貼付帯を横環し、口唇上に左より右方向に力を加える刺突、貼付帯上にへら状工具により刻み目を施文する(11)。同じく口唇上に横走する貼付帯を有するが貼付帯上の文様は、指頭による押圧である。口唇上には、竹管による刺突文があり、内面にも縄文が施文される(12)。13は口縁部破片である。口唇上には、(d)による文様があり、口縁に懸垂する沈線を有する。沈線の施文には、半截竹管の内面を用いているため、2本一組の沈線となる。

胴部破片であり、頸部に横走する竹管による刺突を配する(14)、懸垂する貼付帯に(c)による2条の縦走する文様を描くもの(15)がある。両者とも地文として縄文を有する。

器形は、すべて深鉢形であり、ゆるやかな波状口縁と明確に知れる(1、12)の2点がある。1は、いわゆる朝顔形に近い器形を示す。口縁部がやや外反するもの(8、14、15)がある。他は単純な深鉢となる。

胎土中には、微量の繊維質を含み、若干の小石を含む。

焼成は、非常に良好であり、1の如くは、あたかも鉄鉱石を思わせる感じがある。他もおおよそこれに類する。

色調は、その多くが赤褐色であり、13のみが黄褐色を呈する。

器厚は1.2cm～1.4cmである。

#### B類(16～32)

地文として縄文を有し、半截竹管工具の内面、外面を用いての刺突状の文様を主体とする。

口縁部を肥厚し、口唇と口縁に(d)の手法による文様を有する。口唇部施文の方向は、土器口縁に対し右斜上方より施文し、更に同一箇所より右方向より力を加える施文を行なっている。貼付帯の施文は、右方向より力を加える施文と、同一箇所より手前より同様手法にて施文する(16)。

口縁部破片であろうが口唇部は欠失している。口縁部に縄文を配し、口唇より隆起帯を垂下させる。頸部には、(b)による技法を用いる沈線をかなり乱雑に横方向に描く。隆起帯上には(d)による手法で16と同様な文様を施す(17)。

(d)の手法による文様を有する貼付帯をめぐらす(18)。斜行、縦走する貼付帯上に(d)の文様をつける(19、20)。竹管工具により右から左方向への刺突を施文する(21)、垂直方向からの刺突を口唇上に有し、口縁に縦走する3条の(a)手法による文様をもつ(22)、口唇上は、竹管工具による円形刺突を有し、以下縦走する刺突を(d)による手法を用いて施文する(23)、口唇上及び口唇部にへら状工具による刺突を施文する(24)、口唇上のみ幅の広い工具により(d)の手法による文様をつける(25、26)がある。27は、内面にも縄文を有する。

29は、小形の鉢形の器形を有するものであろう。口縁部に貼付帯を有し、半截竹管工具を直角に刺突する文様を3条施文する。口縁部に貼付帯を有し、口唇上及び口唇に(d)による連続刺突をつけ、貼付帯上にも縄文を施文する。地文の縄文を施文する前に貼付帯をつける例は、この

1点のみである。口唇上、口唇及び頸部近くに2条の連続刺突文を有する(28)。

以下縄文のみの胴部破片である。胎土、焼成、色調すべてより見て本類に属すと考えられる。複節縄文のもの(30、31)、単節縄文のもの(32、33)がある。

器形は、明らかに波状口縁と知れるもの(21~23)がある。いずれも頸部に若干のくびれが見られる。24は、かなりのくびれを見せる。すべて深鉢形であろう。

胎土中には、その多くに繊維と砂粒を含み、19のみには繊維の混入は見られない。

焼成は良好で、色調は、17、19、28が黄褐色を呈する。他は赤褐色であり、A類と同様である。

器厚は、多くは1.0 cm内外で、31、32は1.4 cm程である。

## 第Ⅱ群土器 (第21図1~12)

地文として縄文を施文し、口縁部の折返し、及び貼付帯を有する。

口縁部に幅広の折返しをつける(1)、若干細めの貼付帯をめぐらす(2、3)、口唇上に指頭による波形を作る(4)。

頸部より胴部にかけての破片であるが、貼付帯が1条のもの(5、6)、2条のもの(7、8、9)、3条のもの(10)がみられる。貼付帯は、すべて地文の縄文を施文の後につけられる。地文の縄文は、羽状となる(7、8)、地文と貼付帯上の縄文方向が同じもの(6)がある。

折返し口縁にしており、更に、胴部近くにて一段薄くし底部に至る。頸部に棒状工具にて外側より刺突するために、内側にいわゆる突瘤文を作る。刺突は、棒状工具で器面を突き、更に、これを上下に動かすことにより長方形に近い刺突となる。内面にも縄文を施文する(11)。11とすべて類似するが頸部の刺突は、四角の工具により施文する(12)、両者とも縄文施文後に器面調整を行なうため、縄文の粒子がかなり変形される。

器形は、多くは平口縁の円筒形となる。11のみが頸部にて若干のくびれを見せ、胴部がわずかに脹る深鉢形となろう。

胎土中には、すべて砂粒を含み、繊維質の混入は見られない。

焼成は、概して良好で、色調は3、7~10は褐色、他は黒色を呈する。

器厚は、1.6 cm前後のものが多く、11は0.9 cmである。

## 第Ⅲ群土器 (第21図13~18)

地文として縄文を施文し、細い貼付帯をもって装飾する。

口縁部破片である。口唇部及び口唇上にも縄文をつけ、口縁部に約1.0 cm幅の磨消帯をもち、幅0.7 cmの貼付帯をめぐらす。貼付帯上にも縄文をつける(13)。以下胴部破片であるが、14、15も同様である。刻み目を有す縦走する貼付帯を有する(16)、逆丁字形の貼付帯を有する(17、18)。

器形は、破片で見える限りすべて平口縁の筒形に近い深鉢形となる。18は、頸部に若干の彎曲がみられる。

胎土中には、砂粒を含み、13、14、17にはわずかに繊維質の混在が見られる。

焼成は、13、15、18を除いて粗であり、黒色のもの多く(13、14、16)、17は褐色である。



第21圖 第II、III、IV、V群土器拓影

#### 第Ⅳ群土器（第21図19～22）

沈線と刻み目を有する貼付帯との組合せとなる（19、20）、同じく沈線と指頭による押圧を有する貼付帯をもつもの（21、22）。21は、内面にも縄文を施文する。

器形は、円筒形に近い深鉢が多く、口縁が外反するもの（19、21）がある。

胎土中には、砂礫を含み、19、20を除いて焼成よく褐色を呈する。

#### 第Ⅴ群土器（第21図23～27）

地文として縄文を有し、口縁部に垂下する貼付帯を有する。

口縁部より長さ約5.0 cmの無文の貼付帯を有し、口唇上、及び裏面にも縄文を施文する。頸部に刺突文（内面突瘤文）を有する（23）。口縁突起頂部より縄文原体の先端にて刻み目をつける貼付帯を約5.0 cmにわたって垂下し、内面にも縄文を有する（24）。口縁部に、右から押しつけて作る肥厚帯を有する（25）。口縁部に幅約3.0 cmの磨消帯を有し、突起頂部より縄文原体を押圧する肥厚帯を垂下にし、口唇上にも縄文を施文する（26）。口縁部を肥厚させ、半截竹管工具の内面により横環する三段の連続刺突を有し、突起頂部より連続刺突文を有する貼付帯を垂下させ、内面にも縄文を有し、綾絡文が見られる（27）。

器形は、23を除いてすべて突起を有する深鉢形である。

胎土中には、小石を含み、焼成はおおむね良好で25は黒色、他は赤褐色である。

器厚は、1.2 cmから1.8 cmである。

#### 第Ⅵ群土器（第22図、第23図1～10）

##### A類（第22図1～12）

口縁部に肥厚帯を有し、頸部に円形工具により外面から刺突文（いわゆる内面突瘤文）を作る。すべてに縄文を施文する。

頸部に刺突を施文し、この一帯に磨消手法を用いる（1）、縄文のみに刺突文をつける（2）、口縁部に一段の稜をつけ、その直下に太い円形工具にて刺突を施文し、口唇上、内面にも縄文を施文する（3）、口唇部に刻み目をつける（4）、口縁部に1条の横走する太い沈線をめぐらし、頸部に刺突を有し、内面にも縄文を施文する（5）、口縁部を大きく肥厚させ、表裏及び口唇上に縄文を有する（6、8）、薄手の土器で裏面の縄文を欠く（9）、口縁の肥厚が大きく無文となる（10）、口縁の肥厚がなく、口唇上に細かい沈線を施文する（11）、口唇上に棒状工具にて刺突文をつけるもの（12）がある。

器形は、破片にて知り得る限り2、5、6、7、9は、口縁に小突起を有する波状口縁となる。多くは、頸部にて若干くびれ、胴部のわずかに脹る深鉢となろう。2は口縁部が内彎し、7、11、12は、円筒形の深鉢となろう。

胎土中には、すべて小石を含み、7、10～12以外は繊維質を混入する。

焼成は、概ねく良好であるが胎土中の砂粒が多いため、表面はざらざらした手ざわりとなる。色調は、7～11は褐色を呈し、他は、灰黒色である。

器厚は、その多くが1.0 cm内外である。



第22图 第VI群 土器拓影

## B類 (13~21)

地文としての縄文と口縁部に連続刺突文をめぐらし、頸部近くに刺突文（内面突瘤文）を施文する。

口唇上、及び口縁部に先端の丸い工具による横走する連続刺突を施文する（14）、先端の平坦なヘラ状工具による刺突をつけ、内面に縄文を有する（15）、縄文の撚りがゆるく、更に内面にも同一原体による縄文を有する（13）。ヘラ状工具により同一箇所を2回にわたって刺突し、内面にも縄文を有する（16）、半截竹管工具の内側を使用する連続刺突文をつける（17）、口唇上と口縁に先端の三角形な工具により連続刺突文を作る（18）、薄手の土器で口唇部のみ半截竹管工具の内面を用いる連続刺突を施文し、内面にも縄文を有する（19）、口唇を若干折り返えし刺突文のみをつけるもの（20）がある。21は、多くのものと若干趣きを異にし、口唇及び口唇上に縄文原体を押圧し、口縁部より頸部にかけて三段にわたって、円形工具の先端による刺突文をつける。内面にも縄文を施文する。

器形は、破片で見える限り平縁の深鉢形である。19は、頸部で大きくくびれる。他のものは、頸部にてややくびれを見せ胴部をゆるやかに脹る器形となろう。

胎土中には、すべてに小石、砂粒を含み、13~19は、繊維を混入する。

焼成はおおむね良好であり、色調は黒褐色を呈する。

器厚は、19、20は0.7 cm、他は1.2 cm前後である。

## C類 (22~26) (第23図1~10)

地文としての縄文を持ち、口縁部に2~3段の連続刺突文をめぐらし、頸部近くに刺突文（内面突瘤文）との組合せとなる。

口唇上は指頭で押圧し波形を作り、ヘラ状工具により二段の連続刺突文をつける（22）、内面に縄文を施文する（23~26）、口唇上と内面に縄文を有する（1）、口唇上に先端の円い工具による刺突を施文する。口縁部刺突も同様工具により、内面にも縄文を有する（2）、口縁部磨消帯をはさむ2条のヘラ状工具による連続刺突文をめぐらすもの（3）がある。3と同様であるが、口唇上にも連続刺突文をつけ、内面に縄文を施文する（4、5）、口唇上と口縁部に同一工具による連続刺突文をつける（6）、口縁部に先端の平坦な工具により2条の連続刺突文を横走し、その間に同一工具の側面を使用する沈線を有する（7）、幅広い半截竹管工具の内面による連続刺突文（8）、先端の細い工具により沈線状の連続刺突文を施文するもの（9、10）がある。

器形は、破片で見える限り1、8を除いてはすべて平縁であるが、定かでない。

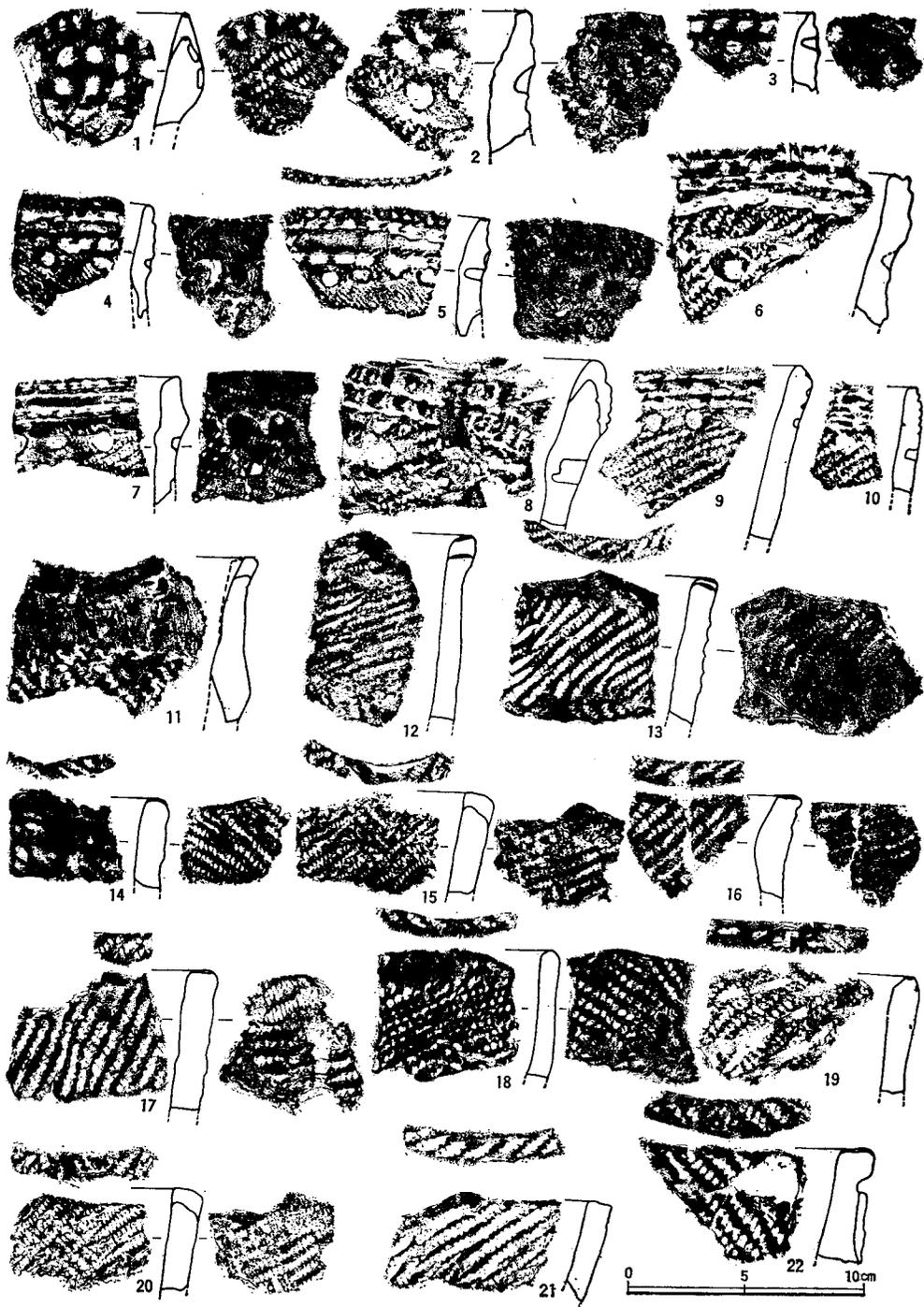
胎土中には、すべて小石、砂粒を含み、繊維を混入する。

焼成はおおむね良好で、25、4、5、7、8は黄褐色であり、他は黒色を呈する。

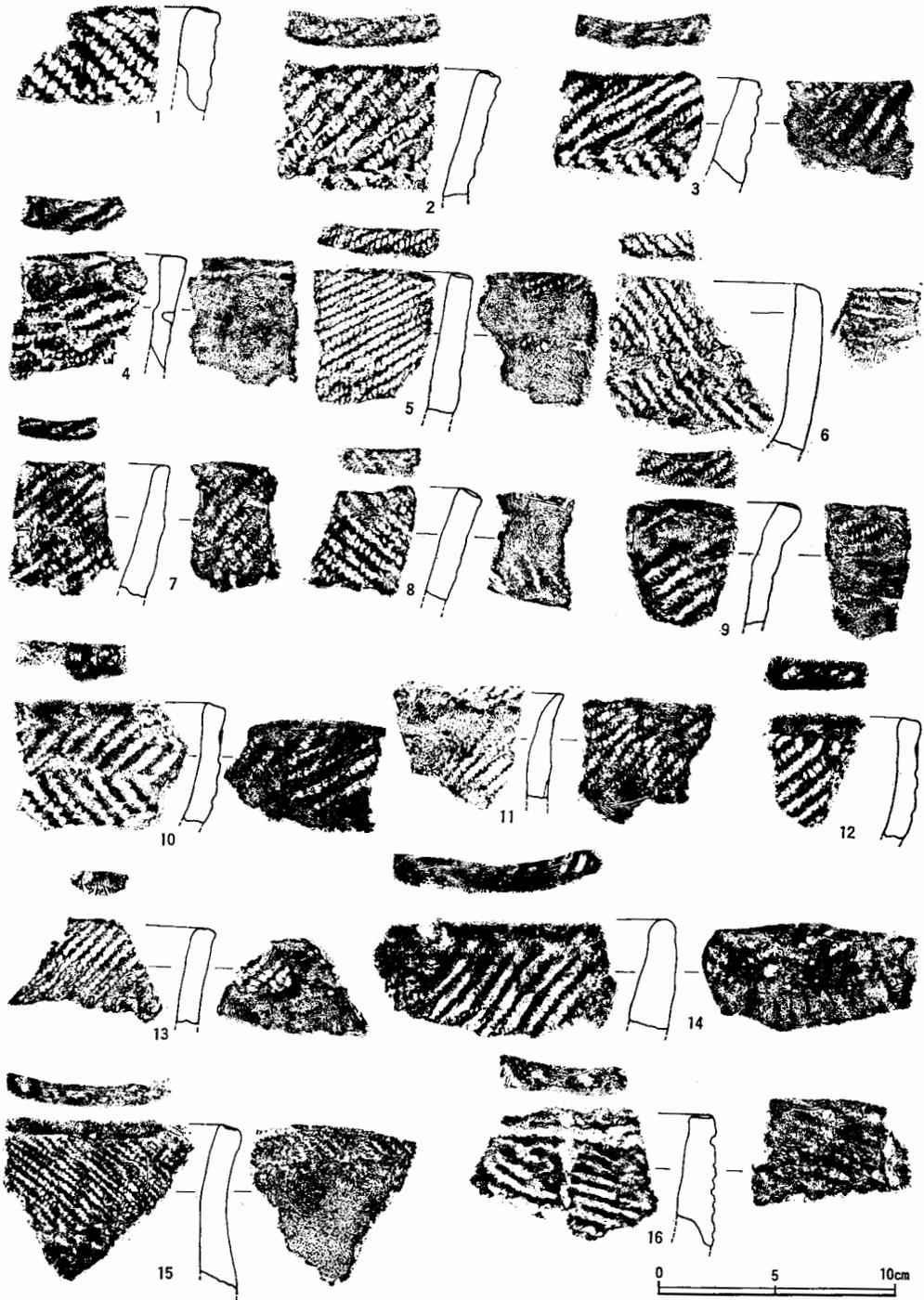
器厚は1.2 cm前後である。

## 第Ⅶ群土器 (第23図11~21、第24図、第25図)

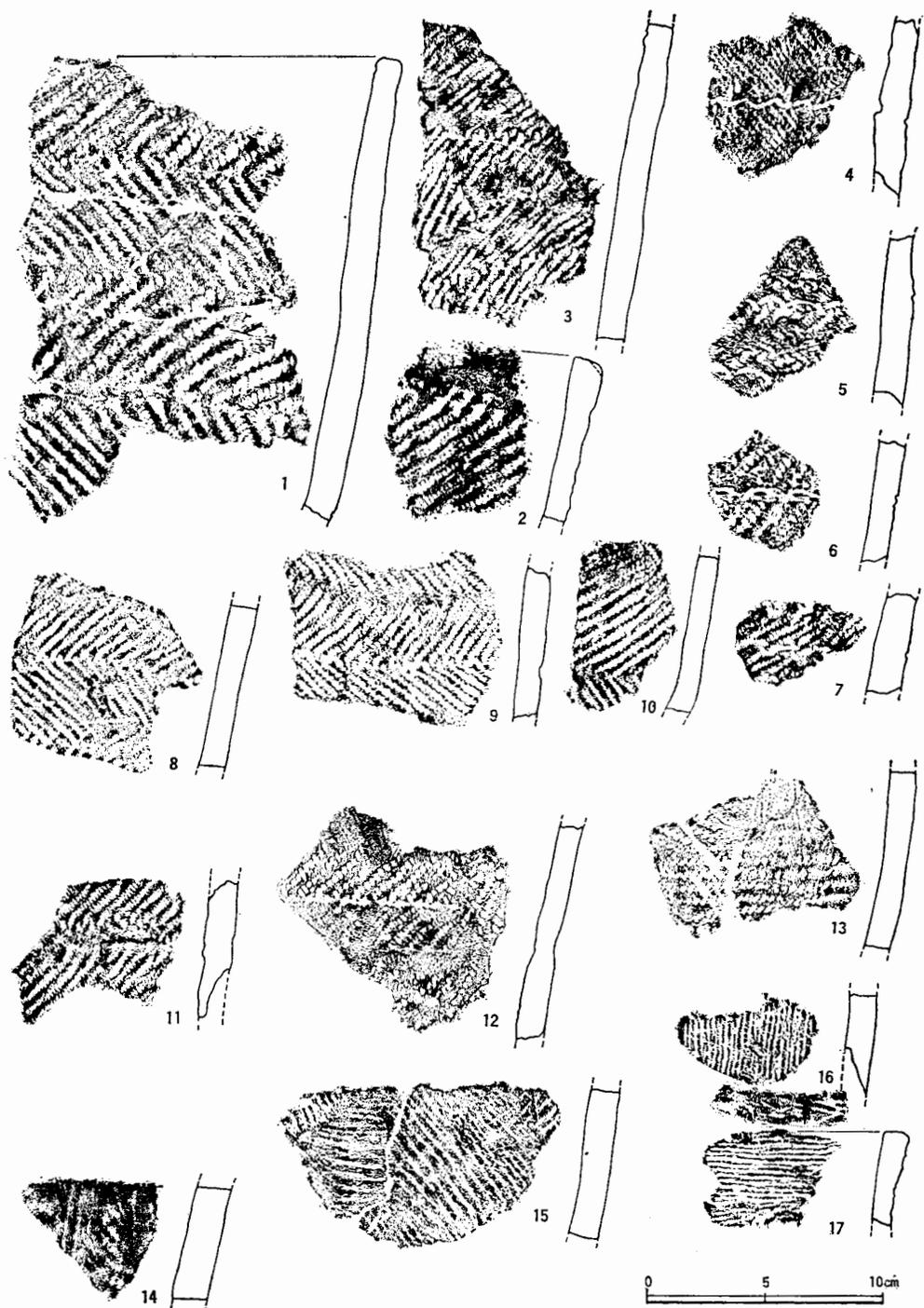
縄文のみを施文する。この類が前述した土器群の何拠に属するか問題があるがここでは、一応一括して取り上げる。



第23图 第VI (1~10, VII群 (11~21) 土器拓影



第24图 第七群土器拓影



第25图 第VII群土器拓影



第26图 第八群土器拓影

口縁部に幅広の無文帯を有する(10)、やや幅の狭い無文帯を有し、口唇上に縄文を施文する11を除いて内面にも縄文を有する(12、13、15~17)。粒子の荒い縄文を口唇上、表裏ともに施文する(19~21)。

以上の土器は、口縁に小突起が見られる鉢形土器である。胎土中に小さな砂礫を混入し、焼成は概してよい。色調は褐色である。

破片で見える限り口縁の小突起は見られないが、多くは前述の第Ⅴ群土器の破片であろう。

そのほとんどが口唇上と表裏に縄文を施文する。第24図1、2は例外的である。羽状縄文となる(10)、口縁に横走する縄文を押圧する(16)がある。11は口唇が薄く口唇上と裏面の縄文を同時に施文する。

胎土、焼成、その他は、前述のものと同様である。

第22図一1は、比較的大きな口縁部より底部にかけての破片である。羽状縄文を施文し、縄文施文後器面調整を行なうため、粒子がつぶれている。2は、斜縄文のみであり、綾絡文を有する(4、7)、羽状縄文(8~10)、斜行縄文(11、12)、横走する縄文(13)、撚糸文(15)、条線文のもの(16、17)がある。

3、5、7、8は、胎土中にわずかの繊維を混入する。

#### 第Ⅷ群土器(第26図)

地文としての縄文をつけ、曲線の沈線による文様を描く土器が主体となる。

刻み目を有する隆起帯を口縁にめぐらし、胴部以下縄文を施文する(1)、人手状の文様を作る(2)、二本単位の環状の曲線と、同じく2本単位の沈線で連結する(3、4)、横走する沈線に曲線を配する(5~8)、方形の文様を形づくる(9)、波状沈線による(10~12)、菱形、三角形の文様となる(14~17)、レンズ状となる(19)、波状沈線文を描き裏面にも縄文を有する(21)、カギ形の沈線に囲まれる縄文帯を残し、磨消手法を用いる(22)、口縁より孤状の沈線を描き裏面も同様であるもの(24)等がある。

器形は、すべて鉢形となるようである。1は、キャリバー状に近い形となろうか。

胎土、焼成ともに荒く不良である。器厚は1.0cm~1.6cmである。

#### 第Ⅸ群土器(第27図1~6)

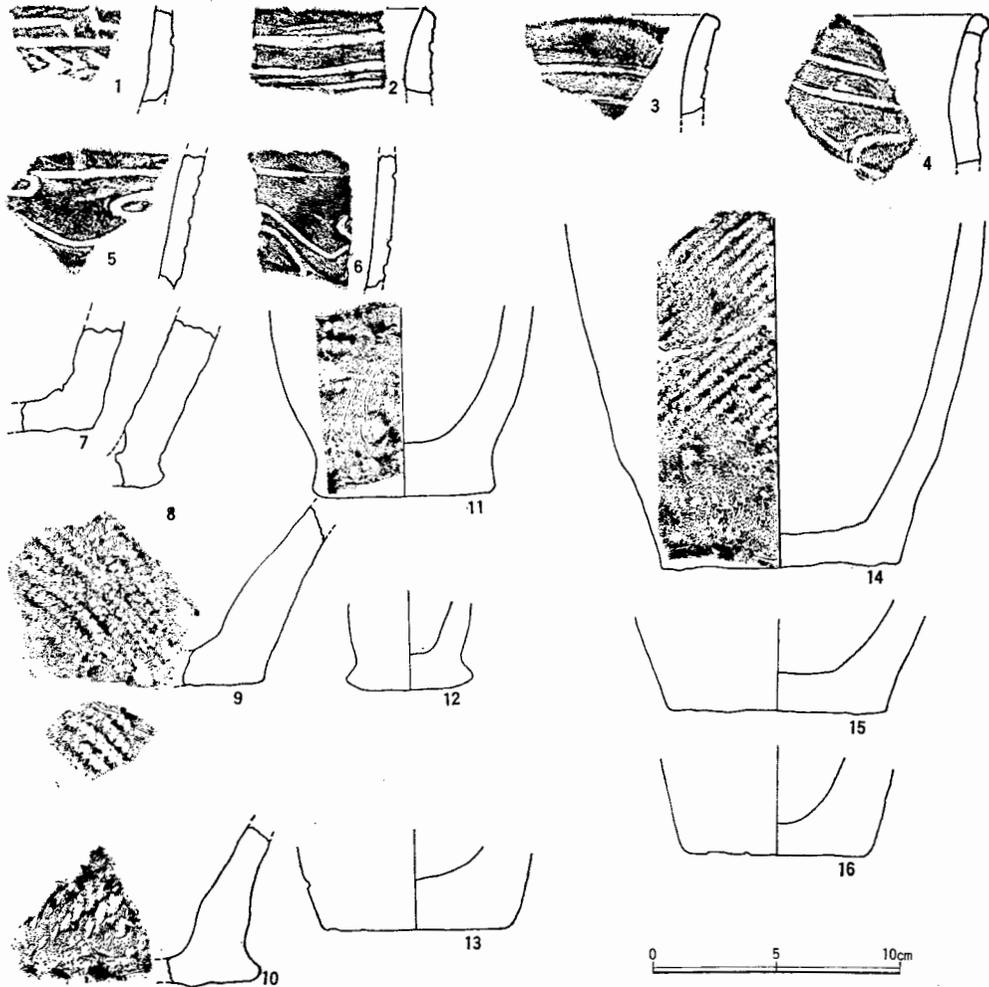
無文を地とし、沈線による文様を構成する。

1は、カギ形の沈線による文様をつける。一部に縄文の見えるところより胴部地文として縄文を施文していたものと思われる。口縁部破片で2~3条の横走する沈線の見られる(2、3)、4も同様であろうが、窺い得る胴部には、沈線による曲線の文様が見られる。胴部破片であり、前述の土器と同様な構成となる文様であろう(5、6)。

器形は、完全には知りえないが、口縁部がやや外反し、胴部がわずかに脹みを見せる深鉢となろう。

胎土は、良好であり、焼成もよく、褐色を呈する。

器厚は、1.0cm前後である。



第27図 第IX群土器拓影（1～6）、縄文時代中期土器底部実測図

### 底部（第27図7～16）

大きく分けて2つの形に分類することが出来る。胴部より底面に到る直前に大きく外反を見せるもの（8、10～12）と、そうでないもの（7、9、13～16）がある。前者は、胴部でやや大きく彎曲を見せ、後者は、その彎曲が少ない。ともに底面は平坦である。底面近くを無文とするものが、その大勢をしめる。9は、底面近くまで縄文をつけ、底面にも見られる。

### 第X群土器（第28図1～14）

#### A類（1～6）

地文とし斜行縄文を施文し、沈線による文様を構成する。

斜行縄文のみのもの（1）。波状口縁に平行する横走する数条の沈線を配し、口唇上にも縄文を施文する（2～5）、口唇上の縄文を欠き、裏面に縄文を施文する（6）。

器形は、すべてゆるやかな波状を呈する深鉢形である。口縁部が若干外反し、胴部がゆるやか



第28图 第X群(1~14)、第XI群(15~34)土器拓影

に脹らむ鉢形となる1の他は、すべて底部より口縁部まで直線となる。

胎土中には、その多くに小さな石英片を混入するが、全く見られない一例(1)がある。小礫片を含み粗雑な感のあるもの(3、4)もある。

焼成は、おおむね良好であり、器面は光沢をおび黒色を呈する(2)、単なる黒色のもの(6)、黄褐色となるもの(1~5)がある。

#### B類(7~14)

縄文を地文とし、横走する数条の沈線と縦走する沈線によって区画する。

口縁部に磨消手法を用いている(7~9)、胴部破片であるが、細い沈線による文様をつける(10)、くの字の連続させる縦の沈線を用いる(11)、斜行する沈線による(12)、2列の縦長の刺突により区画し、以下に磨消手法を用い、再び沈線と縄文を配する(13)、口縁より頸部まで磨消し、以下に沈線を用いて区画するもの(14)がある。

器形は、口縁部をうかがい得る4点のうち2点は、ゆるやかな山形を形成する波状となる(7、8)、すべて鉢形となろうが、いわゆる朝顔形となる(7、8、13)、小形の鉢形となるもの(10)がある。

胎土中には、すべて微量の石英片を含む。焼成は、すべて良好であり、器面をよく調整し、やや黒色をおびる(8、13)、黒色を呈し器面の粗な(10、11)、黄褐色をして、器面のなめらかなもの(7、9、12、14)がある。

### 第XI群土器(第28図15~34、第29図、第30図)

#### A類(15~26)

数条の沈線により三角形、孤状の文様を構成し、地文に縄文を施文する。

口唇上にも縄文を有し、口唇より直接孤状の沈線による文様を作り、頸部に2条の横走する沈線、胴部以下も沈線による文様を描く(15)、16も同様であろう。口縁に2条の横走する沈線をめぐらし、以下15、16と同様手法を取る(17)、沈線が孤状とならず鋭角となる(18、19)、口縁に横走する沈線をめぐらし、これより三角形状の沈線文様をつけるもの(21~24)も同様となろう。

器形は、朝顔形の深鉢でゆるやかな波状口縁となる(15、17、18)、小突起を有する22を除いては、他は平縁の深鉢形となろうか。

胎土中には、すべて極微少の小礫片と同程度の石英片を含む。

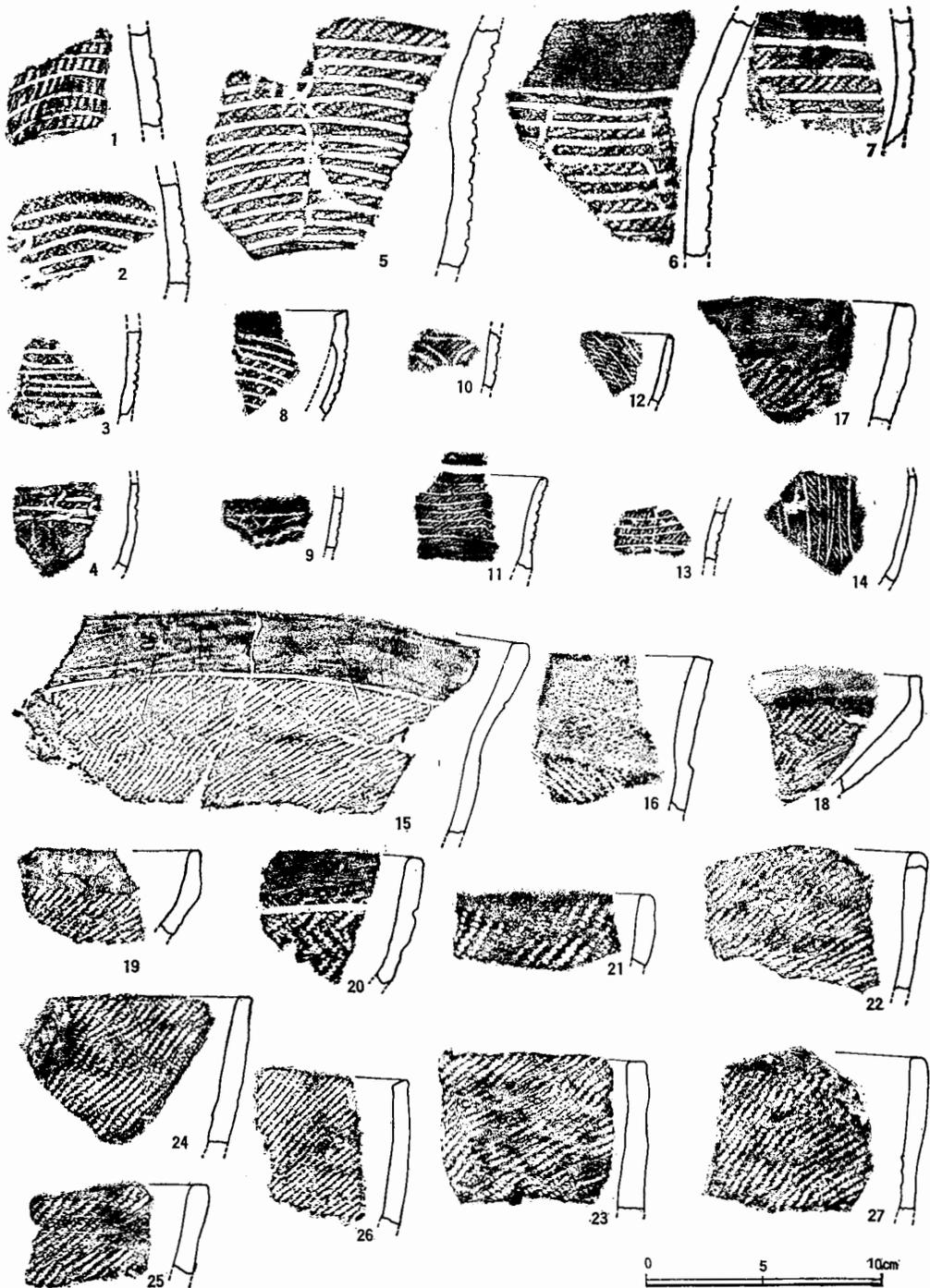
焼成は良好で、色調はすべて黄褐色で、表面は手ざわりがよい。裏面に多量の炭化附着物の見られるもの(18、23、25)がある。

器厚は、1.0cm程である。

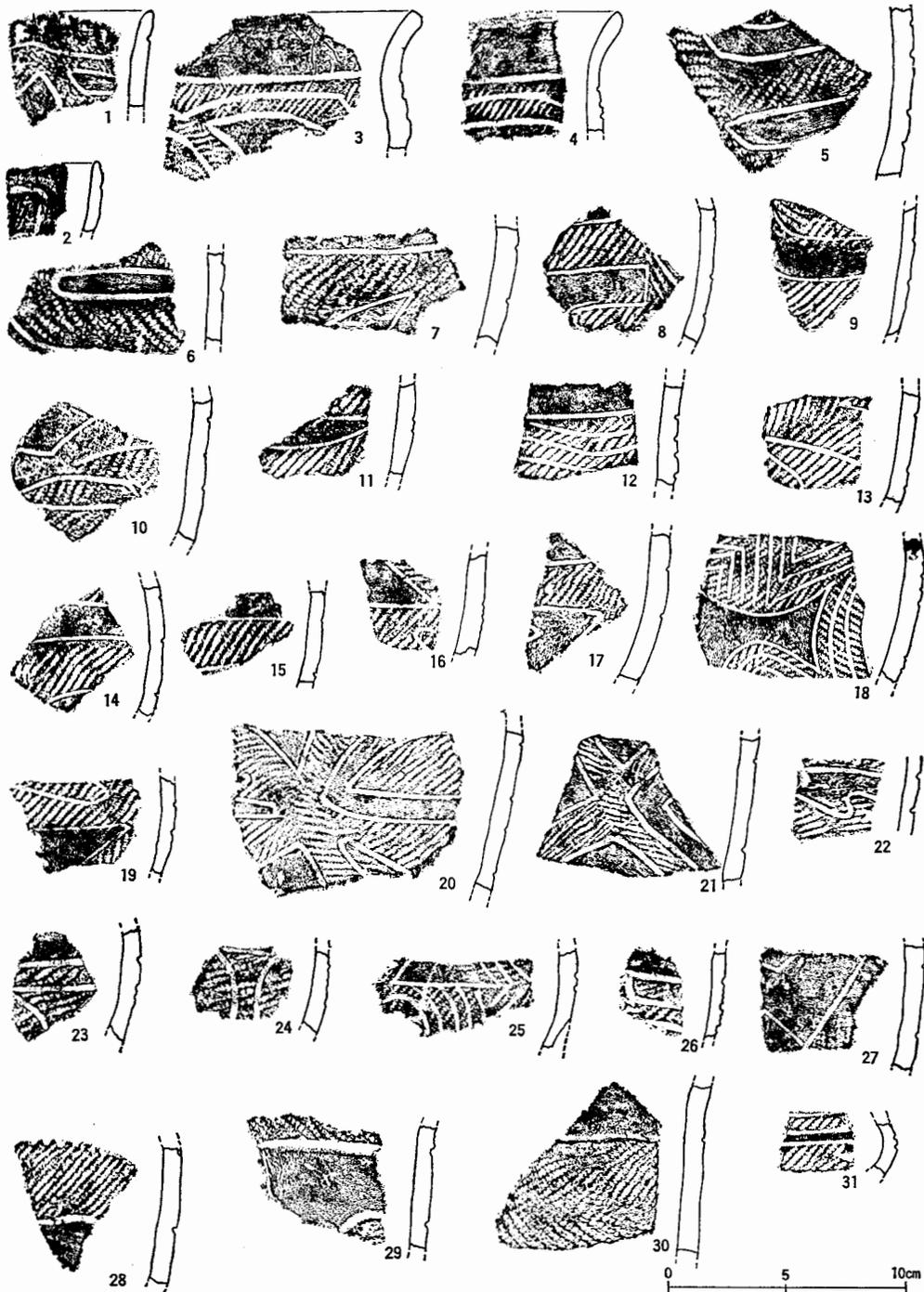
#### B類(第28図27~34、第29図1~8)

横走する沈線とこれを区画する孤状の沈線によって構成される文様と、磨消手法を組合わせる類。

口縁部に磨消手法を用い、横走する数条から10数条の沈線を描き、上の線より下の線にかけて孤状の沈線によって結ぶ手法を有する土器がすべてである。地文には、縄文を施文する。



第29圖 第XI群土器拓影



第30图 第XI群土器拓影

器形は、ゆるやかな波状口縁の朝顔形を呈する深鉢形(27~30)、浅鉢形(33、34、第29図1)壺形(2)、小形土器となるもの(3、4、8)がある。

胎土中には、すべて石英微小片を混入している。

焼成は、非常に良好であり、多くは黄褐色であり、黒色を呈する1点(1)がある。器面調整の研磨により表裏ともに光沢をおびる。

器厚は、0.6~1.0cmである。

#### C類 (9~14)

細い工具による沈線を描き縄文を施文し、口縁部に無文帯を配し、沈線にて三角形を形成する(9、10)、横走る沈線を数条描き、口唇上に縄文を施文する(11)とそうでないもの(12)、縦走る沈線を描くもの(14)がある。

器形は、いずれも小形土器であり、筒形の鉢となるであろう。

胎土中には、すべて石英微小破片を含み、焼成は、11を除いてすべて粗である。色調は黒色を呈するもの1点のみで、(11)他は黄褐色である。

#### D類 (15~20)

口縁部に無文帯を配し、以下斜行縄文を施文する。但し、頸部に横走る沈線をめぐらし、以下縄文を施文するもの(15、16、20)がある。

器形は、口縁が平縁にて頸部に若干のくびれを有する深鉢形となる(15)、ゆるやかな波状口縁の深鉢形となる(16、17)、浅鉢形で口縁部の縄文を磨消するもの(18、19)がある。

焼成は、16、17を除いてすべて良好であり、色調は黒色をおびるもの多く、15のみが黄褐色と黒色のまだらとなる。表裏とも器面調整を行っており光沢を有する。

器厚は、0.8~0.9cmである。

#### E類 (21~27)

地文としての縄文のみを施文する。

縄文は、すべて斜行縄文であり、器形は、深鉢で平口縁が大部をしめる22、27の如くゆるやかな波状口縁となる2例がある。口縁より底部にかけて直線となる。

焼成は、おおむね良好であり、色調は灰色(21)、黒色(22、24)、茶色(23、25)と黄褐色を呈するもの(26、27)がある。表裏ともよく器面調整を行ない、内面に炭化附着物が見られる(22、27)、表面にも見られるもの(24)がある。

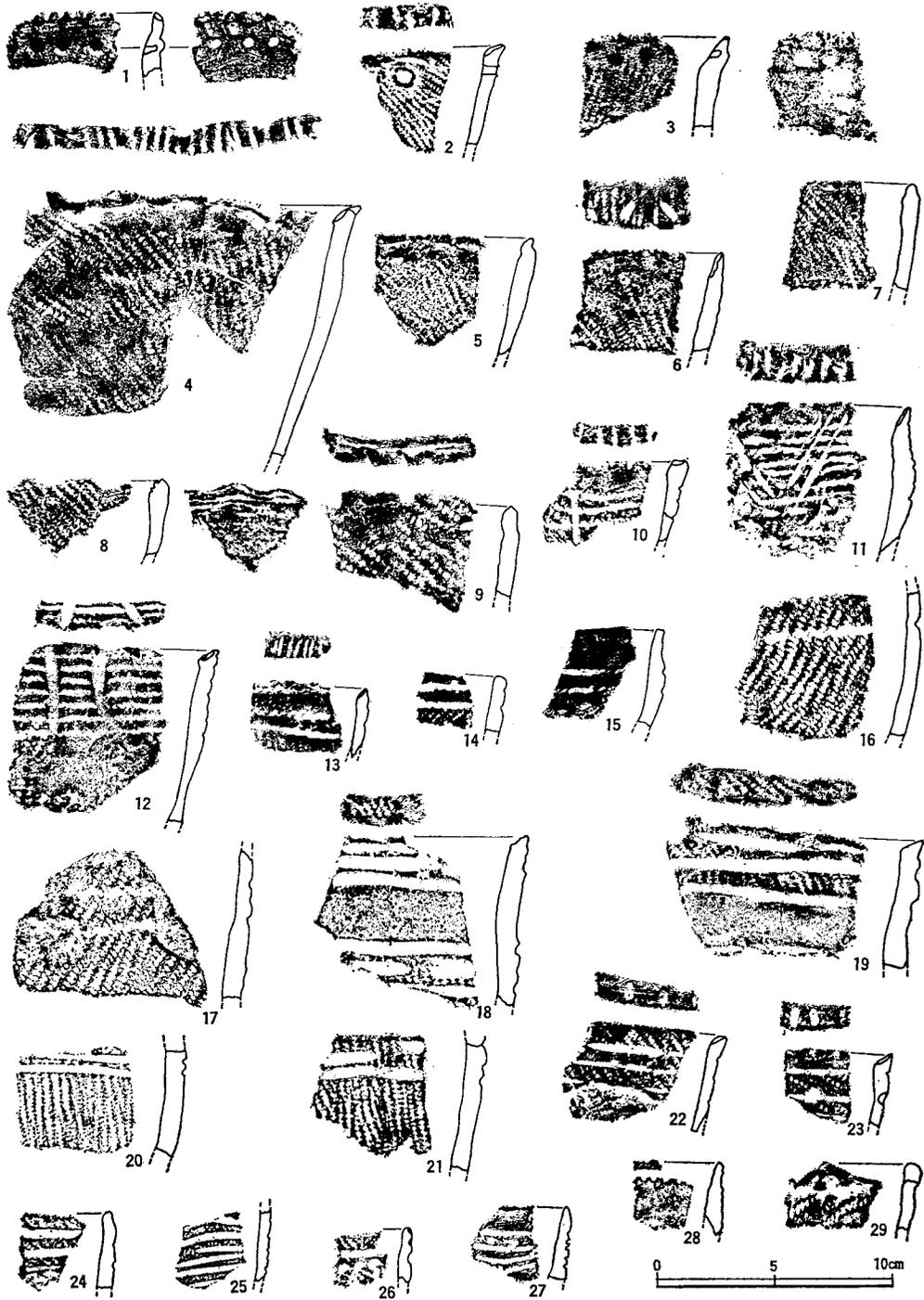
器厚は、0.8cm~1.0cmである。

#### F類 (第30図1~31)

沈線による曲線と、磨消手法の組合わせによる文様構成を主体とする。

口縁上に円形工具による刺突文を配し、口縁に平行する1条の沈線をめぐらし、以下四角の沈線により囲まれる磨消部を有する(1)、口縁部に磨消手法を用い、方形の沈線によって、囲まれる縄文を有するもの(2)がある。

口縁に磨消手法を用い、頸部に横走る沈線と、胴部以下にレンズ状の曲線により囲まれる磨



第31图 第XII群土器拓影

消手法を用いる（3、4）。

以下、胴部破片であるが、方形の沈線により磨消部を囲む（5～8）、レンズ状の磨消手法による（11）、文様のすべてをうかがい得ないが、曲線の沈線と磨消により構成されるもの（12～15、23、24）、三叉状文を横に2個接続した如くの磨消部を有するもの（18）が見られる。

磨消帯と縄文帯を交互に放射状に配する（20、21）。16、17、19も、18あるいは20、21に類似するものであろう。

器形は、3、4は壺形に近い形となるだろう。1、2はゆるやかな波状を示す深鉢形となり、31は浅鉢の破片であり、他はすべて平口縁の深鉢形である。

焼成は良好で、黒色を呈するもの（10、11、22、23、30）を除いて、すべて黄褐色である。

器厚は、0.8cm～1.1cmである。

#### 第Ⅱ群土器（第31図、第32図）

##### A類（1～9）

地文としての縄文を有し、内面よりの刺突文（外面突瘤文）をつける（1～3）、口唇内面に撚糸を押圧する（4）、撚糸を押圧した後、円形工具の側面を用いて押圧する刻み目をつける（6）、撚糸を横方向に押圧する（8、9）、縄文のみのもの（5、7）がある。

器形は、すべて鉢形となろう、口縁の直立する（1）、口縁が大きく外反する3の他は、胴部にやや彎曲をもたせた形となる。

胎土中には、すべて微量の石英片を含み、焼成はよく、黒色（1）、灰褐色（2、3）、褐色を呈するもの（4～9）がある。

器厚は、0.6cm～1.1cmである。

##### B類（10～17）

口縁に横走する縄文原体を押圧し、地文として縄文を施文する。

口縁に横走する数条の縄文原体を押圧し、更に、これに直交或は斜行する縄文を原体押圧する（10～12）。10、11は、口唇上に縦方向に縄文原体を押圧し、12は、口縁に平行して縄文原体を押圧し、更にその後円形工具の側面にて刻み目をつける。

横走する縄文原体の押圧のみで口唇上にも縄文原体を押圧する（13）、数条の横走する縄文原体の押圧のみ（14、15）、胴部破片であるが、おそらく頸部近くであろうと思われ、横走する縄文原体の押圧を有するもの（16、17）がある。

器形は、すべて平口縁であり、口唇の平坦なもの（10、14、15）、内傾するもの（11～13）、頸部に若干の彎曲をもたせ、口縁の直立するもの（11、15）がある。

胎土中には、石英の微量破片を含み、焼成は概して良好であり、灰黒色（11～14）、茶褐色（12、15）、褐色を呈するもの（16、17）がある。

器厚は、0.7cm～1.0cmである。

##### C類（18～29）

地文に縄文を有し、沈線、及び磨消手法による文様の組合わせ。

太い工具により口縁に平行な沈線をめぐらし、この下部に幅の広い磨消帯を設け、以下再び沈線により囲まれる縄文帯となる。沈線に囲まれる縄文帯は、一種の工字文風の文様となり、口唇上にも縄文を施文する(18、19)。20、21も同様な文様を有する土器の胴部破片であろう。

口縁より胴部にかけて横走する数条の沈線を描き、口唇上に縄文と刺突文の両者を組合わせる(22、23)、口唇上に文様を施文しない(24)、沈線と円形刺突文の組合わせとなる(26、27)、沈線に三角状の刺突を加える(28)、口唇を若干肥厚させるもの(29)がある。

器形は、口縁に小突起の見られるもの(19、29)がある。しかし、18、20、21も19に同様の器形となろう。大形、小形の土器を問わず、胴部の若干脹る形となる。

胎土中には、石英小片を含み、概して良好な焼成であり、黄褐色(18~21、24、26、27)、黒色のもの(22、23、25、28)がある。18、19、21は内面に炭化附着物が見られる。

器厚は、0.9cmである。

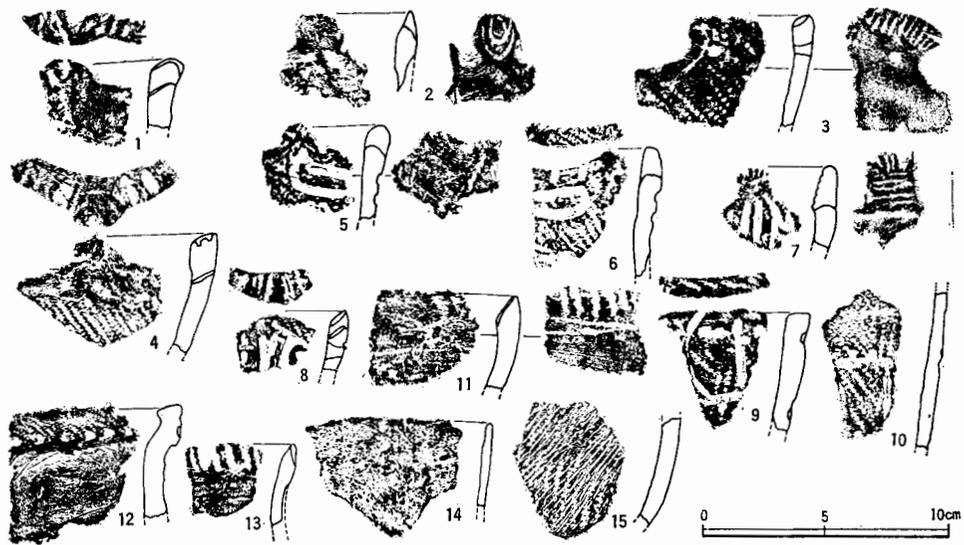
#### D類(第32図1~8)

口縁に小突起を有し、縄文、沈線文を主体とする。

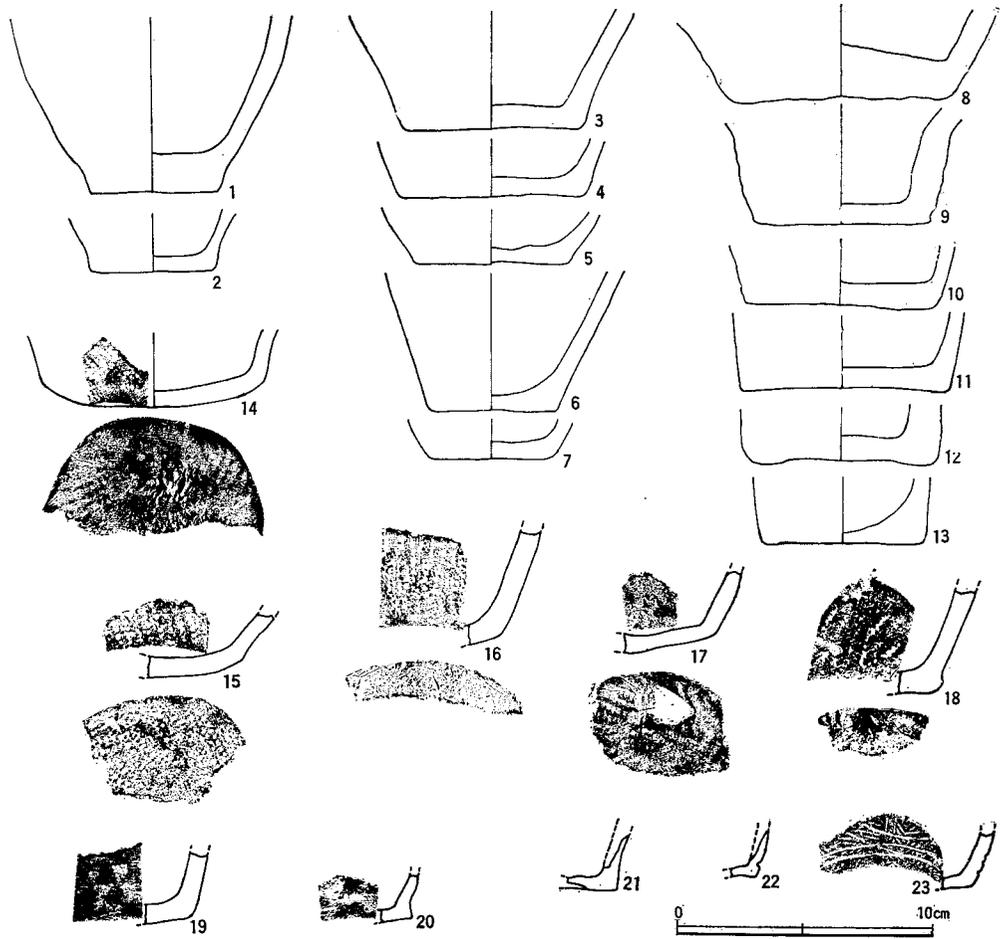
表面は、無文であり、口唇上に撚糸を押圧する(1)、同じく口唇内面に指紋状の撚糸を押圧する(2)、縄文を施文し突起部口唇上に撚糸を圧痕する(3)、撚糸を押圧の後、口唇頂部に円形刺突、及びこの工具の側面を用いる刻み目をつけるもの(4)、縄文を施文し、沈線にて方形の文様を作り、口唇上に縄文を押圧する(5)、これと同一手法であり、口唇に円形工具の側面による刻み目をつける(6)、突起頂部より垂下する沈線と、突起頂部、及び裏面に撚糸を押圧する(7)、沈線により直線、或は方形の文様を描き、口唇上に撚糸を押圧するもの(8)がある。

器形は、小突起を有する鉢形が多く、3は、舟形になるかとも思われる。

焼成は良く、黒色の8を除いてすべて褐色である。



第32図 第Ⅱ群土器拓影



第33図 縄文時代後・晚期土器底部実測図

器厚は、0.7cm~0.9cmである。

E類 (9~15)

出土数の少ない土器を一括した。

縄文を主体とし、沈線と円形工具による刺突、及び口唇上の縄文によって構成される(9)、10も同一個体となろう。表面は無文で、口唇上より裏面にかけて縦走、及び横走する燃糸圧痕をつける(11)、口唇部に縄文と三角形の刺突による文様をつけ、以下無文とする(12)、口唇部表面に燃糸を押圧する(13)、無文のもの(14)、条線と縄文によるもの(15)がある。

器形は、鉢形が多く、12は壺形に近い形となろう。

焼成は、概して良好で褐色を呈する。

器厚は、0.6cm~0.9cmである。

縄文時代後期、期晩土器底部 (第33図)

底部が直立し、胴部にかけて大きな彎曲を見せる(1、2)、底部より直接胴部にかけてすぐに彎曲の見える類(3~6)、底部より胴部に直線的に立ち上るもの(8~13)がある。すべて無文で、底面は、平らになる。

胴部よりゆるやかな曲線を描きながら底面に移行して、底面も平坦とならず丸味をおび、胴部、及び底面に縄文が施文される(14~17)。底部が一度直立し底面へと続き胴部、底面ともに縄文を有する(18)、底面の縄文を欠く(20)、底部に数条の沈線をめぐらすもの(22、23)がある。

1~13が縄文時代後期、14~23は、縄文時代晩期に属するであろう。

**第XIII群土器 (第34図)**

口唇上、及び口唇に刻み目を有する微隆起線をめぐらし、胴部には、微隆起線文、帯縄文、三角形の列点文を使用して描く曲線の文様を構成する。器形は、鉢形の片口注口土器と思われる。注口部の反対側に穿孔する(1)。口唇上、及び口唇に刻み目を有する微隆起線をめぐらし、以下帯縄文、微隆起線、三角形の列点文にて曲線の文様を構成するもの(2、3)がある。口唇上に刻み目を有し以下無文となる(4)、微隆起線と三角形の列点文が見られず直線の帯縄文のみで文様を作るもの(5)がある。

器形は、すべて鉢形となるようである。色調は、赤褐色を呈する(1)と灰色を呈するもの(2~5)がある。

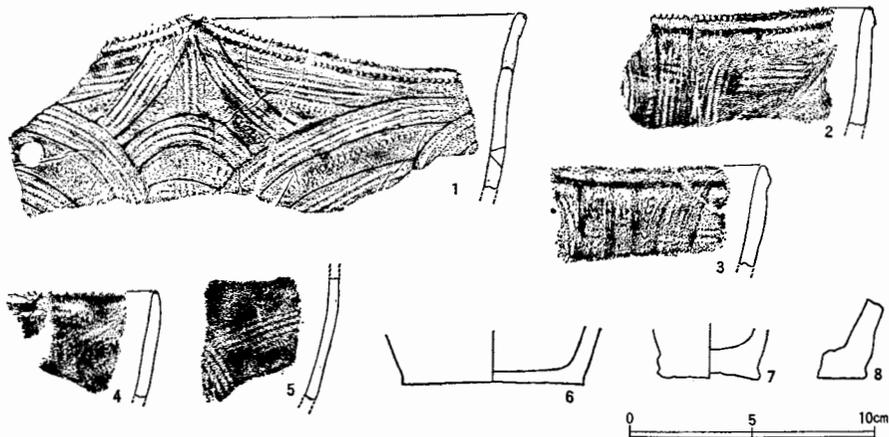
器厚は、0.6cm内外である。

底部は、外反し若干の揚底となる(7)と、平坦になるもの(6、9)が見られる。

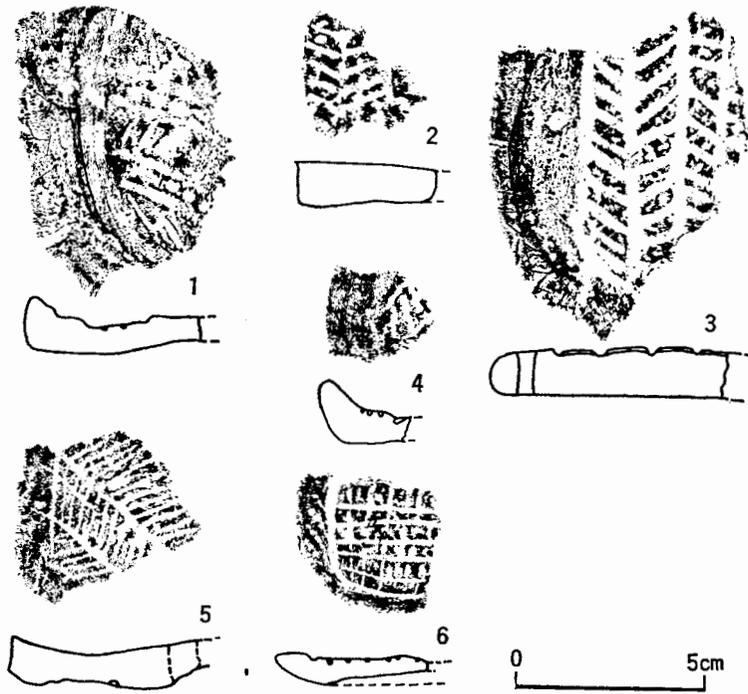
**第XIV群土器**

表採によって得られた土器1片である。図版18Aの下段中央に示した壺形になるであろう土師系の土器である。頸部に1段の稜を作り、器面全体に刷目の整形痕が見られる。大きく肩部を脹る器形となろう。

**土製品 (第35図)**



第34図 第XIII群土器拓影、第XIV群土器底部実測図



第35図 土 製 品

いわゆるオロシガネ状の土製品であり、縁取をして皿状をなすもの（1、4）、単なる土板の如き状態のもの（3）、若干中央部に窪みを有するもの（5、6）がある。文様は6を除いてすべて綾杉状の文様を基調として構成される。綾杉状の文様と円形工具による刺突文の組合せになる（1、2、4）、綾杉状の文様のみのもの（3、5）があり、3は、縁取面に1個の穿孔が見られる。6は、沈線による格子状文を基調とし、これに円形刺突文を組合せる。

裏面は、板として直線的となる（3）、ゆるやかに曲線を描くもの（1、5、6）が見られる。色調は、灰色を呈するものが多く、器面調整は顕著でない。器厚は0.8cm~1.3cmである。

現在までの知見によれば類似資料は、手稲遺跡（大場・石川1956）、幌内ウレロッチ遺跡（野村1962）、余市町（大塚1967）よりの出土例がある。手稲遺跡、幌内ウレロッチ遺跡においては、縄文時代後期中葉の手稲式土器に伴出することが知られており、本遺跡例も焼成、胎土、色調より、第XI群土器に伴出するといえよう。

さて、これらの機能について形態より見れば、すべて10cm内外の小形品で方形、長方形、円形の極く浅い皿形を呈するのが一般的である。手稲遺跡出土遺物第16図には、4本の脚を有するその形状あたかも該時期の石皿を模したものが見られる。本遺跡例では、皿形とならず、板状を示す形態が存在する。板状形態の存在より見れば、必ずしも皿状にすることによってのみ、その機能を全うするものとは考えられず、おのずから液体、或いは、それに近いものに限定した使用目

的よりはざされることとなろう。

機能に関する問題としては、大塚の毒矢に使用するオオブシ(トクトリカブト)を磨る携帯用の道具であるとする考え、松下の、これにやや否定的ながらも単に練るとする作業には使われたであろうとする考えの二者が存在する。

手稲遺跡、北広島第1遺跡(高橋1971b)より石製の材質を用いた類似製品が、出土している。その形状、大きさともに土製品に極めて近いものであり、両者が機能的に相互間に何らかの同一使用目的のもとに作成されたものと考えられよう。石製品については、高橋はアクセサリー又はランプであろうと推察している。

石製品は、何かを磨る、つぶすという目的の用に十分耐えられる強度を具備するであろう。しかし、土製品の出土例の観察によれば、器面に擦痕が全く見られず、物を磨りつぶすとの用途に使用された痕跡を認めることが出来ない。また、ランプとしての用に供したのであれば、油煙等の附着が強く見られなければならない等の問題点が指摘される。このように考えると、これらは日常生活の用に作成されたものではなく、ある種の儀礼的な用具としての意図をもって作成されたと考えられよう。

以上出土土器について第1群より第XVI群に分って、その内容について概述した。次にこれらの土器が、現在の北海道出土土器の中で、如何なる位置に存在するものであるか簡単に述べよう。

第1群土器としたものは、半截竹管、竹管、篋状工具等により、器面を引きずる様な連続刺突文が見られ、器面内面に縄文を施文し、胎土中に繊維質を混在する事に特徴が見い出される。

これらの特徴を有する土器は、道央部にあっては、平岸天神山遺跡(菊地1967)、道北部にあっては、嵐山遺跡(斎藤1966)、名寄智東B遺跡(山崎1966、山崎・長谷川1968)下層出土のものに最もよく見られる。しかし、これらに多くの類似点が見られる反面、本群土器は、口縁部突起が小さく、肥厚帯を大きく有するものが少なく、胎土中に繊維の混入が見られる点に大きな差が見られる。

本群土器は、縄文時代中期中葉末より後葉に位置するものと考えられる。本群土器の位置を決する前に該時期の簡単な展望を試みてみよう。

道南地方においては、東北地方円筒土器の系譜を引くサイベ沢VI式、VII式、見晴町式土器期の三時期に分かれている。サイベ沢VI式土器とされるものは、サイベ沢遺跡(児玉・大場武内1958)第1地点5層より発見された土器によって注目された土器である。その類例は、浜益川下遺跡(大場・石川1961)によって得られる。しかし、浜益川下遺跡出土土器には、サイベ沢遺跡第1地点5層出土土器に見られる如くの発達した沈線文の土器は、見ることが出来ず、両者の組成には少なからず差が見られる。

高橋は、最近当該時期を含む縄文時代中期終末の問題を全道的な視野に基づく、意欲的な労作を発表している(高橋1972a、1972b)。限定された人のみが実見し得うる未発表資料を数多く使用

している点を除き、現在の資料蓄積段階より見れば、おおむね妥当性を有する説得力のある論考といえよう。

高橋によれば、前述のサイベ沢Ⅵ式土器とするサイベ沢第1地点5層出土土器の中には、1時代新しく考えられるサイベ沢Ⅶ式土器を含むとする。どれがサイベ沢Ⅶ式土器に含まれるものであるか、明示していないが、恐らくは、サイベ沢遺跡第63図中に挙げられるものの1部をさすものであろう。もし、これらの土器がサイベ沢Ⅶ式土器に属するものであるならば、サイベ沢遺跡第六文化層の基盤は、大きく崩れるとともに、サイベ沢Ⅵ式土器の概念が大きく変わらなければならぬまい。

サイベ沢第1地点5層出土土器と浜益川下遺跡の両者を比較してみた場合、その間に存在する差異は、認めない訳にはいかない。これは高橋も述べる如く、浜益という周辺地域におけるサイベ沢Ⅵ式土器とされる土器群の特異な一面であるのか、或は、これがサイベ沢Ⅵ式土器そのものであるのか判断に迷うものである。サイベ沢Ⅴ式土器とサイベ沢Ⅶ式土器との間には、大きな差が見られ、これらの遺跡出土土器を介存させることにより、その流れはスムーズにとらえられよう。

しかし、サイベ沢Ⅵ式土器の実態は、一体何かとの間に直面した場合に、それに的確に答えるに十分な資料としては、いまだの感が大きいと言わざるを得ない。

この次に位置する土器としては、サイベ沢遺跡第1地点2～4層出土のサイベ沢Ⅶ式土器がある。サイベ沢Ⅶ式土器は、サイベ沢B遺跡（森田・高橋1967）の調査により、その内容がかなり明確にされている。更にこの調査を通して、サイベⅦa、Ⅶb式土器への細分の可能性を論じている。その根拠とするところは、住居跡の切合関係による土器のセットの中に、結節羽状縄文を有するグループと、これをもたないグループが存在するところより、前者をサイベⅦa式土器、後者をサイベⅦb式土器とした。結節羽状縄文のみを抽出してみれば、サイベⅥ式土器、サイベⅦ式土器、サイベⅦ式土器よりも新しく位置される見晴町式土器と通観した場合には、確かに結節羽状縄文の消失という事実がとらえられる。しかし、両者を比較して見るならば、結節羽状縄文の存在のみに差異が見られる点を除き、他の組成にはあまり大きな変化を認めることが出来ない。更に、発見された住居跡のなかで見晴町式土器期（高橋1966）に属する1基を除き、他の2基が新しい住居跡の構築、農道工事により、原形を窺い得ない程に破壊されており、決して良好な遺跡であるとは言い難く、この細分は、やや時期尚早と思われる。

見晴町式土器は、見晴町遺跡発見の1群の土器により注目された（高橋1966）。サイベ沢B遺跡の報告中にみられる該土器の説明によれば、粘土ひもの貼付帯、沈線文（いわゆる円筒土器系に一般的な）の消失をあげている。この説明によれば、見晴町式土器とは、見晴町遺跡発見の単一のセットとして捉えられた土器を指すものではなく、サイベ沢B遺跡発掘の第1号堅穴住居跡発見の土器をもって当てると理解出来よう。

サイベⅦ式土器群になると、各地に地方色の強い一群の土器が現われるようであり、高橋はサイベⅦa式土器とⅦb式土器の中間頃に位置する土器として見る道北部の智東B遺跡出土土器（智東B式土器）（山崎1966・山崎・長谷川1968）、道央部における平岸天神山遺跡出土土器

(菊地1967)をあげている。この両者の時間差は、現在のところ智東B式土器が古く平岸天神山遺跡出土土器が新しく、後者はサイベ沢 VIIb 式に平行すると考えられる。道央部における智東B遺跡出土土器に対比される土器としては、石狩高岡出土土器が当てられる、(高橋1972 a, b)。石狩高岡出土土器について詳細な報告例が見られずその内容を知るべくもないが、平岸天神山遺跡出土土器は、サイベ沢 VII式土器に極めて近い位置を得るものといえよう。

この様な円筒土器系のれに対応されて、かつて北筒式土器と呼ばれた一群が存在する。桑原によれば北筒式土器と呼ぶ中で古く位置するトコロ貝塚出土第6類土器は、円筒上層式土器の影響のもとに発生したものであるとする(桑原1966)。智東B遺跡の調査結果より見れば、智東B式土器の上層よりトコロ貝塚出土第6類が発見され、サイベ沢 VIIb 式土器と平行関係にあるとされる(高橋1972b)。即ち、トコロ貝塚出土第6類土器は、サイベ沢 VII式土器に平行か、新しく位置づけられることは、妥当なものと言えよう。

この様に考えてくると本遺跡出土第I群土器としたものは、平岸天神山遺跡出土土器、智東B式土器(智東B遺跡出土土器、嵐山遺跡出土土器)に最も近い位置にある。しかし、前述の諸特徴の差異より見れば、これらを同1期の所産と考えるより、ある種の地方差、時代差を有する1群と肥える事により妥当性を感じる。サイベ沢 VII式土器細分の基準と見られる結節羽状縄文の有無よりとらえると、本群土器及び平岸天神山遺跡出土土器報告例には、これを全く見る事が出来ず、石狩高岡出土土器、智東B式土器には、これが存在するらしい。

更に胎土中に繊維を混在する事実は、サイベ沢 VI式、サイベ沢 VII式土器、智東B式土器、石狩高岡出土土器には、全く認めることが出来ず、平岸天神山遺跡出土土器には、わずかに存在するらしい。本群土器には、かなりの量が認められる。即ち本群土器と平岸天神山遺跡出土土器に繊維を混入するという事実は、サイベ沢 VI式、VII式土器の系譜より逸脱したものであり、サイベ沢 V式土器の影響を残すものか、あるいはトコロ貝塚出土第6類土器の影響による一現像と考えることができようか。

半截竹管工具の内面を用いて施文する連続刺突文は、平岸天神山遺跡出土のものより極めて盛行する時期であり、口縁部の形態は、平岸天神山遺跡出土土器、智東B式土器では、いまだ、かなり雄大な装飾効果を有している。以上のことより本群土器は、平岸天神山遺跡出土土器よりは、やや新しく位置させることに最も妥当性を有する。ただ、平岸天神山遺跡出土土器、智東B式土器の編年的に位置について見ると、若干問題を含むように思われるが、石狩高岡出土土器が未発表資料で、その内容を知り得ないので本稿では態度を保留した。

第II群土器は、昭和9年に報告された余市町大谷地貝塚出土の土器(五十嵐1935)によって代表される、いわゆる余市式土器である。余市式土器は、桑原(桑原1967)、吉崎(吉崎1965)、岩崎(岩崎・三室・他1970)によって、その内容が詳細に検討され、現在は三型式に分類される。各者ともに若干の相異が見られるが、基本的には三型式に分類される事実は、現時点では十分な説得力をもつ試論である。

本群土器は、伊達山遺跡(岩崎・三室・他1970)出土の土器に最も近いものである。

第Ⅲ群土器としたものは、出土数が極めて少なく、この資料をもって即断することは、無謀と言わざるを得ない。これらの特徴を有する土器は、嵐山遺跡出土B類、浜益川下遺跡（大場・石川1961）見晴町遺跡出土C類の土器に類似するものである。いわゆるサイベ沢Ⅵ式土器に見られる貼付帯の幅は本群のものより幅広く、貼付帯の施文も縄文に模した刻み目をつける事に特徴がある。本群のものは、すべて縄文であり、やや趣きを異にしている。見晴町遺跡出土C類土器として図示するものの詳細を知り得ないが、本群のものは、これに最も近いものと言えよう。

第Ⅳ群土器は、第Ⅲ群土器に類する土器である。沈線の施文は半截竹管による粗雑な感じの施文を行ない、貼付帯に特徴を有するものであり、一応第Ⅲ群土器と区別した。

第Ⅴ群土器は、口縁部より垂下する貼付帯に最も特徴を有するものである。道央部においてはその報告例を見る事が出来ない。強いて挙げるならば、サイベ沢Ⅶ式土器、見晴町式土器、嵐山遺跡出土F類土器、羅臼中学校校庭遺跡出土土器（東大文学部1963）にやや近いものと言えよう。嵐山遺跡出土F類土器は、口縁部をめぐる幅数cmの折り返しが見られ刺突文（内面突瘤文）が見られず羅臼中学校校庭遺跡出土土器は、胴部に数条の磨消帯を有することに特徴が見られ、本群とは明らかに異なるものであろう。更には、サイベ沢Ⅶ式土器、見晴町式土器には刺突文（内面突瘤文）が全く見られないところよりやはり一線を劃するであろう。

道央部における刺突文（内面突瘤文）は、トコロ貝塚出土第6類土器に始めて見る事が出来ることより、本群土器がトコロ第6類土器よりは古く位置づけることは不可能であろう。むしろトコロ貝塚出土第6類土器よりやや新しいと考えられよう。

第Ⅵ群土器は、トコロ貝塚出土第6類土器によって代表される土器である。近接地では、平岸坊主山遺跡（畑1966）、浜益遺跡等に見られる。

第Ⅶ群土器は、縄文のみの施文された土器であり、その帰属するところを決定することが、困難な土器が多い。縄文原体、焼成、胎土より見れば、第23図11～21、第24図1～14は、第Ⅴ群土器に属するものであろう。これらの多くは、表裏とも縄文を有し、口唇上にも縄文を施文する。口唇上及び内面に縄文を施文する例は、サイベ沢B遺跡出土土器、見晴町遺跡出土土器においては、それを全く見ることが出来ない。嵐山遺跡出土土器、平岸天神山遺跡出土土器等の円筒土器系の道央・東・北部に見られる土器には、若干出現する。更にトコロ貝塚出土第6類土器によって代表される土器群には一般的である。さすれば、第23図11～21、第24図1～14の土器は、第Ⅴ群と伴出するものであり、その年代も、トコロ貝塚出土第6類土器に平行か、新しく位置づけられよう。確たる証は何ら得られないが、トコロ貝塚出土第6類土器よりやや新しく位置させることにより妥当性を感じる。

第25図に見られる結節羽状縄文、綾絡文の主体となる土器は、サイベ沢Ⅶ式土器、トコロ貝塚出土第6類土器、嵐山遺跡出土土器中に一般的に見られるものである。しかし、道央部における平岸天神山遺跡出土土器には、この両者ともに見い出すことが出来ない。本遺跡出土のものは、その胎土、焼成等より第Ⅵ群土器トコロ貝塚出土第6類土器に伴なうものと言えよう。

第Ⅷ群土器は、沈線によって描かれるモチーフを主体とする。北海道における当時期の沈線文

の系譜は、東北地方南部に主体的に見られる大木系の土器と無縁ではあり得ない サイベ沢Ⅵ式土器に見られる沈線は、太めの工具（半截竹管が主体か）による粗雑なものが多く、本群土器に見る如く繊細なものは、サイベ沢Ⅶ式に至って見られる。しかし、かつていわゆる余市式土器と呼称された1群の伊達山式土器等にも沈線文が見られ、その資料が豊富と言い得ない現在、本群土器のすべてについて誤りなく、その位置を決することはやや困難である。第25図3、4に見られるモチーフは、サイベ沢Ⅶ式土器、見晴町式土器に伴なって見られる大本8b式土器の要素に近いものである。しかし、同じく2、5、6、8等に見られる手法、13、22に見られる磨消手法を用いる土器は、むしろ入江式土器（名取・峰山1958）に見られるものと言えよう。但し、1に見られる孤状の隆起帯上に刻み目を有する土器は、現在のところ岩内曾我・北栄遺跡（大場・桐井1958）より出土している1点が管見に触れるのみである。伴出土器は、定かでないが、いわゆる余市式土器、野幌式土器が出土しているらしい。この文様、器形より見れば、あたかも関東地方縄文時代中期に一般的に見られるそれに近い。

第Ⅸ群土器は、無文地に沈線による文様をつける類である。器形は、すべて頸部にやや湾曲を見ることにより、口縁が外反する深鉢形がすべてである。その器形は、入江貝塚出土土器で入江A式土器とされるものに類する。2本1組の沈線を基本とし、その先端に丸味をもたせる特徴を見せる。

第Ⅹ群土器は、船泊上層式土器（児玉・大場1952）に属するものである。器形は、単なる深鉢形となるもの、頸部のくびれが大きくなり、いわゆる朝顔形に近いものによって代表される。器形のバラエティが多くなり本遺跡では見られないが注口土器も出現する。この土器の道央部における発見例は極めて少なく、類似の土器としては、手稲遺跡出土の手稲式土器（大場・石川1956）に求められよう。しかし、手稲式土器と本群土器の間には、種々な相違が見られ、吉崎の述べる如く明らかに一線を画さなければならない（吉崎1965）。

第Ⅺ群土器は、縄文時代後期中葉の土器であり、道央部においては、普遍的に見られる。その好例としては、手稲遺跡出土土器が挙げられよう。本群土器と手稲遺跡出土土器の組成は、極めて類似する。ただ、手稲遺跡出土第Ⅲ様式とする刻み目を有する隆起帯をもつ土器は、本群には全く認められない。この種の土器は、エリモ遺跡（大場・扇谷1953）出土土器に多く見られる。手稲遺跡出土土器、エリモ遺跡出土土器、前述の第Ⅹ群土器船泊上層式土器は、ともに従来野幌式土器の名称の中に取り扱われて来た。吉崎は、この三者の関係を船泊上層式土器→手稲式土器として2分し（吉崎1965）、野村は、船泊上層式土器→手稲式土器→エリモ式土器と時間差のあるものとしてとらえられ、極めてスムーズに流れるものであるとした（野村1967）。2説を吟味してみれば、現時点では、野村の提称する仮説が、より説得力があるといえよう。

第Ⅻ群土器は、縄文を地文とし、沈線、縄文、撚糸の押圧文を基調し、口唇裏にも同様の文様を施文するこれらの土器は、縄文時代晩期に属するものである。道央部においては、タンネトウ遺跡出土土器によって代表されるタンネトウL式土器と称呼される1群である。これらの類例は浜益柏木B遺跡（大場・石川1961）、鳩山遺跡第3地点（野村1964）ママチ遺跡（石川1970）によ

って得られる。本群土器の特徴は、前述のほか、いわゆるB状突起と呼ばれる口唇部形態、椀形の浅鉢形土器が多く見られるようであるが、本群には極めて少ない。本例(第32図一3)に見られるいわゆる船形を呈する形態の土器は、該時期土器の特徴的なものであり、ママチ遺跡、鳩山遺跡第3地点等より発見されている。

第XⅢ群土器は縄文時代土器を一括した。これらの土器は、江別坊主山遺跡出土資料によって代表される。古くは、後北式土器なる名称を冠せられていたものである。近時は、千代により江別式土器(千代1966)、森田により坊主山式土器(森田1967)、河野・宇田川等により後北式類江別式土器(河野・宇田川他1970)と呼ばれる1群である。

本遺跡出土例は、千代の江別Ⅲ、Ⅳ式土器、森田のいう坊主山Ⅲb式土器、河野・宇田川等の後北式類江別式C<sub>2</sub>型、D型土器がすべてである。これらの煩雑な呼び名については、種々意見もあるがいずれ稿を改めて言及することとし、ここでは、無用な混乱を避けるため一応各型式名を列挙し、本遺跡例をこれに同定せしめた。

第XIV群土器は、表面採集によって得られた土師系の土器である。

以上各群土器の編年的位置について、現在までの研究成果をもとに簡単に対比を試みてきた。本遺跡出土土器で最も問題となる土器は、第I群土器より第VI群土器の縄文時代中期に属する土器である。当該期の研究は、桑原(桑原1964・1966)、吉崎(吉崎1965)によって新境地が開かれ高橋(高橋1972a・1972b)によって集大成されたと言えよう。現在管見に触れる資料のみの操作では、如何にこれを扱おうとも、高橋の見解より前進することは困難である。仮に、かなり批判的な見方を得たとしても、その資料不足から来る論の不備は、常につきまとうと言えよう。即ち当該時期の研究は、全く膠着状態にあり、良好な遺跡発掘資料の増加のみに、今後の研究打開の道が残されていると言えよう。故に、本稿第I群土器の説明に際して、やや冗長に高橋の見解を引用し、若干の疑問点に触れたのみにとどめた。

最後に、筆者の浅学なるがために、この稿を終えたいまも、サイベ沢Ⅵ式土器、サイベ沢Ⅶ式土器の明確な内容が、いまだ筆者の思考の中で完全に把握出来ずにいる。大方の御指導と御叱正を賜れば幸甚である。

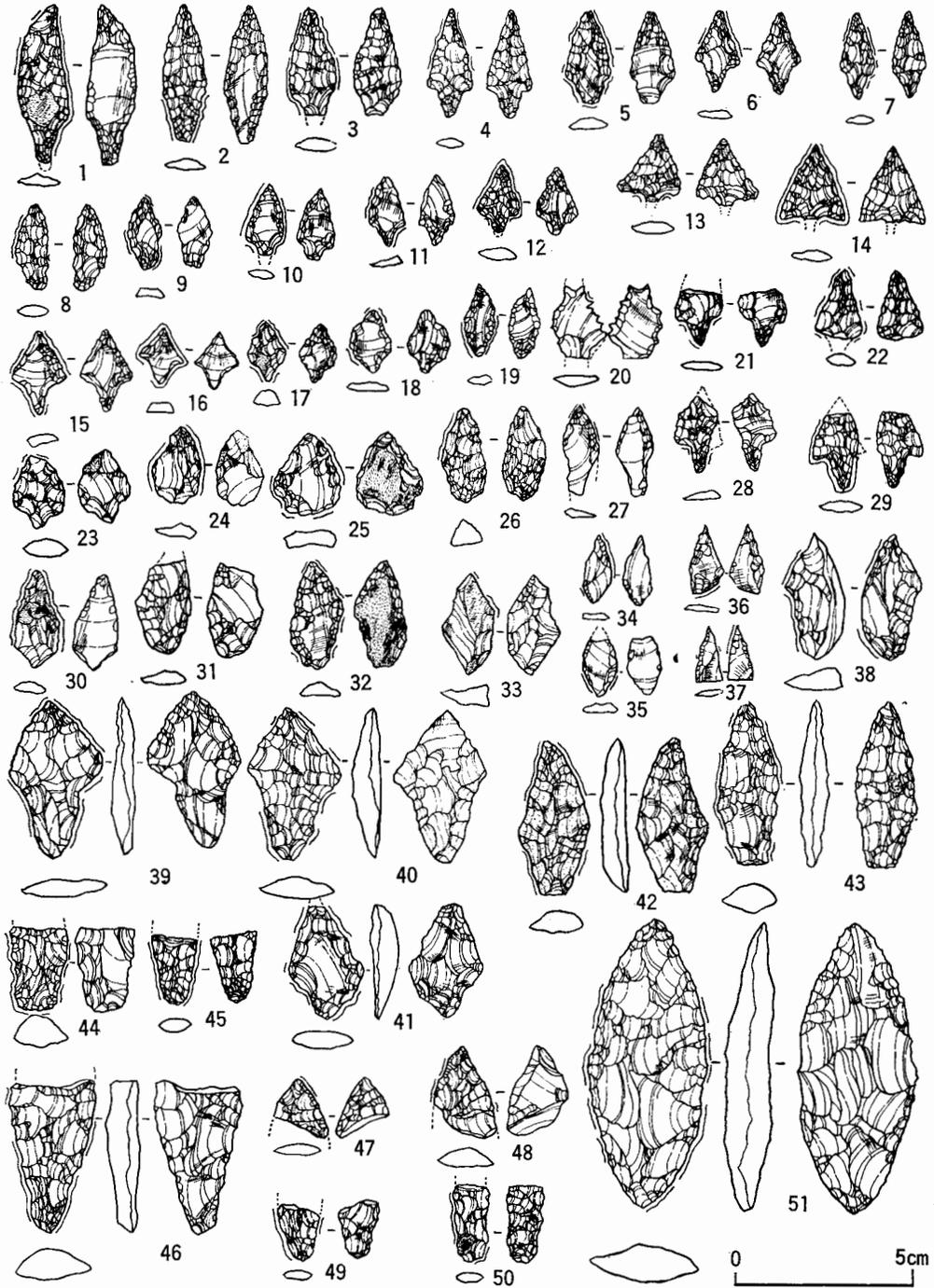
(加藤邦雄)

## 第2節 石器およびその他の遺物

当遺跡からは、約180点の石器、石製品、骨器などが出土している。石器の器種は、石鏃、石銛先、石槍先、各種のナイフ状石器、石錐、彫刻刀(?)、搔器、各種の削器、縦長剝片、扁平石核、同関係剝片、石斧、すり石、くぼみ石、砥石、礫器などである。出土区は、Ⅲ区から約70%出土しており、とくにⅢ区6~10列の谷の部分に多かった。おおむね、縄文中期中頃から後期までの時期の所産と思われるが、正確な土器型式との伴出関係は明らかではない。従って、事実記載に主眼をおき、形態型式論を基準に分類した。石質は、とくに断らない限り黒曜石である。

### 1. 石 鏃 (第36図1~38) (図版19A)

出土した石鏃は、すべて有茎である。それらは、茎部および逆刺の作出の程度、尖頭部の形態



第36图 石器实测图(1) (石鏃、石箭头、石枪头)

によって、便宜的に以下の3つに分類した。全例黒耀石である。

第1—1類 (1~5、7、8、10、11、21、22)

茎を明瞭に作り出しているが、逆刺はあまり強くない。尖頭部は、長さのわりに幅が狭く、その比をとると1.4~2.0の枠内に収まる。この仲間も、長さを基準にさらに2つに細分できる。

(a) 全長が4.0cmを越えるもの(1、2)。1、2共に、b面には一次剝離面を残し、半両面加工である。1は、縦長の剝片を素材にし、先端部は曲り、全体として非対称形である。2は、横長の剝片を素材にしている。重量は、各々2.2g、1.6gである。

(b) 全長が2.0~4.0cmのもの(3~5、7、8、10、11、21、22)。3、4は、両面加工、5、21は、半両面加工で、共に縦長の剝片を素材にしている。7、22は、両面加工で、22は軽度に焼けている。以上6点の重量は、1.1~2.0gである。

10、11は、周辺加工で、素材面が幅広く残る。11のa面尖頭部右には、切断面がそのまま残っている。重量は、0.4~0.5gである。

8は、非対称形であるが、両面加工で、茎を作出している。

第1—2類 (6、12~18、23、28、29)

茎を明瞭に作出し、尖頭部の長さと同最大幅がほぼ等しいもの。その比は、1.2~0.8の枠内に収まる。この仲間も、逆刺の程度、長さによって2つに細分できる。

(a) 逆刺が極端に発達し、全長2.4~3.0cmのもの(13、14、28、29)。13、14、29は、両面加工で、13は逆刺がかなり強く、14には、整形ないし使用による細かい剝離が全周にある。29のa面左茎部のエッジは磨耗している。これら3点の重量は、 $0.8 \pm g$ である。28は、尖頭部の先端とa面右の逆刺部分が欠損しているが、尖頭部は五角形であったと思われる。b面には、一次剝離面を残している。

(b) 逆刺はあまり強くない、全長1.6~2.4cmのもの(6、12、15~18、23)。6、15は、各々半両面・周辺加工で、共に両面に素材面を残す。16は、両面共に素材面のままで、素材面に対し直角に、a面からa面の右上と左下の面、b面からa面の左上と右下に二次加工を施している。12、17は、共にb面に素材面を残し、厚手である。18、23は、各々周辺・半両面加工で、共に非対称形である。とくに、23はb面上部に原石面を残し、厚いことから未成品の可能性もある。重量は、15、23例を除いて $0.5 \pm g$ である。

第1—3類 (9、19、26、31、32、35)

茎の作出は顕著ではないが、最大幅が胴下半部にくるもの。逆刺はない。この仲間も長さ、加工方法などで2つに細分できる。

(a) 全長 $3.0 \pm cm$ で、半両面・両面加工で非対称形のもの(26、31、32)。26は、部厚い剝片を素材にし、両面加工である。31、32は、共に半両面加工で、32は、横長の剝片を素材にし、b面に原石面を幅広く残す。重量は、1.7~1.9gである。

(b) 全長 $2.0 \pm cm$ で、周辺加工のもの(9、19、35)。19、35は、共に周辺加工で、19は、両面から加工がある。35は、先端部が欠損し、a面の中央部左と茎部末端右に切断面が残っている。

a面に加工が集中している。9は、半両面加工に近く、最大幅は胴中央部にある。

その他の類(20、24、25、27、30、33、34、38、73)

20は、先端部および基部は欠損し、鋸歯刃状に周辺加工している。30は、片面加工で、b面上部にバルブが残り、下部は欠損しているか、切断されている。細かい剝離が切損部以外の全周にあり、a面左上部エッジは磨耗している。石錐の可能性もある。24、25は、全長のわりに幅広のもので、各々粗い半両面加工・周辺加工で、共にb面には原面石が残る。25のb面左側の加工は、素材面に対し直角に入っている。33は、a面に原石面を残し、切断面がa面左下部と左上部側辺にある。粗い半両面加工である。非対称形。38は、a面右側辺に切断面が残り、a面左上部のみ逆刺を作出している。非対称形で、半両面加工である。27は、下部は欠損し、全体形はわからない。周辺加工。34は、b面に一次剝離面を残し、a面左上側辺は切断面のままで、胴中央右にも切断面が残る。a面右上と左下、b面左下に周辺加工をしてある。36も、a面右上と左下側辺に切断面を残し、加工はa面左上と右下、b面の右上に施こしている。37は、下部が欠損している。やはり、a面右側辺に切断面を残し、加工はa面左、b面左上と右の周辺にあるのみである。第37図73は、石鏃の未成品であろうか。

## 2. 石 鋸 (先) (第36図39~42) (図版19A)

この器種は、石鏃に比べて、全体に幅広く、全長も4.0±cmで、柄部は長い。尖頭部の長さとも最大幅の比は0.7~1.2で、1±である。重量は4.0~7.0g。全例黒耀石である。

39は、両面加工で、両面に一部素材面が残る。逆刺は強くはなく、大きさのわりに薄い。40は、半両面加工で、b面上部と下部に一次剝離面が残り、極めて平坦である。39、40共にa面右の逆刺の方が強く、少し非対称形である。41は、小形であるが、やはり逆刺はあまり強くなく幅広で、両面に素材面を残し、半両面加工である。先端部は欠損し、少し非対称形である。42は、柄部は短かく、逆に尖頭部の方が長い。両面加工であるが、b面の方が平坦である。逆刺は、不顕著で、非対称形である。中程度に焼けている。

## 3. 尖頭器類破片 (第36図45、47~50) (図版19A)

45、47~50は、石鏃ないしは石鋸先の破片と思われる。45は、軽度に焼けている。48は、b面に素材面を残している。

## 4. 石 槍 (先) (第36図 43、44、46、51) (図版19A)

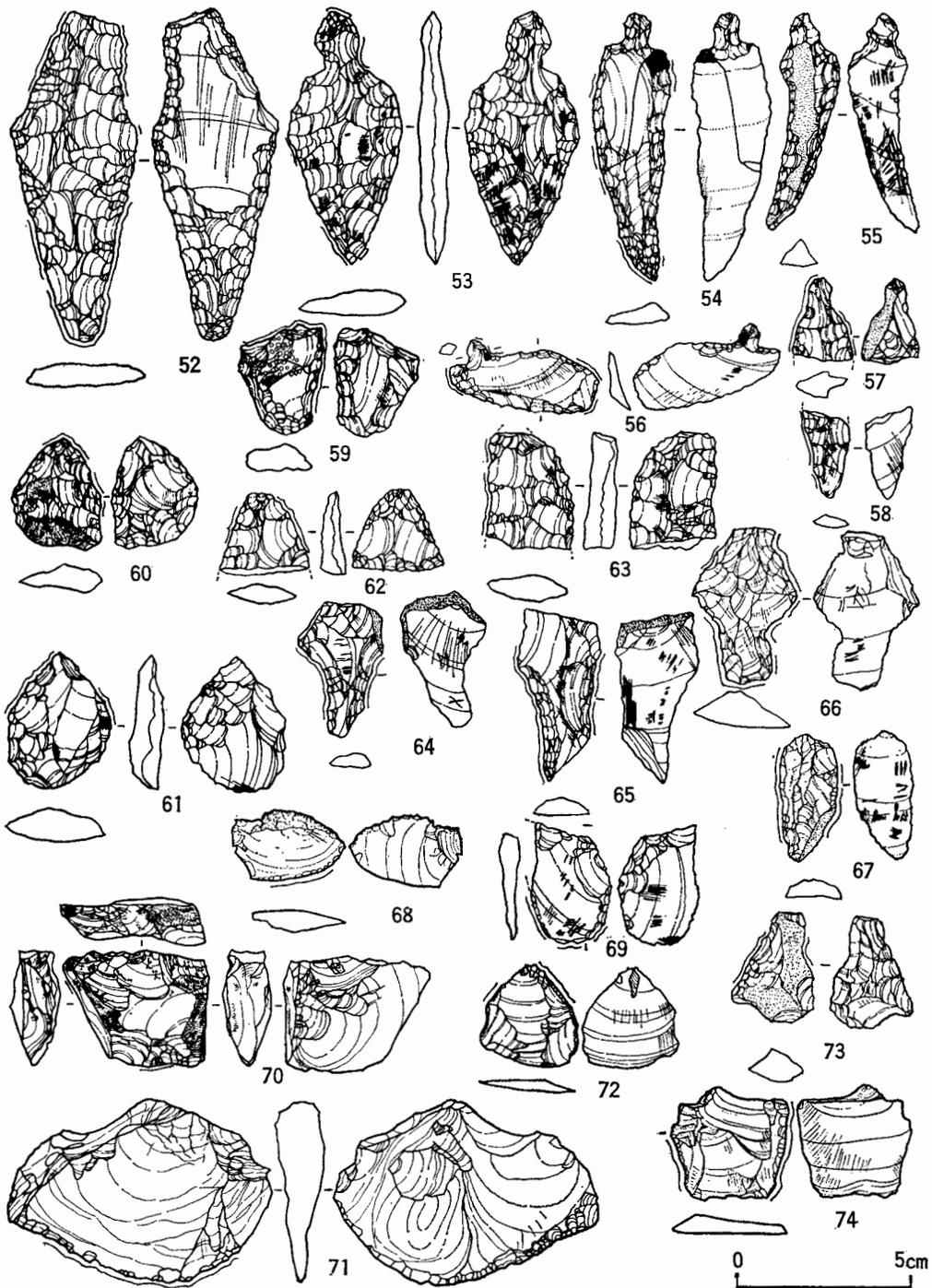
51は、大形の木葉形石槍先である。両面加工で、b面右上端に一次剝離面が残っている。43は、小形であるが、両面加工で、厚さは0.88cmを数え厚い。浅い柄の作出が認められるが、逆刺はない。石鋸先の可能性もある。44、46は、石槍先の柄部破片と思われる。46は、両面加工で、厚手である。b面は平坦で、破損前に焼けている。44は、半両面加工で、部厚い。

## 5. ナイフ状石器 (第37図52~63) (図版19A、B)

ナイフ状石器としたものは、形態・加工方法・つまみの有無で大きく3種に分類可能である。

### 第5—1類 (52、62、63)

両面・半両面加工で、平面形は非対称である。扁平で、つまみはない。



第37図 石器実測図(2) (ナイフ状石器、削器)

52は、縦長の剥片を素材にし、半両面加工している。b面には一次剝離面が残り、柄を作出し非対称形である。尖頭部のa面左中央のエッジには細かい剝離があり、柄部両エッジ、尖頭部a面右と先端部のエッジは、磨耗している。また、両面もほぼ全面に亘って磨耗している。観察される傷跡の方向は長軸方向が主体で、若干の短軸方向のものが混じる(第38図)。62、63は、この種石器の破片かと思われる。62は、柄部破片で、両面加工であり、薄手である。63は、頁岩製で、両面加工。b面は平坦である。

#### 第5—2類 (53~58)

加工は種々あるが、両側にノッチを入れつまみを作出しているもの。いわゆる「石匙」といわれる仲間である。さらに、3種に細分できる。

(a) 周辺加工ないし片面加工で、縦長の剥片を素材にし、つまみを作出しているもの(54、55、58)。いわゆる縦型石匙である。

54は、b面上部にバルブが残り、上部両側にノッチを入れ、つまみを作出している。a面周辺とb面のつまみ部分に加工がある。つまみ部分の両面には黒い物質(アスファルト?)が付着している。2個に割れて出土した。頁岩製。55は、素材・形態・加工は、54と同様である。a面に大きく原石面が残り、素材面も若干ある。b面上部には、バルバアースカーがある。使用による擦痕が、b面にあり、左側縁のは短軸方向、右側縁付近のは長軸方向である。a面にも若干擦痕がある。58は、この種石器の先端部破片で、片面加工である。

(b) 横型石匙である(56)。

56は、横長の剥片を素材にし、つまみを作出している。a面の周辺とb面のつまみ部分周辺に加工を施こしている。つまみ部分には、黒い物質(アスファルト?)が付着している(図版23B—4)。

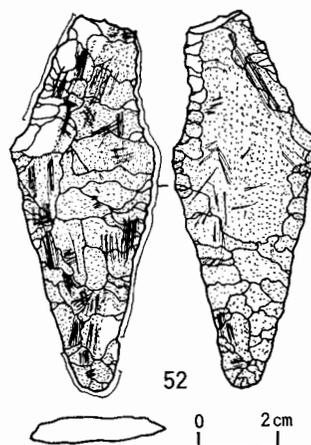
(c) 両面加工で、つまみのある例である(53、57)。

53は、両面共に中央部に素材面を残している。上部両側に、深いノッチを入れ、つまみを作っている。刃部は木葉形ではほぼ対称形である。細かい剝離が、a面左中央と先端エッジおよびa面右ノッチ部分にある。柄部末端とa面右先端付近のエッジは磨耗している。擦痕がa、b両面の先端部とa面柄部にあつて、それは長軸方向が主体で、若干短軸方向である。57は、この仲間のつまみ部分の破片であろうか。

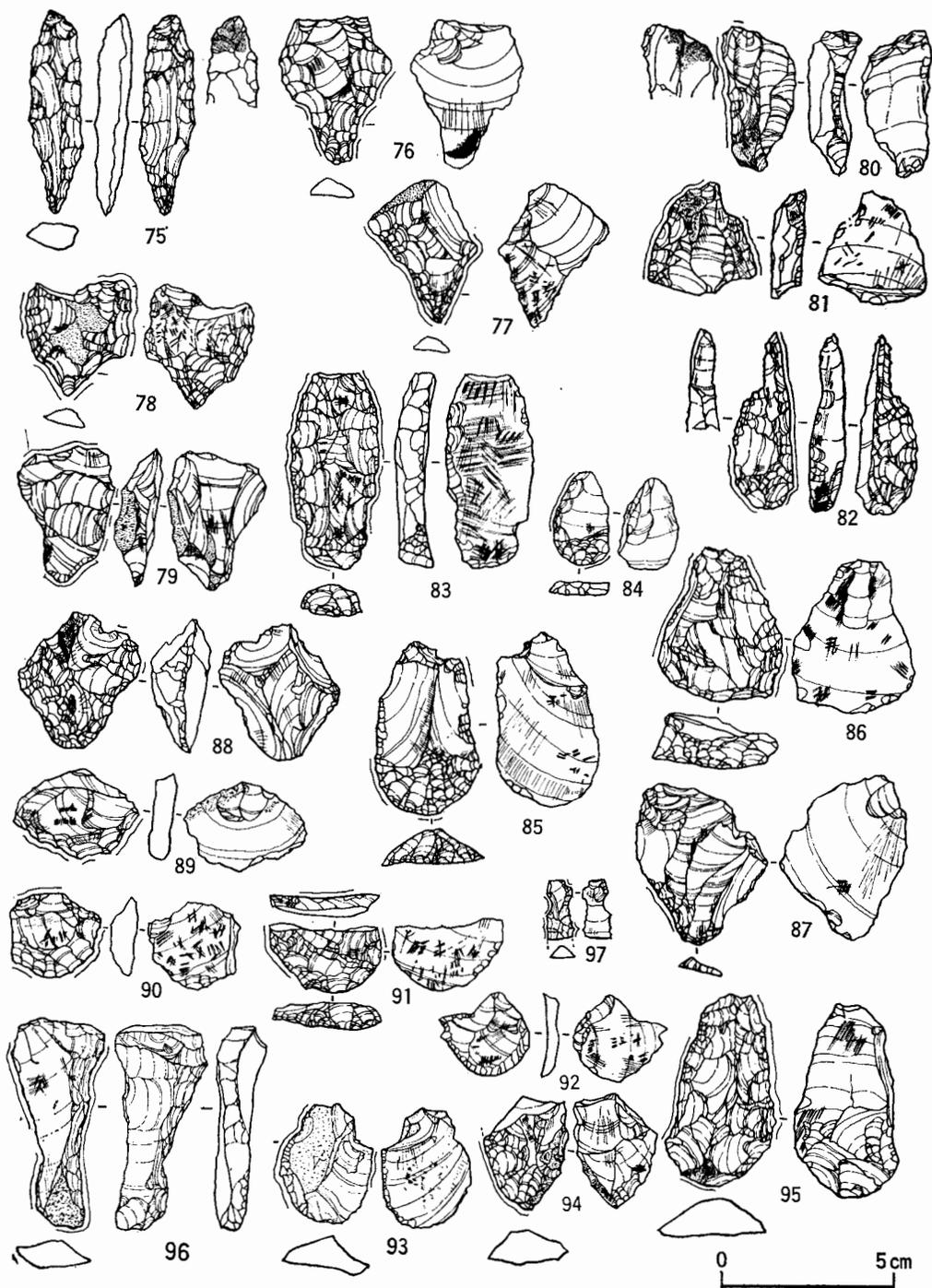
#### 第5—3類 (59~61)

全長は3~4cmで、長さのわりに幅があり、非対称形で、尖頭部を作出しているもの。つまみはない。

59は、両面の全周に背の高い加工をしている。とくに、尖頭部には顕著な加工がある。a面右側辺と基底は切断のままである。a面に丸い破裂痕が無数にある。60は、半両面加工で、a面



第38図 石器実測図(3)



第39图 石器实测图(4) (石錐、搔器、削器)

に原石面を残し、b面上部に素材面がある。非対称形で、尖頭部を作り出している。61はチャート製。半両面加工で、a面左、b面左、尖頭部などに加工が入っている。b面下部は、一次剝離面が大きく残り、非対称形である。

## 6. 石 錐 (第39図75~79) (図版19B)

無柄と有柄がある。

### 第6-1類 (75)

無柄のもの。75は、頁岩製。両面加工で、両面に若干素材面が残っている。尖頭部には入念な加工が入っている。部厚い。b面上端には、黒色の物質(アスファルト?)が付着している(図版23B-5)。a面上端にも若干ある。

### 第6-2類 (76~79)

有柄のもの。76は、幅広の剝片を素材にし、半片面加工したもの。b面尖頭部付近には、左右方向の磨耗痕がある。77は、横長の剝片を素材にし、a面尖頭部に加工を施こしている。b面には、幅広の剝離が2つ入っている。b面尖頭部には、上下および左右方向の短かい擦痕がある。78は、幅広で厚手の剝片を素材にし、半両面加工である。a面には原石面、b面には一次剝離面とバルブが残る。尖頭部は、両面共、加工は入念である。a面上端には切断面が顔をのぞく。細かい剝離が、先端部と柄部の両エッジにあり、a面右の柄部エッジは磨耗している。b面の一次剝離面には無数の短かい左下、右下方向の擦痕が観察される。79は、扁平石核の残核を素材にして、その長軸の一端(a面)に二次加工を入れ、尖頭部を作出している。b面を打面として、鋭角にa面から縦長剝片を4個剥いだ跡がある。a面上部には、バルブがあり、下部は一次剝離面である。細かい剝離が、上縁エッジと尖頭部a面右エッジにあり、先端部のエッジはすべて磨耗している。

## 7. 彫刻刀(?) (第39図80~82) (図版19B)

グレーバー・ファシット(gravet)様の加工が入った特殊な石器である。

80は、厚手の縦長剝片を素材にし、a面両側に二次加工がある。a面左上と右下から短かいファセット(?)が入っている。一次剝離面とファセットのなす角度は直角である。a面上部には、赤褐色の付着物がある(図版23B-3)。81は、厚手・幅広の剝片を素材にし、a面左側面に二次加工がある。a面左上から短かいファセット(?)が入っている。一次剝離面となす角度はやはり直角である。下部は欠損しているが、再度剝離が入っている。82は、両面体石器を、長軸に沿って縦割りした資料である。a面右は他端まで抜けているが、左側は途中までである。細かい剝離がa面右と左下エッジにある。長軸方向の擦痕が右縦割り面下部にある。

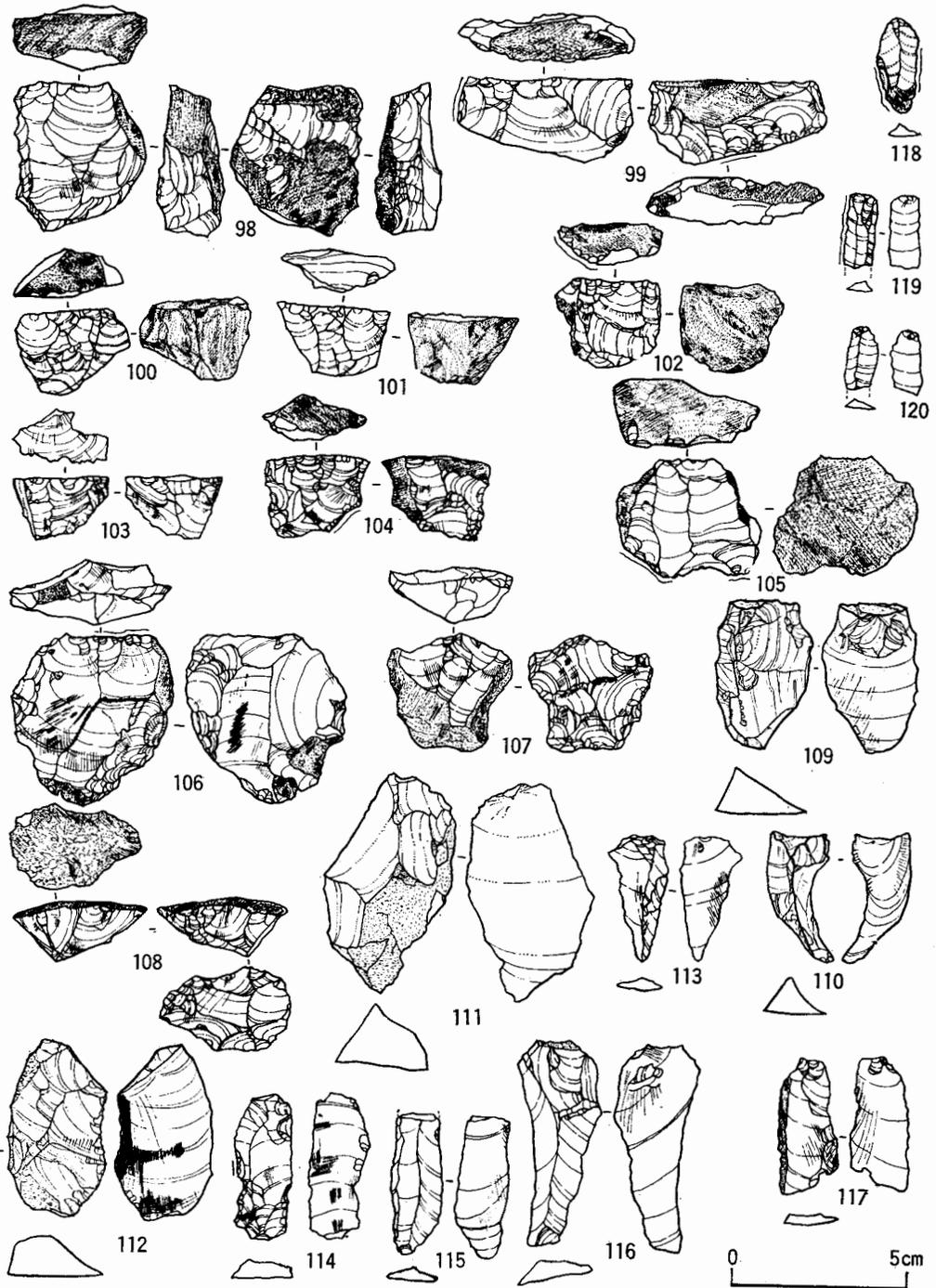
## 8. 搔 器 (第37図66、69、第39図83~92、95、第40図114) (図版19B、20B)

この中には、一端に背の高い面をもつ資料をすべて入れた。2種に分けられる。

### 第8-1類 (69、84~92)

一端ないし全周に背の高い刃部を作出したもので、一般的にいう先刃式搔器(end scraper)、円形搔器(round scraper)などの搔器類である。

85は、幅広の縦長剝片を素材にし、a面両側に不規則な二次加工がある。a面下部には、比較



第40図 石器実測図(5) (扁平石核、クレストッド・フレク、縦長剥片)

的背の高い加工を入れ刃部を作出している。86は、厚手・幅広の剥片を素材にし、**a**面右側辺などに二次加工がある。**a**面下部に背の高い加工を入れ刃部を作っている。**b**面上部に顕著な擦痕がある。下部にも散発的に擦痕がある。91は、刃部の破片である。**b**面には、散発的な短かい擦痕がある。87は、薄手・幅広の剥片を素材に、**a**面下部に背の高い刃部を作っている。刃部は狭い。84は、小形で、**a**面下部に刃部を作っている。**a**面左側辺は切損面である。69は、横長の剥片を素材にし、**a**面下部に背の高い刃部を作っている。92は、小形で、**a**面左側辺には、小さなノッチが入っている。両面に擦痕が散発的にある。89は、厚手の横長剥片を素材にし、**a**面下部に幅広く背の高い刃部を作出している。**b**面左上は焼けている。88は、扁平石核の残核を素材にして、その一端に入念に加工を入れ刃部を作っている。90は背の高い刃部が三方を巡る。**a**面左は欠損している。**b**面には無数の短かい擦痕がある。円形搔器であろうか。

#### 第8—2類 (66、83、95、114)

形態的には、第1類に近く、一端に背の高い面があるが、刃部を明瞭には作出していない。すべて、縦長剥片を素材にしている。

83は、半片面加工で、**a**面下縁と一次剥離面とのなす角度は直角であるが、明瞭な刃部作出の二次加工および細かい剥離はない。**b**面には、長軸および短軸方向の擦痕が一面にある。**a**面にも若干擦痕がある。細かい剥離が、両側エッジにあつて、下半部にくびれがある。114は、**b**面下部のバルブ、打面部分に、**a**面から**b**面に対して加工を入れ、一次剥離面に対して直角な面を作り出している。**a**面中央部下にはくびれがあり、下半部両側には二次加工がある。**b**面には長軸および短軸方向の短かい擦痕がある。66は**a**面の周辺に調整を施こし、下半部には浅いくびれがある。95は、厚手の縦長剥片を素材にし、**a**面全周と**b**面下部に加工がある。**b**面右には切断面が顔をのぞく。**b**面上部と下部に右下方向の擦痕がある。

#### 9. 削 器 (第37図64、65、67、68、70~72、74、第39図93、94、96、97、第41図121~144、146~148、150、152) (図版20A、B)

この仲間は、縦長剥片を素材としたものと横長ないしは幅広の寸づまりの剥片を素材としたものに、大別できる。

##### 第9—1類 (64、65、67、96、97、124~127、132~141、144、146~148、152)

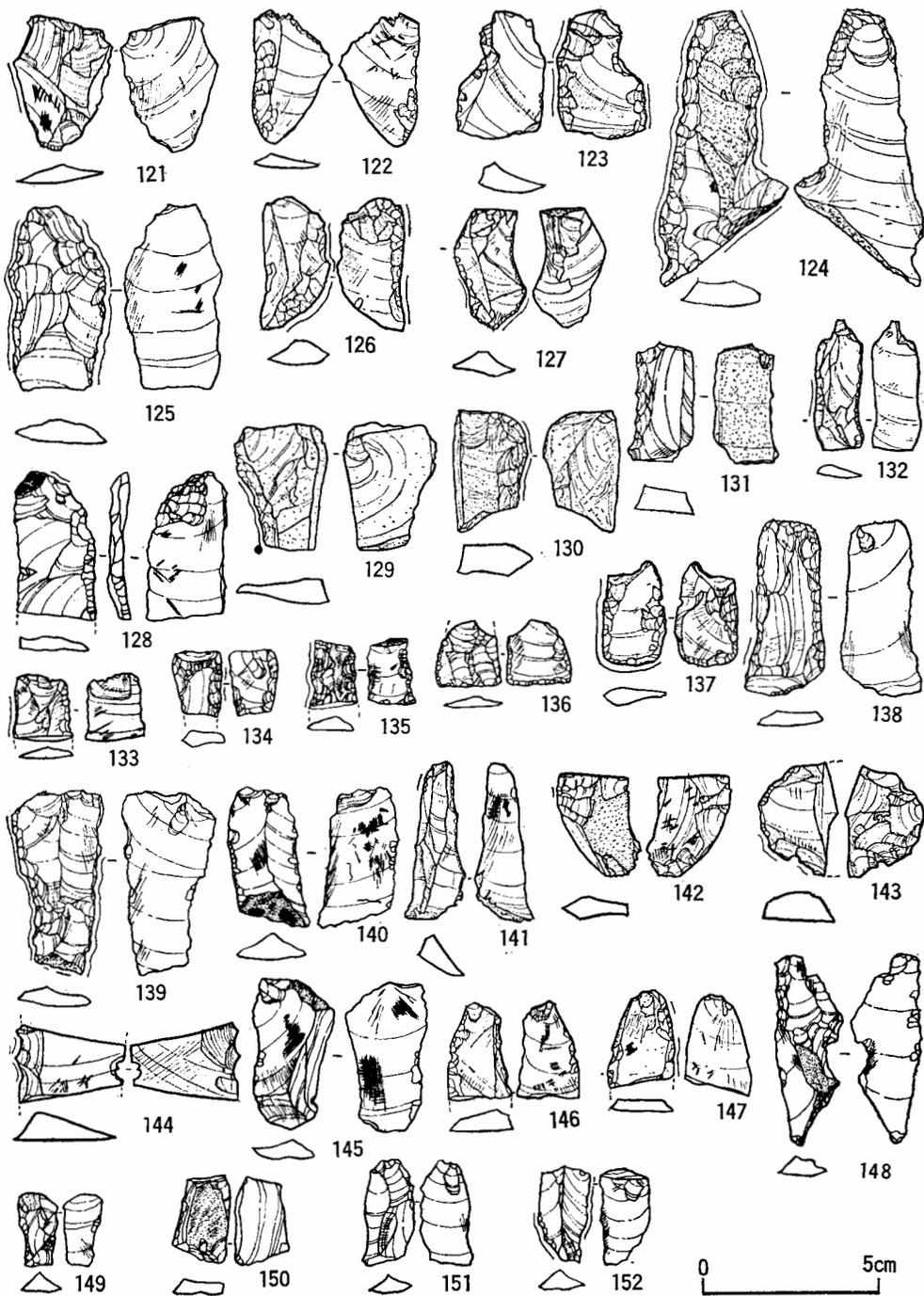
縦長の剥片を素材としたものは、二次加工の位置によって更に4つに細分できる。

(a) 素材の両側および上・下縁など3~4縁に二次加工が入っているもの(136~138)。

136は、打面部分は欠損しているが、**a**面左と**b**面左および下縁に二次加工が入っている。137は、**a**面両側および下縁、**b**面の右と下縁に加工がある。138は、**a**面両側と上・下縁に加工がある。打面は原石面である。

(b) 縦長剥片の両側に二次加工が入っているもの(67、96、124~127、132~135、139、144、146、147)。

67、125、127、132、139は、**a**面両側に二次加工が入っている。67の**b**面には擦痕がある。133~135は、バルブ部分の破片で、やはり両側に加工が入っている。124は、**a**面両側および**b**



第41图 石器实测图(6) (削器)

面バルブ付近に二次加工がある。a面下部に、細かな繰り返しの剝離がある。96は、厚手の剝片を素材にして、a面右側縁とb面左側縁に背の高い剝離が入っている。b面上部には、バルブが残っている。144は、厚手・幅広の剝片を素材にして、a面左に背の高い剝離、b面右とa面右に浅い剝離が入っている。126は、a面右下とb面右側縁に加工がある。146、147は、下部を欠損しているが、a面側縁に加工がある。146のa面左側縁には、一部原石面が残る。

(c) 縦長の剝片の側縁に不規則な剝離の入ったもの(140,141,148,152)。152は、ジャスパー製である。

(d) 縦長剝片の両側に、抉り込み状に二次加工を加えたもの、いわゆるノッチド・スクレイパー(notched scraper)である(64,65,97)。

64,65は、a面両側に、浅い抉り状に二次加工をしている。打面には原石面を残す。

65のb面には、長軸方向の長目の擦痕と左下りおよび短軸方向の短かい擦痕がある。

97は、小形の縦長剝片を素材にし、a面を半片面加工し、上部両側にノッチを入れている。

#### 第9-2類

横剝ぎないしは幅広の剝片を素材とし二次加工を施したもの(68,70~72,74,93,94,121~123,143)。

70は、頁岩製で、幅広の剝片を素材にし、a面下部に刃部を作出している。a面および上辺と左右側辺に、散発的に黒い物質(アルファルト?)が付着している(図版23B-2)。71は、ジャスパー製で、横長の剝片を素材にして、b面およびa面下部に二次加工を入れ、刃部を作出している。

68は、b面下部に刃部を作出している。72,74は、幅広の剝片を素材にして、a面の両側に、細かな二次加工を入れている。121~123は、少し幅広の剝片を素材して、a、b面側縁に不規則な二次加工がある。

93は、幅広の剝片を素材に、a面左とb面左に加工がある。b面には散発的な短かい擦痕がある。

143は、厚手の剝片を素材にして、a面周辺に背の高い剝離、b面全面に浅い剝離が入っている。

94は、a面左に比較的背の高い加工を入れ刃部を作出している。刃部には、細かい剝離がある。a面上部は欠損している。

#### 第9-3類

縦長ないしは、横長の剝片を素材にして、長軸に沿った一側辺を切断ないしは縦長にそいであり、反対側の側縁に二次加工があるもの(128~131,142,150)。

128は、縦長の剝片を素材にしa面左が切断されており、a面右とb面バルブ付近に加工がある。129は縦長剝片を素材にしてa面左が縦長にそいであり、左側に背の高い剝離が入っている。130は、縦長剝片を素材にa面左が切断され、a面右側に二次加工が入っている。129,130は、共に強度に焼けている。

131は、横長の剝片を素材に、a面右側は、縦にそいだ面である。左に背の高い剝離が入っている。b面は原石面である。150も、横長の剝片を素材にし、a面左右および上面は切断されて

いる。a面下部には加工がある。142は、横剥ぎの剥片を素材に、a面およびその上縁には原石面がある。a面右と左下縁は切断されている。a面左とb面右に二次加工が入っている。

#### 10. 縦長剥片 (第40図111~113、115~120、第41図145、151) (図版20B)

113、115~120、145、151は、中形の縦長剥片である。とくに、加工はない。145には、b面に長軸および短軸、右下の方向の擦痕がある。a面にも若干ある。118~120は、小形の縦長剥片である。118は両側エッジに細かい剥離があり、強度に焼けている。119~120は、下部が欠損している。

111、112は、厚手の大形剥片である。111は、頁岩製。とくに加工はない。112は、a面右に不規則な剥離があり、b面には長軸方向の細かい擦痕がある。

#### 11. 扁平石核 (第40図98~108) (図版20A)

扁平石核 (flake core) には、三種類ある。

##### 第11-1類 (98~104)

打角の直角なもので、打面は多くは原石面である。98は、上辺とa面左側辺を打面に、縦長剥片をとっている。99は、上辺と下辺を打面に、幅広の剥片を生産している。100、102は、上辺を打面にして、剥片を生産している。共に打面は原石面である。101は、やはり上辺を打面に縦長剥片を生産している。打面は原石面ではない。103は、上辺とa面右側辺から剥片を生産している。原石面は残っていない。104は上辺を打面にしa面から剥片を生産している。b面からも若干剥片をとっている。

##### 第11-2類 (105~107)

b面に剥離を入れ、打面を作出し、この打面に対し、鋭角な角度で剥片を生産しているもの。106は、b面上部を打面にして、a面から縦長の剥片を生産している。a面の剥離の稜は一部磨耗している。107はa、b各面を打面に、打面に対して鋭角に両面から剥片をとっている。105は、b面の原石面を打面に、鋭角な角度で、縦長の剥片を生産している。

##### 第11-3類 (108)

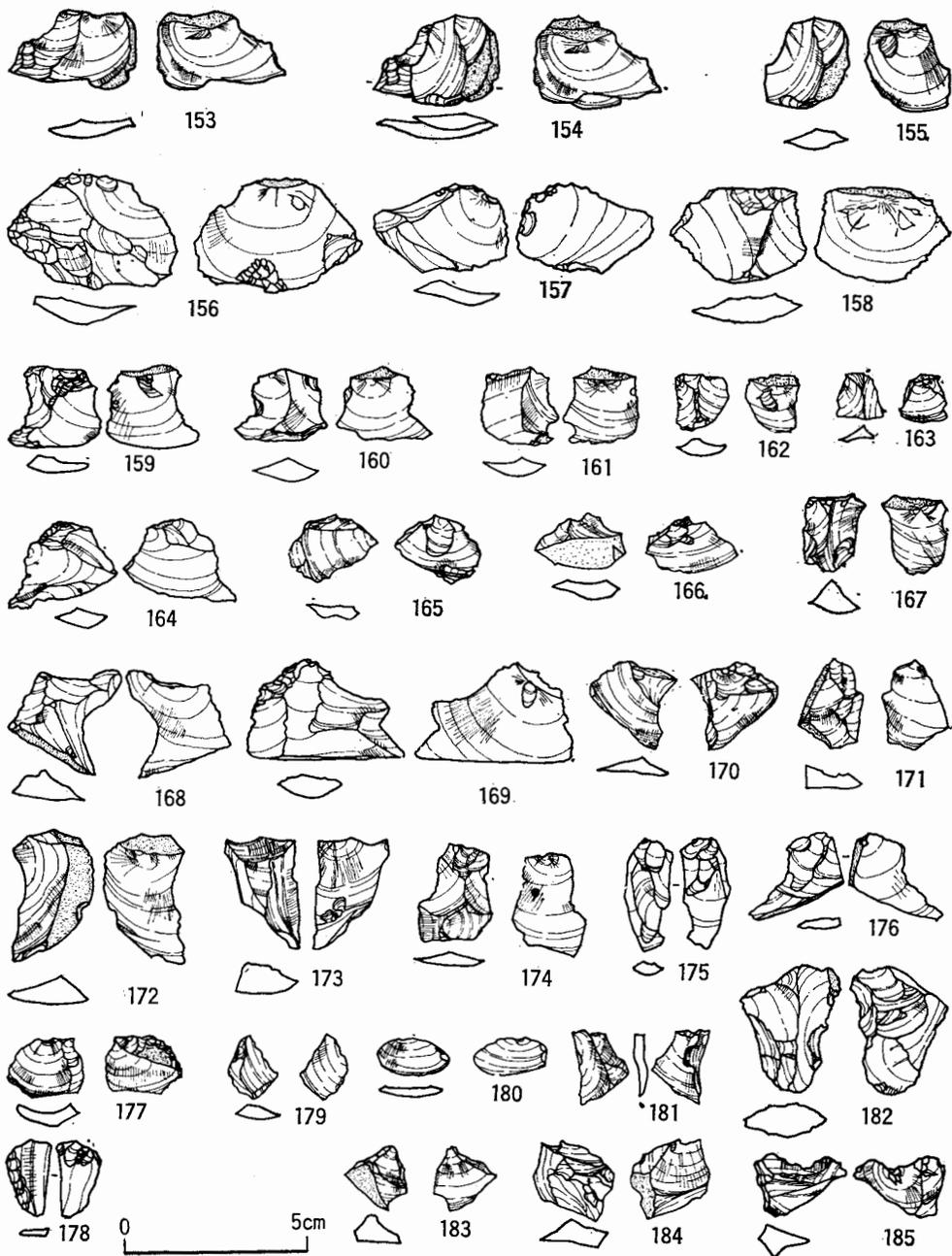
円錐形の石核である。108は、打面は原石面で、そこから全周に亘って、不規則に剥片を生産している。

#### 12. クレストッド・フレーク (第40図109、110、第41図149) (図版20A)

扁平石核のクレストッド・フレーク (crested flake=ridge flake) が出土している。109は、a面の剥離は、すべてb面の一次剥離面で切られている。打面は原石面である。110も、a面の剥離は、b面の一次剥離面で切られている。149は、a面の主要な剥離は、b面で切られている。a面左には、細かな二次加工がある。

#### 13. 一括剥片 (第42図153~185) (図版21A)

第42図に示した資料は、ⅢC8区から出土した、黒耀石の一括剥片である。その内、2点(153、155)は接合した。154はその接合図である。生産された剥片は、一般に寸の短い幅広の剥片である。157、172~176のような、少し縦長の剥片もある。二次加工のあるものは、177、178の2例



第42图 石器实测图(7) (一括剝片)

だけである。母体となった扁平石核は、出土していないが、剥片の量からいってかなり大きなものであったと考えられる。打面は原石面である。182と185は、石核の関係剥片かもしれない。

これらの資料は、剥片の生産に関して必ずしも明瞭な規則性が認められるとはいえないが、(1)大形の横長剥片(153、156、158、169)、(2)寸の短かい幅広の剥片(155、159~168、170、171、177~181、183など)、(3)少し幅広の縦長剥片(157、172~176)に大まかに分類でき、多種類のある程度均一性のある剥片を生産していた可能性もある。

#### 14. 石 斧 (第43図186~193、第44図194~198、200、201) (図版 22A、B)

大きく三種に分類できる。

##### 第14—1類 (186、187、195、198)

厚手・幅広の素材を用い、両刃のもの。

186は、素材を荒割りし研磨したもの。a面はほぼ全面、b面は刃部と左右の隅のみ研磨している。左右の側面は、原石面を軽く研磨しただけである。b面は平坦で敲打器で繰り返し敲打した跡が観察される。整形痕は、右下りが主体で、刃部は長軸方向である。定角式で、両刃である。187も、素材を荒割りし、研磨したもの。a面および左右の側面は全面研磨している。b面の研磨は刃部が主で、あとは散発的である。a面は多少曲面があるが、b面はほぼ平坦である。刃部が少し非対称の両刃である。上端は欠損。整形痕は、a、b両面は右下り、側面は短軸方向である。198は、この仲間の刃部破片であろうか。整形痕は長軸方向である。195も、この種の胴部破片かと思われる。b面は平坦である。

##### 第14—2類 (188、189、191、192、197)

薄手、幅広の板状の石を素材にし、片刃のもの。いわゆる扁平片刃石斧である。手斧として用いられたと思われる。

188は、板状石を素材に、その両側面付近などに荒い加工を施し、その後両側面および刃部両面を研磨している。b面上部は、全く節理面のままで平坦である。厚さは薄く、片刃である。整形痕は、すべて短軸方向。柄部は少し欠損している。189は、やはり板状石を素材にし、局部磨製したもの。厚さは薄く、b面の刃部は、b面に対してかなりの角度をもって作出しており、片刃、直刃である。b面は、きわめて平坦に作ってある。整形痕は、a、b両面は長軸方向、側面は短軸方向である。刃部のエッジには、使用による刃こぼれとb面の方に深いきず跡がある(図版23B—1)。191、192、197は、同種の破片かと思われる。192は、両刃である。

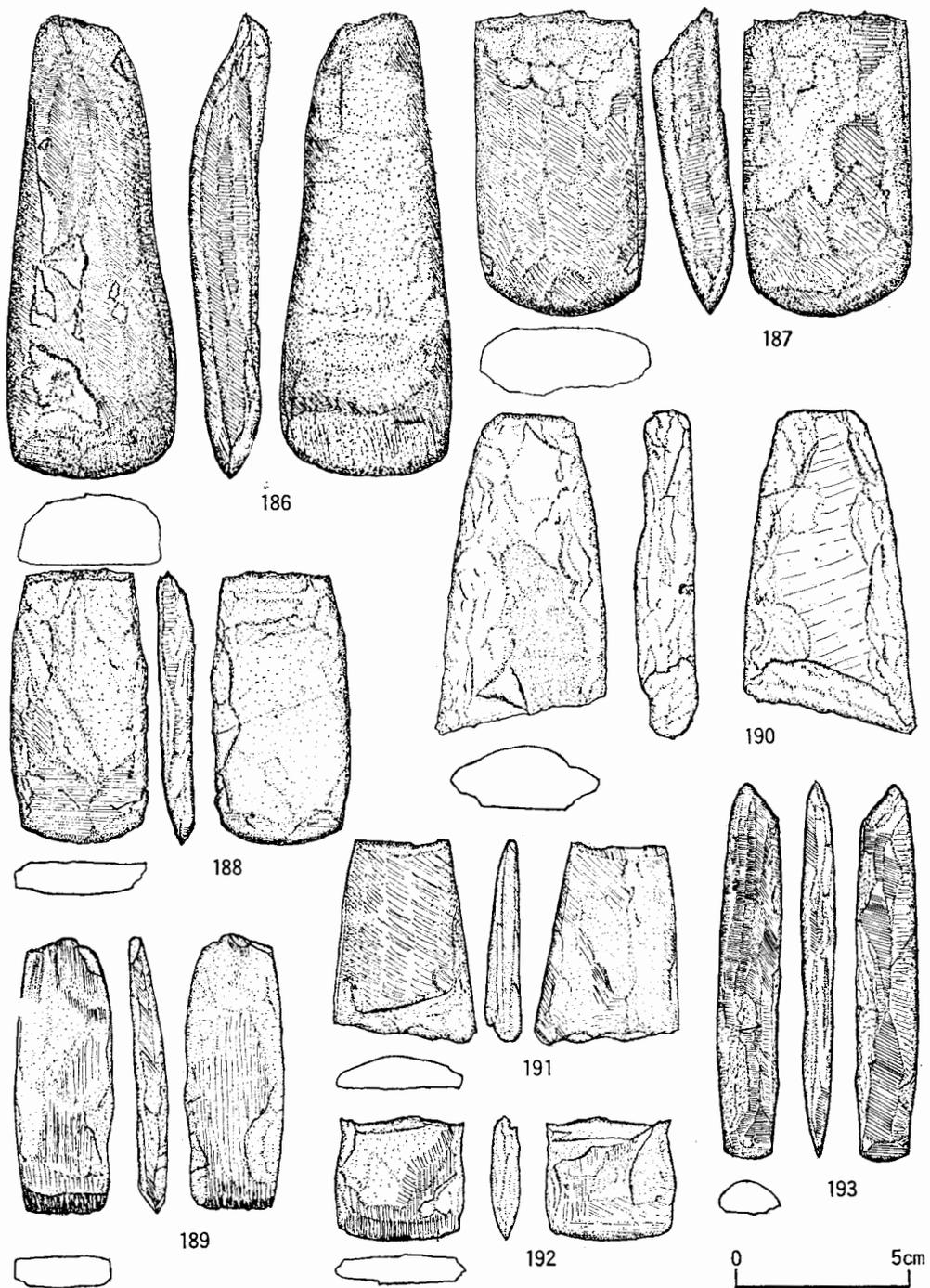
##### 第14—3類 (193)

狭長で、刃部の幅が狭いもの。

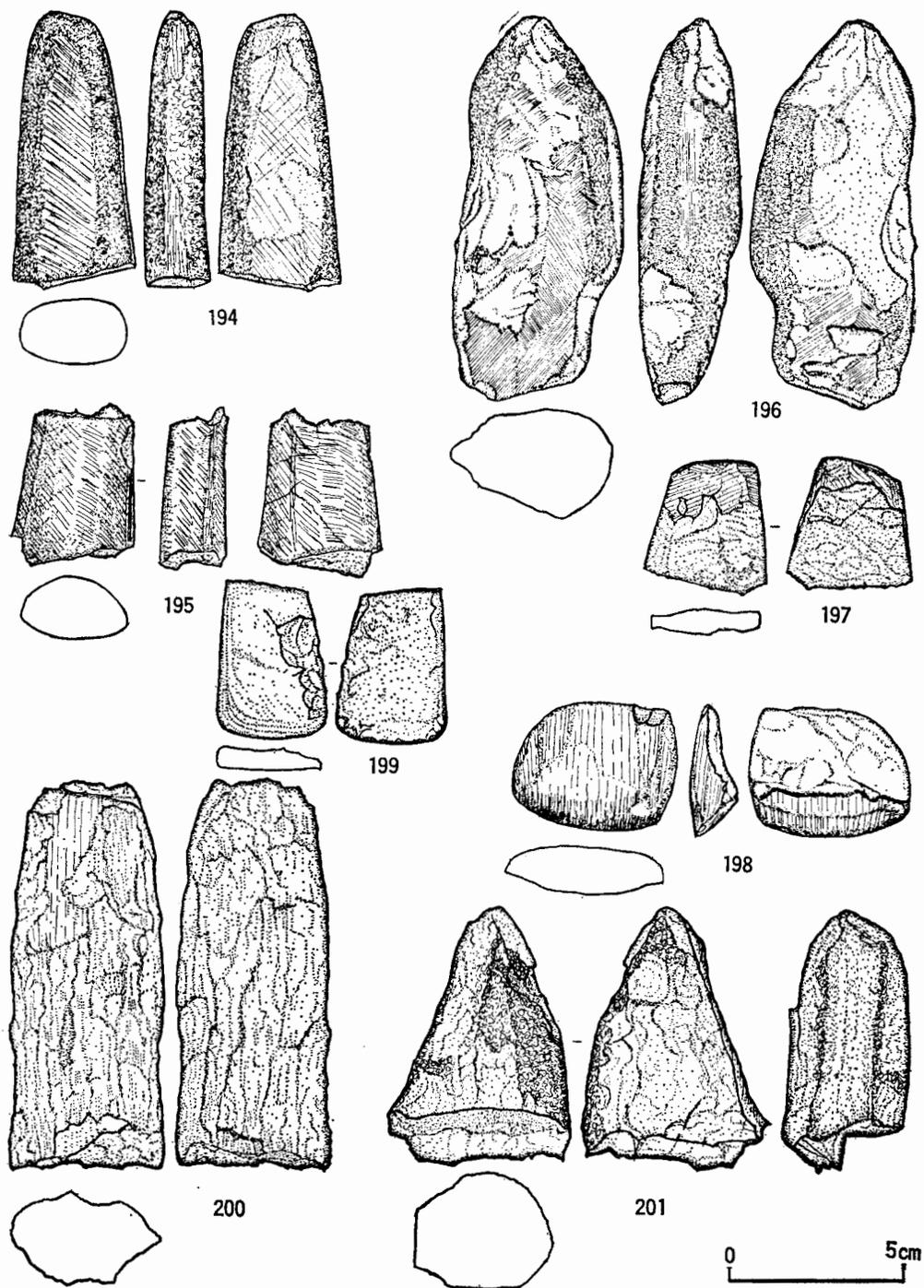
193は、両面をほぼ全面研磨している。局部的に素材面が残っている。長さのわりに幅がなく、両刃である。b面はあまり曲面は強くない。整形痕は、短軸方向と右下りである。全体として、丸のみ形石斧に近いが、刃部に抉ぐりは入っていない。

##### 石斧の未成品 (190、194、196、200、201)

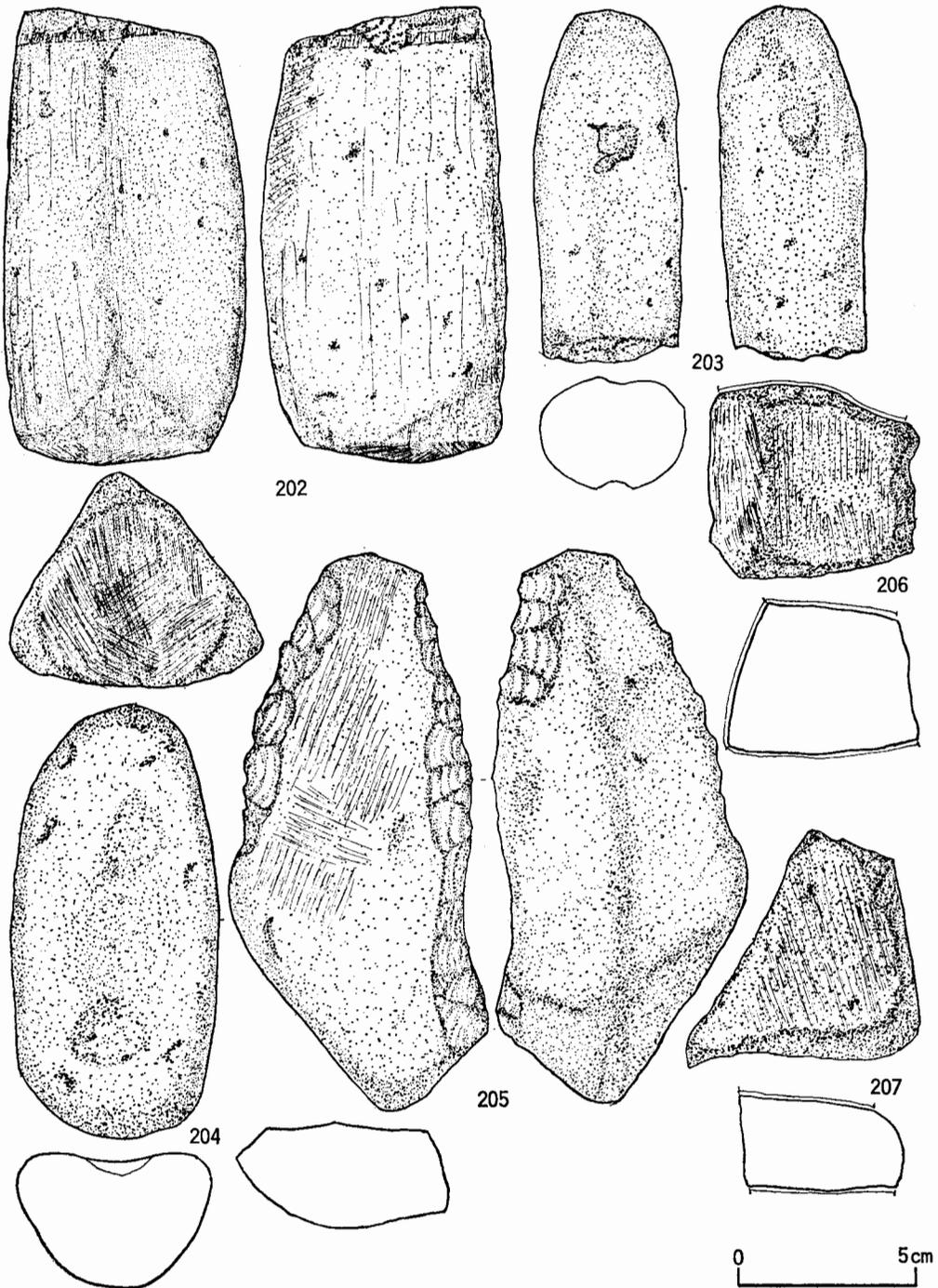
196は、原石を荒割りし、一部研磨してある。整形痕は、a、b両面は、左下りと右下りの方



第43图 石器实测图(8) (石斧)



第44图 石器实测图(9) (石斧)



第45図 石器実測図(10) (スリ石、くぼみ石、礫器、砥石)

向、a面右側辺は長軸方向である。また側面付近には、整形のための敲打器による繰り返しの敲打がある。194は、下部を欠損している。b面には、原石面が残り、右下りの軽い研磨が観察される。a面も研磨している。整形痕は右下りである。左右の側面は、やはり敲打器による細かい繰り返しの敲打がある。側辺も軽く研磨している。190は、a面の一部に原石面があり、b面には幅広い原石面がある。その他は粗い剝離を入れ、石斧の形を整えている。b面の原石面には、左下りの軽い研磨痕がある。200は、素材である。側辺に少し敲打の跡があり、a面上部に研磨した所がある。201も素材である。a面左側辺と右側辺は原石面が残る。整形のため粗い剝離と細かい繰り返しの敲打がある。

**15. すり石** (第45図202) (図版21B)

1点出土した。202は、断面三角形。三面共、長軸方向の細かいすり跡がある。下面にも4方向のすり跡がある(図版23B-6)。上面は、素材の面のままであるが、その3周の角は、面取りされている。この石器は、すり跡の方向からみて、三面を利用した長軸方向の作業と石器を立てての3~4方向の作業を行っていたことが考えられる。

**16. くぼみ石** (第45図203~204) (図版21B)

2個出土している。203は、円柱状の河原石を素材にして、a、b両面に1個ずつ浅いくぼみがある。204は、カマボコ形の河原石の平坦面の方に2個の浅いくぼみがある。

**17. 砥石** (第45図206~207) (図版21B)

206、207は、砂岩製で、206は、4面を利用している。図上部にある面は、少しコンケーブ(concave)している。細~中砥である。

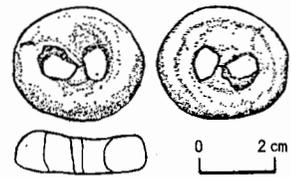
207は、2面を利用し、一部欠損している。荒砥である。

**18. 磔器** (第45図199、205) (図版21B)

205は、河原石を素材に、a面両側とb面左上に荒い剝離が入っている。a面上部は、原石面を軽く研磨している。長軸方向が主で、短軸方向も若干ある。石斧の未成品の可能性もある。199は、性格不明であるが、a面に原石面と右側に荒い剝離がある。b面は節理面で、その周辺に細かい繰り返しの剝離がある。上部は欠損している。

**19. 有孔石製品** (第46図) (図版22B)

円盤状の転礫に2個の穴があいている。a面左のものは自然にあられたものと思われるが、a面右のものは、有孔部の上下に穿孔した時の溝が残っており、全体に滑らかで人工的に整形していると考えられる。

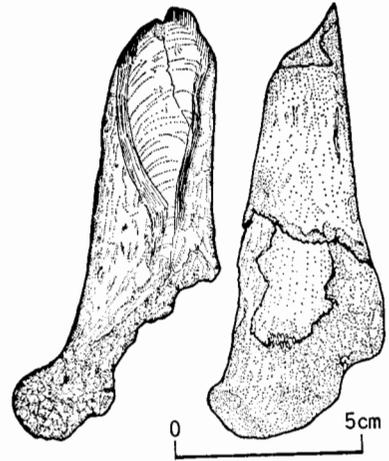


第46図 有孔石製品実測図

**20. 骨製刺突具** (第47図) (図版18B)

シカの左側大腿骨の近位部を利用したものである。黒色土層より出土したため、全体に腐蝕が著しく脆くなっている。加工痕と使用痕が腐蝕のため明瞭でないこと、出土層位が黒色土層上部であることから、現代のシカの骨が混入した可能性があり、骨器であるかどうかは疑問が残る。しかし、時期はともかく、シカの大腿骨を人為的に斜めに切断したものであることは明らかである。切断面はよく磨耗しており、他の自然面と比べてこの部分が、とくに磨擦を受けていること

を示している。とりわけ、その先端部付近は側面からみると浅くぼんでおり、刺突具としての特徴を備えている。以上の観察から、ここでは一応「骨器」と考えておきたい。切断面の状態からみて金属器によって切断されたものと考えられる。陸獣の四肢骨を利用したこのような形態の刺突具は類例が少なく、この骨器が当遺跡においてどの文化に属するかは明らかではない。（この骨器に関しては、西本豊弘学兄の教示をえた。）



第47図 骨器実測図

本遺跡出土の石器について、若干考察を加えてみたいと思う。比較の対象は、縄文中期以降の単一土器型式との共伴関係がかなりはっきりした遺跡を中心に行なった。ただし、全体に出土点数の少ない器種に関しては、幅広い時期の遺跡を対象にした。

### 1. 石 鏃

当遺跡から出土した石鏃は、第1号ピット出土の1点の無茎鏃をのぞいて、すべて有茎である。道内の縄文中期以降の遺跡を通観するに、円筒上層式土器群では、亀田郡桔梗村サイベ沢遺跡（児玉・大場・武内 1968）第1地点第5層（サイベ沢第VI類）、函館市見晴町遺跡（高橋 1966）、同サイベ沢B遺跡（森田・高橋 1967）からは、本遺跡で第1—1類と第1—3類と分類した石鏃がみついている。余市式土器群では、石狩郡当別町伊達山遺跡（第1地点）（岩崎・三室・室田 1970）、同郡厚田村聚富（岩崎・藤村 1964）から、伊達山式土器と共に第1—1類と第1—3類の石鏃が出土している。亀田郡亀田町煉瓦台遺跡（大場・蛭子 1965）からは、入江第III類の土器と共に、第1—1類の石鏃が出ている。北筒式土器群では、営呂郡営呂町朝日トコロ貝塚（東大文学部 1963）のAトレンチ第6層（貝層）、同じくEトレンチ第4層（貝層）から、トコロ第6類土器と共に出土した石鏃は、数は少ないが各々第1—1類、第1—3類である。後期では、札幌市手稲遺跡（大場・石川 1956）から、第1—2類の石鏃が出土している。静内郡静内町御殿山遺跡（藤本編 1963）から出土した石鏃は、第1—2類が主体で、内数点が第1—1類の形態である。夕張郡長沼町幌内堂林遺跡（野村・宇田川 1967）の堂林式土器に共伴した石鏃は、第1—2類が多く、それに第1—1類と無茎鏃がある。同郡由仁町東三川遺跡（野村 1969）の後期末から晩期初頭の土器群に伴ったのは、第1—2類と第1—1類、第1—3類の石鏃である。なお第1—2類の内1点は、尖頭部は五角形で、本遺跡の第37図28の資料に近い。晩期では、夕張郡栗山町鳩山遺跡（野村 1964）第3地点の、タンネトウL式を主体とする土器群に伴った石鏃は、無茎狭長の石鏃である。また、雨竜郡妹背牛町メム川遺跡（高橋・野村 1972）のタンネトウL式を中心とする土器群に伴出したのも、やはり無茎狭長の石鏃が主である。ただ、第1—3類のタイプが若干ある。上磯郡木古内町札刈遺跡（札刈遺跡調査団 1971）からは、大洞A式土器と共に、第1—1類の有茎鏃が出土している。続縄文時代では、白老郡白老町虎杖浜アヨロ遺跡（名取・

峰山 1962) の下層から、恵山式土器と共に第 1-1 類の石鏃が出土している。また、網走郡女満別町住吉遺跡(大場・奥田 1960) C 堅穴から、チブスケ I 式土器と共に、数多くの無茎狭長鏃と第 1-3 類、第 1-2 類の有茎鏃が出土している。

以上をみると、本遺跡の第 1-1 類、第 1-3 類の石鏃は、縄文時代中期のサイベ沢第 VI 類、見晴町式、サイベ沢第 VII 類、伊達山式、入江第 III 類そして出土点数が少ないがトコロ第 6 類土器などに多い。ただ、後期末から晩期、続縄文時代にも若干あるが、主体を占めるものではない。第 1-2 類の石鏃は、手稲式、御殿山式土器などの後期に圧倒的に多い。しかし、第 1-1-a 類の中でも、比較的尖頭部の長さとの幅の比が 1 に近いものは後期にもある。中期は、一般に大きく、後期は小形の鏃が多いともいえそうである。

本遺跡から出土した石鏃の中で、1 つの特徴と思われるのは、第 37 図 16 例に端的に示されるように、素材を折りとって、大まかな石鏃の形を作るという技法である。これらの切断面が、欠損面でないことは、その面に加工が施こされていたり(第 37 図 16 例)、そこを打面とし二次加工が施こされている(同図 34、35、37、38 例) という点から区別される。この技法を有する例は、周辺加工の石鏃に多いが、33、38 例の如く、半両面加工の石鏃にもある。これに類した技法で作られた石鏃は、釧路市東釧路貝塚(河野・沢ほか 1962) の第 V 群の押型文土器(朱円式、温根沼式)と共に、多量に出土している。本文の説明にはないが、同報告第 33 図に示された資料は、多くは切断することによって大まかな形態を整えている。ただし、すべて無茎である。また「表裏の逆の方向のみ再加工」(p. 52) するという例も、本遺跡でみとめられる。

石鏃の重量は、ヒストグラフをとるとかなりまとまりがあることがわかる。0.3~0.7g は 1 個。0.8~1.2g は 4 個。1.3~1.7g は 4 個。1.8~2.2g は 2 個。3.3~3.7g が 1 個。3.8g 以上が 1 個である。特別に重い 2 個を除いて、1±g の所に集中している。弓矢のような投擲体の刺突効果を増すには、石川元助(石川 1963) によれば以下の 4 つがあるといわれる。

- (1) 先(尖)頭部の鋭利性
- (2) 投擲体の重量
- (3) 発射速度
- (4) 毒物との結合

石鏃の重量は、(2)と(3)に関連する。矢を水平飛行させ、命中度を高めるという点では、鏃は重い方が、矢全体の重心も先端部に移動し、理論的にはいい。しかし、弓矢の構造上、極端に重すぎるとは、人力に頼るかぎり、(3)の発射速度が制限され、また本来直線(水平)的飛行をせねばならないものが、重いがために空中飛行軌道の弧の曲率が増し、あまり遠くに飛ばなくなると同時に、命中度もかえって悪くなるであろう。従って、弓の強さ、矢の筈の長さとの重さ、狩猟方法などの条件から、選択的にある範囲内の重量の石鏃が作られ、用いられたことは充分考えられる。

## 2. 石 鏃 (先)

石鏃(先)の形態の石器は、縄文時代では、前期の空知郡栗沢町加茂川遺跡(岩崎・宇田川・本田・河野 1966)、東釧路貝塚の第 V 群土器、名寄市日進遺跡(河野・佐藤 1963) の第 2 トレン

チ、室蘭市ボンナイ遺跡（大場ほか 1962）（円筒下層式、円筒上層 a、b 式）などで出ている。全長は一般に 5～10cm で、点数は少なく、柄部にノッチが入っていたり、基底が平坦なものが多いようである。中期に入って、円筒上層式土器群には、明確な伴出例はない。北筒式土器群では、朝日トコロ貝塚 A トレンチ第 6 層から、多量に出土している。全体に長く、7.5～5cm 位である。女満別住吉 A 堅穴（大場・奥田 1960）からも、1 点出土している。余市式土器群では、伊達山遺跡、聚富遺跡から、長さ 5 ± cm の小形品が数多く出土している。柄部は尖っている。後・晩期は、管見の範囲ではみあたらない。統縄文期に入って、アヨロ遺跡、女満別住吉 C 堅穴などから、石銛（先）が出土しているが、住吉 C 堅穴出土例は、大形で、柄部の基底が平坦なものが多い。通観するに、縄文時代早期、統縄文期の資料は、大形品で、基底が平坦なものが多いようである。本遺跡出土例は余市式土器文化の伊達山式土器に伴う例に最も近い。トコロ第 6 類土器に伴った可能性もあるが道央地方での報告例がないので、比較の対象にはならない。

この「石銛」という名称は、東大文学部（東大文学部編 1963）で朝日トコロ貝塚の例をもとにはじめて用いられたものである。それによると、長さ 5～10cm、重さ 4～20g で、投槍あるいは銛として用いられたものという。しかし、この名称は、機能を考慮した場合、銛とは、回転離頭銛をさすのであって、それ自身で柄に着柄して「銛」として用いることは不可能である。これに合う骨製などのシャフトを想定しない限り、不適当なものと思われる。統縄文期の虻田郡礼文華遺跡（恵山式土器）からは、この種石器に合う、骨製のシャフトがみつまっている（渡辺 1973）。この遺跡出土例でみる限り、大きさのわりに厚さが薄かったり、片面が平坦であることは、この種シャフトにセットするのに適していると考えられる。

### 3. ナイフ状石器

第 5—1 類の柄を作出した半両面加工のナイフ状石器、第 5—3 類のナイフ状石器は、既報告例では、明確に対比できるものは少ない。その内、第 38、39 図の 52 例は、全面磨耗しており、その擦痕の方向からみて、長軸方向と短軸方向の作業を行っていることがわかる。

第 5—2 類とした「石匙」に関しては、縄文時代に幅広く認められる。縄文時代中期以降の類例をあげれば、中期では、サイベ沢遺跡第 1 地点第 5 層から、サイベ沢第 VI 類土器と共に周辺・片面加工の狭長縦形石匙が出土している。朝日トコロ貝塚 A トレンチ第 6 層、E トレンチ第 4 層、女満別住吉 A 堅穴などからは、トコロ第 6 類土器に、粗製石刃を素材にした周辺・片面加工の狭長縦形石匙を伴っている。伊達山式土器に伴出したという報告例はないが、同系統の煉瓦台遺跡からは、入江第 III 類土器に、周辺加工の幅広・矩形の石匙が伴っている。後期では、手稲遺跡から周辺加工の縦長石匙と両面加工の縦長石匙が出ている。御殿山遺跡のものは、矩形・幅広の石匙である。また、堂林遺跡例も、矩形・縦形である。晩期の桧山郡上ノ国村上ノ国遺跡（大場・松崎・渡辺 1961）からは、晩期初頭の土器と共に、横形石匙が出ている。同時期の三石郡三石町ホロケ遺跡（藤本 1964）からは、幅広の縦形石匙が出土している。後期末から晩期の恵庭市柏木川遺跡（高橋編 1971）からは、幅広の縦形石匙と横形石匙が出ている。また、亀田郡尻岸内町日ノ浜遺跡（吉崎 1965）からも、幅広の縦長石匙が出土している。静内郡静内町大狩部遺跡（藤本

1960) 以後、続縄文期には、この種の石器はなく、「靴形石器」といわれるものが出現する。

従って、本遺跡で出土した第5-2-a類の狭長縦形石匙は、縄文時代中期から後期中葉頃迄の所産である。第5-2-b類の横形石匙は、晩期の土器に伴った可能性が強い。第5-2-b類の両面加工の石匙は、手稲遺跡で1点みられたのみである。

本遺跡の石匙のつまみ部分には、黒い物質(アルファルト?)が付着している(第38図54、56例)。同様な付着物は、無柄の石錐、横形の削器にも認められた。他に類似を求めれば、木古内町札刈遺跡で、有茎鏃の茎部にタール状物質がある例と見晴町遺跡で、石斧の刃部にタール状物質が付着している例がある。着柄の問題を考える上で重要である。また、第38図53と55例には無数の擦痕がある。53例は、先端部両面に集中してあり、長軸と短軸方向の作業を行っている。55例も、同様の作業を行なっているようである。

#### 4. 石 錐

本遺跡出土の石錐は、部厚い無柄の錐1点と有柄の錐4点である。縄文時代中期に石錐が出土したという報告例は管見の範囲ではない。後期に入って、手稲遺跡から、有柄の錐が1点、御殿山遺跡から幅広の有柄の錐とつまみ状の柄のついた錐が出土している。晩期では、メム川遺跡から有柄の錐が出土しているのみである。続縄文期も、報告例はない。この石錐は、加茂川遺跡、東釧路遺跡第V群土器、日進遺跡第2トレンチ、上川郡東旭川町日の出遺跡(佐藤 1960)などの縄文時代前期の遺跡で、有柄の例が多くみられる。

本遺跡出土の第6-1類は、報告例はない。第6-2類は、形態的に、御殿山、メム川遺跡で出土している幅広の柄を有する例に類似している。なお、第40図79は、扁平石核の残核を再利用したものである。同様な例は、搔器でもみられる。また、同図76、77例は、尖頭部に擦痕がある。76例は、左右方向で、石錐を回転して用いたことが想像され、77例は、刺突と回転の作業をこの石器で行なっていたことがわかる。また、79例の先端エッジは磨耗している。75例の無柄の錐の基部には黒い物質が付着している。着柄して用いたことがほぼ明らかである。

#### 5. 彫刻刀(?)

当遺跡からは、グレーバー・ファシット様の加工の入った石器が2点みつかった。

この種の石器がみつかったという報告は、管見の範囲で、縄文時代早期では、白老郡虎杖浜遺跡(大場・扇谷・竹田 1962)、釧路市沼尻遺跡(吉崎 1965)、目梨郡羅白町中谷遺跡(大沼 1971)などがある。虎杖浜遺跡例に関しては、図でみる限り、矢印の示された方向には、ファシットは入っておらず、彫刻刀としては疑問がある。前期では、虹田郡伊達町茶呑場遺跡(名取・峰山 1963)から、グレービング・ツールが出土しているという。図示された5点は縦長・横長の剝片の一侧を縦長にそいだ資料である。内4点は鋭角彫刻刀に近く、1点は単打彫刻刀に近い。日進遺跡の第1トレンチから出土したという彫刻刀は、疑問がある。第2トレンチからは、チャート製の鋭角彫刻刀が2点出土している。1点は1本、もう1点は3本グレーバー・ファシットが入っている。東旭川町日の出遺跡からは、神居式土器と共に、鋭角彫刻刀が出土している。周辺に剝離が入っている。あと、続縄文期に入って、目梨郡羅白町合泊遺跡(宇田川・鶴丸・豊原 1971)

第2地点からも、彫器(?)が出土している。1点は、鋭角彫刻刀、もう1点は通常と単打のダブル彫刻刀である。また、勇払郡鶴川町鶴川遺跡(大場・扇谷 1964)からも、黒耀石の両面体石器の一端にファシットを入れた資料が出ている。さらに、斜里郡斜里町チブスケ遺跡(田沢・佐藤・相川 1959)からも、鋭角彫刻刀が出土している。

縄文時代早期と前期の茶呑場遺跡の不確実な例を除いて、ほとんどのものは鋭角彫刻刀(angle graver)である。当遺跡のものも、ファシットは、短かく幅広であるが、巨視的に鋭角彫刻刀の仲間かと思われる。ただ、第40図81例は、搔器の単なる欠損品の可能性もある。

彫刻刀は、基本的に骨角器製作に関連した加工具と思われる。縄文時代およびそれ以降の時期にも、存在した可能性がある。勿論、続縄文時代以降には、金属器が流入し、これによって変られたことは考えられる。

## 6. 搔 器

本遺跡からは、先刃式搔器(end scraper)が4点、円形(round)ないし母指状(thumb)搔器は、5点出土している。

縄文時代中期以降で類例を求めると、サイベ沢B遺跡から円形搔器、朝日トコロ貝塚Eトレンチ第4層からは、幅広・矩形の先刃式搔器、由仁町東三川遺跡からは、幅広・矩形の先刃式搔器が、メム川遺跡からは、縦長の先刃式搔器と母指状搔器が出土している。続縄文期に入って、女満別住吉C堅穴からは、縦長の先刃式搔器と円形搔器が、羅臼町合泊遺跡第2地点からは、裏面加工のある幅広・矩形の先刃式搔器が出土している。

本遺跡の先刃式搔器は、概して幅広・矩形である。朝日トコロ貝塚、東三川遺跡などに類例が求められるが、特定時期を限定することは難しい。円形、母指状搔器も同様である。

なお、第8-2類とした石器は、既報告例に類例を求めることは難しいが、未発表資料でトコロ第6類に共伴した例がある。第8-1類、第8-2類の石器の腹面には、ほとんどの例に擦痕がある。第8-1類のは短かく、長軸および短軸、斜め方向の擦痕であり、第8-2類は、長目の長軸ないし短軸の擦痕である。両者は機能が異なると思われる。

縄文時代において、搔器に類した資料が存在することに、はじめに気がついたのは八幡一郎(八幡 1935)であった。氏は、日本における中石器文化の追求の中で、東北地方に多い篋状石器を、ヨーロッパの旧石器時代、とくにアシュール期以降のscratcher(keeled scraper)に類例を求めている。この「石篋」といわれる石器は、北海道では、その出土は不顕著である。逆に、旧・中石器時代のend scraper, round scraper, thumb scraperに類したものが、北海道では縄文文化、続縄文文化、オホーツク文化などに顕著に認められる。東北地方では、これほど定形化したものはないと思われる。

## 7. 削 器

第9-2類に分類した横型の削器の類例は少ない。見晴町遺跡、女満別住吉C堅穴などで、幅広・矩形の削器が報告されている程度である。一方、第8-1類の類例は、見晴町遺跡、朝日トコロ貝塚Eトレンチ第4層、伊達山遺跡、聚富遺跡、手稲遺跡、栗山町鳩山遺跡第3地点、斜里

町チブスケ遺跡など、道東域を中心に縄文～続縄文時代まで、一般的に認められる。トコロ第6類土器、伊達山式土器には多いようである。この内、朝日トコロ貝塚のトコロ第6類土器に共伴した縦長剥片は、大井晴男（大井 1965）によれば、石刃技法の所産とみなされている。

第9—3類の例は、明確なものはない。

## 8. 扁平石核

本遺跡出土の扁平石核は3類に分類できた。扁平石核の報告例は、縄文時代中期以降では、朝日トコロ貝塚Aトレンチ第6層から、円礫を素材に鋭角な角度で剥片を生産したものが出土している。下部は原石面である。大井晴男（大井 1965）によると、粗製石刃を生産した円錐形の石核も、トコロ第6類に伴ったものという。伊達山遺跡では、打角が直角な扁平石核が数多く報告されている。生産している剥片は、ここで数多く出土している縦長剥片である。本遺跡出土の第11—1類に類似している。また、朝日トコロ貝塚で出土したのと同様な円礫を素材にした石核も1点図示されている。羅臼町合泊遺跡第2地点の資料は、打角が直角なもので、幅広・短形の剥片を生産している。

第11—2類に類似の資料は、明確なものはないが、しいてあげるとすれば、朝日トコロ貝塚、伊達山遺跡などで出土している前述の円礫を利用した石核であろう。

なお、本遺跡からは、第11—1類の石核から剥がされたと思われる *crested flake* が3点出土している。また、数多くの縦長剥片も出土している。

本遺跡および伊達山遺跡出土の扁平石核は、朝日トコロ貝塚で発見された円錐形石核ほど、規則性をもって縦長剥片を生産しているとは考えがたい。第43図に示したのは、ⅢC8区から出土した一括剥片である。一般に、矩形の幅広剥片を生産している。

## 9. 石斧

第14—1類、第14—2類とした石斧は、両者セットで幅広い時期にある。縄文中期以降では、朝日トコロ貝塚Eトレンチ第4層、伊達山遺跡、手稲遺跡、堂林遺跡、女満別住吉C堅穴などがある。

第14—2類は、いわゆる扁平片刃石斧で手斧である。第14—1類の両刃の石斧も、一面は曲面は弱く平坦であり、刃部の横断面も少し非対称形である。着柄の仕方を考えるとこれも、第14—2類と同様、手斧の可能性もある。しかし、両者は、刃の厚さ、大きさが異なり、用途が違っていたと思われる。

第14—3類は、1点しか出土していないが、狭長で、幅の狭い刃部をもち、横断面形が少し非対称形の両刃の石斧である。類例は、縄文前期では加茂川遺跡、名寄日進遺跡第2トレンチ、東旭川町日の出遺跡、岩内郡岩内町東山遺跡（大場・桐井 1968）第1地点第4—5層（円筒下層d式）、同遺跡第2地点第3層、サイベ沢遺跡第1地点第16層などで出土しており、中期では、サイベ沢遺跡第2地点第3—1層（サイベ沢第V類）など。後期から晩期にかけては、堂林遺跡、東三川遺跡などから出土している。

以上から、第14—3類の石斧は、縄文前期の加茂川式、神居式、円筒下層d式、縄文中期のサ

イベ沢第Ⅴ類など、それに縄文後期末から晩期初頭に出現することがわかる。

一方、同様の形態をもち、刃部に浅い抉ぐり込みを入れた資料は、本田栄作ら（本田・藤村・河野 1964）によると石狩川流域を中心に21カ所から出土しているという。伴出関係は明らかでないらしい。これ以外では、雨竜郡雨竜町内から7点出土している（岡部・南・本田 1967）。しかし、これも時期は不明である。加藤晋平（加藤 1963）は、浜益郡浜益村、空知郡音江村などの資料をもとに、北筒式土器群の内での古い時期の一群（トコロ第6類）に伴出するものと考えたいという。また、大塚和義（大塚 1966）は、金属性丸のみに類似を求め、続縄文時代以降、それも擦文時代の所産であるとしているが、根拠が全く示めされていない。

この丸のみ形石斧と称される抉ぐりの入った例と第14—3類の石斧とが同様な「のみ」としての用途であると仮定することが許されるならば、第14—3類の石斧は「平のみ形石斧」とでも称すべきであろうか。従って、丸のみ形石斧の出現時期も、この平のみ形石斧との関連において考えなければならないかもしれない。

本遺跡出土の石斧は、その未成品でみると、磨製石斧の製作にあたって、研磨に先だち、まず素材に粗い剝離を入れ、ほぼ全体形を整え、しかる後に、緑色片岩・細粒砂岩のような比較的軟弱な石質が素材の時には、さらに敲打器で、角がなくなるまで繰り返しの敲打を行なって最終的な整形をしたことがわかる。その上で研磨している。この技法は、第45図 194、196、201 例などに顕著にみられる。加茂川遺跡の報告（岩崎・宇田川・本田・河野 1966）では、「背部の一部を残して細かい啄敲により整形された大形の石斧形を呈するものが一例ある。この啄敲のテクニックは手持石杵に施された手法と一致する。」（p. 41）とある。同趣の技法があるのであろうか。

## 10. すり石

1点出土したすり石は、高橋正勝（高橋 1971a）の分類の第Ⅰ類に形態は近いが、使用面は、自然石の稜だけではなく、全面を利用している。また、立てても利用しており、類例は、管見の範囲ではない。擦痕の方向が長軸方向のみであることからみても、石皿とセットになる石杵とも考え難い。

## 11. くぼみ石

くぼみ石は、加茂川遺跡、朝日トコロ貝塚Eトレンチ第4層、伊達山遺跡、煉瓦台遺跡などで認められる。岩崎隆人ら（岩崎・宇田川・本田・河野 1968）によると春日町式、静内中野式、加茂川式土器との伴出が最も多いという。

即ち、現在の資料では、縄文時代前期初頭と中期後半にあるということになる。

## 12. 有孔石製品

本遺跡出土例の如く、二孔ある扁平なものは類例がないが、自然石の虫食いをそのまま利用したり、これを簡単に整形した一孔の資料は、サイベ沢遺跡第1地点第21—20層（サイベ沢第Ⅱ類）、名寄日進遺跡第1トレンチ、岩内町東山遺跡第2地点第3層（サイベ沢第Ⅴ、Ⅵ類、トコロ第6類）、宗谷郡猿払村浜猿払遺跡（松下・石川 1966）、上ノ国遺跡、チブスケ遺跡などにみられる。幅広い時期に亘ってあるようで、装飾品ないしはその未成品と思われる。

最後に、本遺跡の石器群の特徴は、石銛（先）、縦長剥片、定形化した搔器類を多く伴うことから、道東域の縄文時代中期～後・晩期の石器組成と近似するといえる。 （上野秀一）

## 結 語

以上、各項目に述べた如く、白石神社遺跡は、縄文時代中期より後期、晩期、続縄文時代、擦文時代の各期にわたって営まれた複合遺跡であることが解明された。惜しむらくは、本遺跡は、後年の神社建築、境内整備等の作業により良好な包含層を残しておらず、長期間にわたっての土器が雑然と発見された。故に本報告作製では、時代の同定、編年確立へのための積極的な作業を行わず、事実報告を基調とする態度で臨んだ。

遺構としては、縄文時代中期に属し、道央部では、平岸天神山遺跡出土土器の系譜を有する土器を出土する堅穴住居跡の発見がなされた。当該時期の住居跡は、全道的に見て道南地方で、これに平行期と考えられるサイベ沢Ⅶ式、見晴町式期の発掘報告例がある。道央部における発掘例はこれをもって初めとする。たとえその半ばを欠失するものであっても高く評価できよう。更に続縄文時代、或は、それ以降と思われる数基のピットが発見されている。これを続縄文時代に比定し得る確たる証はないが、類似ピットは、江別坊主山遺跡、紅葉山第33号遺跡等より発見されている続縄文時代に属する土壌墓に、やや類似点を見い出すことができる。白石神社遺跡発見のピット類が当該時期のものであれば、土壌墓であると考えられよう。

今回の発掘例では見られなかったが、北海道の縄文時代晩期、続縄文時代の墓より石鍬を多数副葬する例が多く見られることは、即ち当該時代の生業基盤のあり方を的確に示す事例といえよう。

更に明治・大正年間建築の神社土台についても、すでにこれが失なわれゆく前世紀の遺構であるとの考えに従い、記録にとどめた。

出土遺物は、特に縄文時代中期のサイベ沢Ⅶ式土器に近い土器が多数発見された。当該文化は、道央においては、平岸天神山遺跡出土遺物によって代表されていたが、その出土数の僅少さから、組成内容については不明とするところが多く、研究上の空白が多かった。今回の資料が、研究進展の一端を荷う資料となるであろう。更に、道南のサイベ沢Ⅶ式土器の新しいところと併行するであろう道東北部を代表するトコロ第6類土器が発見された。この事実は、ここ道央地方が、北海道の考古学研究上の重要な地域をしめるものであり、今後当地域の組織的な調査いかんによっては、大きな期待のかけられるところであろう。

出土石器は、縦長の剝片が多く出土し、素材として用いられている点が注目されよう。石器組成を総合的にとらえれば、道東北部を中心に広がりを見せるトコロ第6類土器文化の影響を強く受けるものである。トコロ第6類土器と円筒土器系にともなう石器組成には、大きな差異が見られる。両文化の生業形態の相違を端的に表わすものとして、今後より正確な基礎作業を通して、両文化の内容を明確に把える手段として一層の注目が必要となろう。

以上、良好な遺跡であるとは言えないが、札幌地方における従来の発掘調査例の貧弱さと相まって、遅れを見せていた研究への一助として何らかの役割を果たす資料となるであろう。

最後に、反省と自戒をこめて、札幌市の急速な発展にともない、破壊されゆく遺跡の数は今後

とも増大しよう。従来は、かかる事態における調査体制は、必ずしも満足のできる状態であったとはいえない。この調査を契機として、より前進的な解決方法が得られるよう常に研鑽を重ねて行く心算である。

(石附喜三男)

引用・参考文献

- 五十嵐 鉄 1934『大谷地貝塚之層位的研究』
- 石川 徹 1967「札幌郡手稲町砂丘出土の土器について」『北海道考古学』3所収
- 石川 徹 1971『ママチ遺跡』
- 石川 元助 1963『毒矢の文化』
- 岩崎 隆人・藤村 久和 1964「石狩厚田村聚富の遺跡と遺物」『釧路の古代文化』6所収
- 岩崎 隆人・宇田川 洋・本田 栄作・河野 本道 1966『加茂川遺跡』
- 岩崎 隆人・宇田川 洋・本田 栄作・河野 本道 1968「加茂川遺跡—補遺の部」  
“Aynu Moshiri”Ⅲ 所収
- 岩崎 隆人・三室 俊明・室田 彰則 1970『伊達山遺跡』
- 宇田川 洋・鶴丸 俊明・豊原 熙司 1971「合泊遺跡」『羅白』所収
- 大井 晴男 1965 「日本の石刃石器群“Blade Industry”について」『物質文化』5所収
- 大塚 和義 1966「石狩・花畔出土の石器」“Field”3
- 大塚 和義 1967「北海道余市出土のオロンガネ状土製品」“Field”5所収
- 大場 利夫・扇谷 昌康 1953『エリモ遺跡』
- 大場 利夫・石川 徹 1956『手稲遺跡』
- 大場 利夫・桐井 力蔵 1958『岩内遺跡』
- 大場 利夫・奥田 寛 1960『女満別遺跡』
- 大場 利夫・石川 徹 1961『浜益遺跡』
- 大場 利夫・松崎 岩穂・渡辺 兼庸 1961 『上ノ国遺跡』
- 大場 利夫ほか 1962『室蘭遺跡』
- 大場 利夫・扇谷 昌康・竹田 輝雄 1962「白老郡虎杖浜遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』  
17所収
- 大場 利夫・扇谷 昌康 1964「勇払郡鶴川遺跡」『北方文化研究報告』19所収
- 大場 利夫・蛭子 千代志 1965「函館市郊外煉瓦台遺跡」『北方文化研究報告』20所収
- 大沼 忠春 1971「中谷遺跡」『羅白』所収
- 岡部 伊治・南 恵・本田 栄作 1967「雨竜郡雨竜町の遺跡・遺物の紹介」『北海道の文化』11所収
- 加藤 晋平 1963「丸のみ形石斧について」『考古学雑誌』48—4所収
- 菊地 俊彦 1967「札幌市平岸天神山出土の土器について」『北海道考古学』3所収
- 桑原 護 1964「北筒式土器—その研究史と現状について」『考古学雑誌』51—4所収
- 桑原 護 1967「余市式土器—その研究史と現状、円筒上層土器との関連について」『考古学雑誌』54—1  
所収
- 河野 広道・沢 四郎・岡崎 由夫・山口 敏・小沼 宗心 1962『東釧路』
- 河野 広道・佐藤 忠雄 1963『日進』
- 河野 本道・宇田川 洋・岩崎 隆人 1970「先史時代」『江別市史』所収
- 児玉作左衛門・大場 利夫 1952「礼文島船泊砂丘遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』7所収
- 児玉作左衛門・大場 利夫・武内 収太 1958『サイベ沢遺跡』
- 小山内 照・杉本 良也・北川 芳男 1956『5万分の1地質図幅説明書—札幌—』北海道地下資源調査所
- 佐藤 忠雄 1960「北海道上川郡東旭川町日の出遺跡略報」『北海道考古学誌』1—1所収
- 斎藤 傑他 1968『嵐山遺跡』
- 札丸遺跡調査団 1971「木古内町札丸遺跡の発掘調査」『北海道開拓記念館だより』1—4所収
- 高橋 稀一・野村 崇 1972『妹背牛町メム川遺跡』
- 高橋 正勝 1966「函館市見晴町遺跡の資料」『北海道青年学科学研究会会誌』8所収

- 高橋 正勝 1971a 「北海道における擦石、石冠について」『北海道の文化』22所収
- 高橋 正勝 1971b 『北広島団地第Ⅰ遺跡』
- 高橋 正勝編 1971 『柏木川』
- 高橋 正勝 1972a 「北海道における縄文時代中期の終末(1)」『北海道青年人類科学研究会誌』No. 9所収
- 高橋 正勝 1972b 「北海道における縄文時代中期の終末(2)」『北海道青年人類科学研究会誌』No. 10所収
- 田 沢 巖・佐藤 忠雄・相川 正義 1959 『知床半島チブスケ遺跡発掘調査報告』
- 千 代 肇・大場 利夫 1966 「周辺地域の情勢、1. 北海道」『日本の考古学』Ⅲ所収
- 東大文学部 1963 『オホーツク海沿岸、知床半島の遺跡』上巻
- 名取 武光・峰 山 巖 1958 「入江貝塚」『北方文化研究報告』13所収
- 名取 武光・峰 山 巖 1962 「アヨロ遺跡」『北方文化研究報告』17所収
- 名取 武光・峰 山 巖 1963 「茶吞場遺跡」『北方文化研究報告』18所収
- 野 村 崇 1962 「長沼町の先史時代」『長沼町の歴史』下 所収
- 野 村 崇 1964 「栗山町鳩山遺跡の発掘調査報告」『栗山町の文化財』所収
- 野 村 崇・宇田川 洋 1967 『長沼町幌内堂林遺跡調査報告』
- 野 村 崇 1969 「由仁町東三川遺跡」『由仁町の先史遺跡』所収
- 藤本 英夫 1960 「日高における縄文時代末期の墳墓」『北海道考古学誌』1—1 所収
- 藤本 英夫編 1963 “GOTENYAMA-Plates”
- 藤本 英夫 1964 「北海道三石町ホロケ台地墳墓群遺跡」『考古学雑誌』49—4 所収
- 本田 栄作・藤村 久和・河野 本道 1964 「丸のみ様石器新資料」『北海道の文化』6 所収
- 松 下 亘・石川 辰也 1966 「宗谷郡浜猿払遺跡」『北海道考古学』2 所収
- 森田 知忠 1967 「北海道の続縄文文化」『古代文化』19—2 所収
- 八 幡 一 郎 1935 「奥羽地方発見の筥状石器」『人類学雑誌』50—5 所収
- 山 崎 博 信 1966 『智東B地点図録篇』
- 山 崎 博 信・長谷川 功 1968 『智東B地点本文篇』
- 吉 崎 昌 一 1965 「縄文文化の発展と地域性Ⅰ、北海道」『日本の考古学』Ⅱ所収
- 渡 辺 誠 1973 『縄文時代の漁業』

第1表 遺構出土石器一覧表

図番	版号	出土地区	名称	全長	最大幅	最大厚	重量	石質	備考
				mm	mm	mm	g		
9-1	1号ピット		石 鏃	22.0	17.0	5.0	1.5	ob.	無茎
2	"		縦 長 剣 片	(27)	14.5	2.3	1.1	ob.	上部欠損
3	2号ピット		ナイフ状石器	45.0	28.0	6.2	6.6	ch.	
4	"		縦 長 剣 片	(22)	17.0	3.4	1.1	ob.	下部欠損
5	"		"	(20)	19.0	4.8	2.1	ob.	"
6	5号ピット		横 長 剣 片	35.0	43.0	9.9	9.3	ob.	
16-1	1号堅穴		す り 石	81.5	82.0	24.0	290.0	ho.	褐色土層出土
2	"		搔 器	32.0	16.5	6.8	3.8	ob.	"
3	"		石 錐	38.5	30.0	9.5	9.8	ob.	床面出土
4	"		縦 長 剣 片	31.5	13.5	3.3	1.4	ob.	"
5	1号遺構		石 斧	(79)	39.5	19.0	104.0	gre.	覆土出土

第2表 石器一覧表(1)

図番	版号	出 土 区	層位	名称	全長	最大幅	最大厚	重量	石質	備考
					mm	mm	mm	g		
37-1	II J 5	?	?	石 鏃	(46)	15.0	3.8	2.2	ob.	1-1-a類 柄部欠損
2	III C 3	S	S	"	40.0	12.5	3.4	1.6	ob.	"
3	III B 10	B	B	"	(31)	14.0	5.8	(2)	ob.	1-1-b類 柄部欠損
4	IV E 7	B	B	"	31.5	13.0	5.5	1.2	ob.	"
5	III F 8	B	B	"	27.0	13.0	3.7	1.1	ob.	"
6	III B 7	B	B	"	23.5	13.0	2.1	0.5	ob.	1-2-b類
7	III B 7	B	B	"	25.0	10.0	2.6	0.5	ob.	1-1-b類
8	III C 6	B	B	"	25.0	10.0	3.9	0.7	ob.	"
9	III G 6	S	S	"	21.0	10.0	3.2	0.6	ob.	1-3-b類
10	III I 1	S	S	"	(21)	11.0	2.3	(0.5)	ob.	1-1-b類 柄部欠損
11	II A 10	S	S	"	20.0	10.0	2.2	0.4	ob.	"
12	VI 5	B	B	"	(20)	12.0	4.4	(0.7)	ob.	1-2-b類 柄部欠損
13	IV F 1	S	S	"	(20)	(18)	4.4	(0.8)	ob.	1-2-a類 柄部、逆刺欠損
14	III D 8	S	S	"	(22)	19.0	2.8	(0.8)	ob.	" 柄部欠損
15	III G 7	B	B	"	24.0	15.5	3.8	1.0	ob.	1-2-b類
16	III F 8	B	B	"	16.5	13.0	3.8	0.6	ob.	"
17	???	?	?	"	17.0	11.0	4.6	0.6	ob.	"
18	III E 5	S	S	"	18.0	11.5	2.4	0.5	ob.	"
19	III B 7	B	B	"	21.0	9.0	2.8	0.4	ob.	1-3-b類
20	III B 7	B	B	"	(21)	15.0	3.1	(0.8)	ob.	鋸齒刃
21	III C 9	B	B	"	(16)	13.0	2.6	(0.5)	ob.	1-1-b類 先端欠損
22	II I 10	S	S	"	(20)	13.5	4.5	(0.9)	ob.	" 柄部欠損 焼けている
23	IV E 1	B	B	"	21.0	15.0	6.1	1.6	ob.	1-2-b類
24	IV D 2	B	B	"	22.0	14.0	4.1	1.0	ob.	
25	III J 10	B	B	"	24.0	19.0	7.1	3.5	ob.	
26	III B 10	S	S	"	27.0	13.0	7.7	1.9	ob.	1-3-a類
27	III I 7	B	B	"	(26)	11.0	2.1	(0.5)	ob.	下部欠損
28	II A 7	S	S	"	(22)	(11)	2.9	(0.5)	ob.	1-2-a類 先端、逆刺欠損
29	III I 2	B	B	"	(22)	(13)	3.4	(0.9)	ob.	" "

第3表 石器一覽表(2)

図番	版号	出地	土区	層位	名称	全長	最大幅	最大厚	重量	石質	備考
	30	IVC10	S		石 鏃	(28)	(12)	3.9	(1.5)	ob.	
	31	III B 7	B		"	(27)	16.0	4.8	(1.7)	ob.	1-3-a類 先端欠損
	32	VE 4	Y		"	31.0	14.0	3.9	1.7	ob.	" 焼けている
	33	IV F 1	S		"	29.0	15.0	5.2	1.9	ob.	
	34	III B 7	B		"	19.5	7.5	2.4	0.3	ob.	
	35	II C ?	?		"	(16)	9.5	2.2	(0.3)	ob.	1-3-b類 先端欠損
	36	III C 9	B		"	20.0	10.0	2.0	0.4	ob.	
	37	III C 9	B		"	(16)	7.5	1.8	(0.3)	ob.	下部欠損
	38	II B 9	B		"	36.0	16.0	7.7	3.8	ob.	
	39	III H 10	B		石 銛 先	46.0	27.0	5.6	5.0	ob.	
	40	III H 10	B		"	44.0	26.5	9.6	7.2	ob.	
	41	III H 1	S		"	(33)	21.0	6.8	(4.1)	ob.	先端欠損
	42	III D 8	S		"	45.0	20.5	6.3	5.3	ob.	焼けている
	43	III C 7	S		石 槍 先	47.5	17.0	8.8	6.3	ob.	
	44	III A 1	B		尖頭器破片	(24)	(17)	(10)	(4.1)	ob.	柄部破片
	45	III ? 5	B		"	(20)	(13)	(5)	(1.1)	ob.	" 焼けている
	46	III C 8	B		石 槍 先	(44)	(25)	9.0	(9.1)	ob.	" "
	47	III B 6	B		尖頭器破片	(17)	(17)	(4)	(0.6)	ob.	先頭部破片
	48	III F 8	B		"	(26)	(20)	(6)	(1.8)	ob.	"
	49	VF 5	S		"	(17)	(12)	(4)	(0.7)	ob.	柄部破片
	50	???	?		"	(22)	(11)	(4)	(1.1)	ob.	"
	51	III F 9	S		石 槍 先	83.0	34.0	12.3	29.3	ob.	
37—	52	III F 9	B		ナイフ状石器	96.0	36.0	7.6	21.0	ob.	5-1類
	53	II B 9	B		"	73.0	33.0	9.9	17.6	ob.	5-2-c類
	54	III B 5	B		"	77.5	21.5	6.3	9.8	sh.	5-2-a類
	55	III F 8	B		"	64.5	17.0	7.6	6.0	ob.	"
	56	III G 6	B		"	21.0	43.0	3.4	3.0	ob.	5-2-b類
	57	III E 3	S		"	(25)	(16)	8.9	(2.3)	ob.	5-2-c類?、柄部破片
	58	III C 6	S		"	(25)	(13)	4.6	(1.1)	ob.	5-2-a類 先端部破片
	59	III D 7	B		"	31.0	25.0	9.3	7.9	ob.	5-3類
	60	II J 6	S		"	31.5	25.5	8.6	6.8	ob.	"
	61	III I 7	B		"	39.0	30.0	9.2	10.0	ch.	"
	62	III D 10	S		"	(24)	(26)	(7)	(3.2)	ob.	5-1類 柄部破片
	63	III D 8	B		"	(34)	(24)	8.1	(8.8)	sh.	胴部破片
	64	III B 1	B		削 器	39.0	24.0	8.8	5.9	ob.	9-3類
	65	IV F 6	S		"	49.0	24.0	7.3	8.5	ob.	"
	66	III H 10	S		搔 器	45.0	30.0	1.0	8.9	ob.	8-2類
	67	IV E 7	B		削 器	37.0	16.5	5.8	3.9	ob.	9-1-b類
	68	III D 8	S		"	20.5	32.0	7.4	4.3	ob.	9-2類
	69	III C 4	B		搔 器	35.0	23.0	6.0	(4.2)	ob.	8-1類 側面欠損
	70	III H 3	B		削 器	34.0	42.0	11.5	21.2	sh.	9-2類
	71	III D 8	B		"	52.0	76.0	13.2	53.9	ob.	"
	72	IV F 2	B		"	29.0	28.0	2.8	2.8	ob.	"
	73	IV F 10	?		石 鏃?	31.5	23.5	10.1	5.3	ob.	"
	74	III D 8	B		削 器	32.5	33.5	5.0	5.1	ob.	未成品
39—	75	III B 3	B		石 錐	59.0	15.0	8.6	9.8	sh.	9-2類

第4表 石器一覽表(3)

図番	版号	出地	土区	層位	名称	全長	最大幅	最大厚	重量	石質	備考
						mm	mm	mm	g		
	76	IVF 2	S		石 錐	43.0	32.5	11.4	11.0	ob.	6-1類
	77	III E 5	S		"	41.0	26.5	11.2	9.0	ob.	6-2類
	78	II I 10	S		"	34.0	26.0	13.1	12.4	ob.	"
	79	III C 3	S		"	40.0	28.0	11.1	11.6	ob.	"
	80	III H 1	B		彫 刻 刀?	42.0	19.0	11.8	9.6	ob.	"
	81	IV C 10	S		"	(33)	(32)	8.8	(9)	ob.	
	82	IV E 10	?		"	51.5	17.0	9.5	7.8	ob.	下部欠損
	83	III F 10	S		搔 器	57.5	25.5	8.8	15.1	ob.	8-2類
	84	IV F 1	S		"	27.0	16.0	3.8	2.1	ob.	8-1類
	85	III H 2	S		"	40.0	35.0	13.5	13.0	ob.	"
	86	III I 5	S		"	51.0	30.0	9.0	13.0	ob.	"
	87	III C 7	B		"	45.0	36.0	12.8	19.3	ob.	"
	88	III D 6	B		"	48.5	36.5	4.8	10.6	ob.	"
	89	III E 6	S		"	27.0	37.0	8.6	7.7	ob.	" 一部焼けている
	90	III G 7	B		"	24.5	27.0	7.8	6.2	ob.	"
	91	III A 3	B		"	(20)	32.0	5.6	(4.6)	ob.	" 刃部破片
	92	VD 1	S		"	24.0	26.0	5.7	2.6	ob.	"
	93	III I 8	B		削 器	35.0	26.0	9.6	7.3	ob.	9-2類
	94	III E 3	S		"	(33)	24.5	11.9	(8.7)	ob.	"
	95	III H 9	B		搔 器	57.0	30.0	11.2	17.3	ob.	8-2類
	96	IV H 2	B		削 器	60.0	26.0	14.5	20.1	ob.	9-1-b類
	97	III I 1	S		"	(17)	8.0	3.4	(0.5)	ob.	9-3類 下部欠損
40-	98	III B 4	S		扁 平 石 核	43.0	38.0	18.0	30.9	ob.	11-1類
	99	III G 6	S		"	24.0	50.0	12.4	16.2	ob.	"
	100	IV G 1	B		"	24.0	33.0	14.1	9.6	ob.	"
	101	IV E 9	Y		"	20.0	33.0	12.5	6.7	ob.	"
	102	III B 7	S		"	25.5	30.0	10.4	8.5	ob.	"
	103	II A 7	S		"	18.0	27.0	14.3	4.7	ob.	"
	104	III D 10	S		"	23.0	30.0	13.0	7.8	ob.	"
	105	VE 2	S		"	35.0	42.0	20.2	24.9	ob.	11-2類
	106	III A 7	B		"	49.0	47.0	18.2	33.7	ob.	" 擦痕あり
	107	II I 9	S		"	34.0	36.0	15.3	14.9	ob.	"
	108	III B 4	B		"	17.0	38.5	16.8	12.5	ob.	11-3類
	109	III J 3	S		クレストッド フ レ ー ク	43.0	27.0	14.4	14.3	ob.	
	110	III F 6	B		"	37.0	17.0	11.1	4.3	ob.	
	111	III B 9	?		縦 長 剣 片	64.0	36.5	15.8	27.9	sh.	大形、幅広
	112	III A 3	B		"	51.0	28.0	10.4	16.0	ob.	" 擦痕あり
	113	IV G 3	B		"	37.0	51.0	2.9	1.5	ob.	中形
	114	III ? ?	?		搔 器	42.0	17.0	6.8	4.8	ob.	8-2類
	115	III J 9	B		縦 長 剣 片	(41)	15.0	3.5	(1.8)	ob.	中形上 部欠損
	116	III A 1	B		"	59.5	23.0	3.4	5.5	b.o	"
	117	IV G 1	B		"	39.5	17.0	2.8	2.3	ob.	
	118	III B 7	B		"	27.5	11.5	3.9	1.3	ob.	小形 焼けている
	119	III I 2	S		"	(22)	9.0	2.5	(0.6)	ob.	"
	120	III B 2	?		"	(18)	9.0	2.3	(0.4)	ob.	"
41-	121	III A 1	B		削 器	39.0	28.5	4.8	5.7	ob.	9-2類

第5表 石器一覽表(4)

図 番	版 号	出 地	土 区	層 位	名 称	全長	最大幅	最大厚	重量	石質	備 考
						mm	mm	mm	g		
122	IVD 4	S	削器	38.0	22.0	5.6	3.2	ob.	9-2類		
123	III B 7	B	"	36.5	24.5	8.2	6.8	ob.	"		
124	III A 3	B	"	80.0	33.0	12.4	20.8	ob.	9-1-b類		
125	IV G 1	B	"	52.0	27.5	7.7	11.6	ob.	"		
126	III J 9	S	"	38.0	18.0	7.1	5.5	ob.	"		
127	III E 9	B	"	34.0	16.0	6.7	4.0	ob.	"		
128	III E 6	B	"	(42)	22.0	5.9	(6.7)	ob.	9-1-c類		
129	III D 6	S	"	(36)	26.0	7.8	(8.6)	ob.	" 焼けている		
130	III C 8	B	"	(35)	21.0	9.8	(8.9)	ob.	" "		
131	IV D 2	B	"	34.0	17.0	7.3	6.9	sh.	"		
132	III J 1	S	"	(37)	12.5	3.8	(2)	ob.	9-1-b類		
133	IV E 8	S	"	(19)	17.0	3.3	(1.2)	ob.	"		
134	IV C 8	S	"	(20)	14.0	4.5	(1.4)	ob.	"		
135	III A 3	B	"	(20)	14.0	5.4	(1.6)	ob.	"		
136	III J 10	S	"	(19)	18.0	2.4	(1.2)	ob.	9-1-a類		
137	IV G 1	B	"	30.0	18.0	4.7	2.5	ob.	"		
138	III I 8	B	"	50.0	27.0	3.7	5.6	ob.	"		
139	II J 6	B	"	52.0	26.0	6.9	8.0	ob.	9-1-b類		
140	III J 10	B	"	41.0	18.0	7.7	5.4	ob.	9-1-d類		
141	III E 7	B	"	45.0	15.0	8.9	5.2	ob.	"		
142	III D 8	B	"	29.0	20.0	7.1	5.1	ob.	9-1-c類		
143	III E 9	S	"	32.5	(23)	8.6	(7.6)	ob.	9-2類		
144	III G 8	B	"	(22)	31.5	8.6	(5.5)	ob.	9-1-b類		
145	II I 5	B	縦長剝片器	43.0	23.5	6.0	5.7	ob.	中形 擦痕ある		
146	II B 9	B	削器	(28)	18.0	6.4	(2.9)	ob.	9-1-b類		
147	IV G 5	B	"	(28)	19.0	3.4	(2.3)	ob.	"		
148	III F 6	B	"	54.5	19.0	7.9	5.1	ob.	9-1-d類		
149	III B 7	B	クレステック ド・フレー	21.0	11.0	6.3	1.1	ob.			
150	III A 2	B	削器	(25)	(14)	(5)	(2.3)	ob.	9-1-c類 欠損している		
151	III G 9	B	縦長剝片	30.5	14.0	4.4	1.9	ob.	中形		
152	III A 3	B	削器	27.0	13.5	5.6	1.8	ga.	9-1-d類		
42-153	III C 8	B	一括剝片	21.0	33.0	5.0	2.9	ob.	横長剝片		
154	"	B	"						153と155の接合図		
155	"	B	"	25.5	23.0	5.5	2.8	ob.	幅広の剝片		
156	"	B	"	32.0	47.0	6.0	9.7	ob.	横長剝片		
157	"	B	"	36.0	24.0	4.5	4.0	ob.	縦長剝片		
158	"	B	"	26.5	37.0	7.0	6.5	ob.	横長剝片		
159	"	B	"	23.0	25.0	4.5	2.5	ob.	幅広の剝片		
160	"	B	"	20.0	26.0	6.5	1.9	ob.	"		
161	"	B	"	22.0	21.5	5.0	1.9	ob.	"		
162	"	B	"	16.0	14.5	5.0	0.9	ob.	"		
163	"	B	"	13.0	13.0	3.5	4.0	ob.	"		
164	"	B	"	23.0	26.0	5.0	2.0	ob.	"		
165	"	B	"	18.0	23.5	4.0	1.4	ob.	"		
166	"	B	"	15.5	26.0	5.0	1.2	ob.	"		
167	"	B	"	21.0	16.0	9.0	2.7	ob.	"		

第6表 石器一覽表(5)

図 番	版 号	出 地	土 区	層 位	名 称	全長	最大幅	最大厚	重量	石質	備 考
						mm	mm	mm	g		
168	III C 8	B			一括剝片	29.5	23.5	8.0	3.9	ob.	幅広の剝片
169	"	B			"	28.0	44.0	6.0	6.3	ob.	横長剝片
170	"	B			"	20.0	26.0	4.5	1.5	ob.	幅広の剝片
171	"	B			"	25.0	17.0	6.5	2.2	ob.	縦長剝片
172	"	B			"	36.0	21.0	8.0	5.3	ob.	"
173	"	B			"	30.0	20.0	8.5	4.0	ob.	"
174	"	B			"	27.0	20.0	4.0	1.4	ob.	"
175	"	B			"	31.0	12.0	3.5	1.8	ob.	"
176	"	B			"	31.0	19.0	3.0	1.2	ob.	"
177	"	B			"	17.0	21.0	4.0	1.3	ob.	幅広の剝片
178	"	B			"	21.0	12.0	2.0	0.6	ob.	"
179	"	B			"	14.0	11.5	3.5	0.6	ob.	"
180	"	B			"	10.0	20.0	2.5	0.6	ob.	横長剝片
181	"	B			"	20.0	16.0	3.0	1.0	ob.	縦長剝片
182	"	B			"	36.0	26.0	9.0	7.1	ob.	石核の残核?
183	"	B			"	18.0	17.0	7.5	1.4	ob.	"
184	"	B			"	23.0	21.5	6.0	2.9	ob.	幅広の剝片
185	"	B			"	18.0	26.0	9.0	2.1	ob.	石核の残核?
43-186	IV G 1	B			石 斧	133.0	48.0	20.5	210.0	gre.	14-1類
187	III C 1	S			"	87.0	48.5	19.0	150.0	gra.	"
188	III G 9	B			"	79.0	39.0	9.5	57.0	ph.	14-2類
189	III A 3	B			"	70.0	28.5	9.0	39.6	ph.	"
190	III J 9	S			"	(93)	(49)	18.5	(125)	gre.	未成品 下部欠損
191	III H 10	S			"	(58)	41.0	9.5	(39)	gra.	14-2類 柄部破片
192	III F 7	B			"	(36)	30.7	8.5	(19)	gre.	" 刃部破片
193	IV C 7	S			"	108.0	18.0	9.5	31.6	ph.	14-3類
44-194	III D 8	B			"	(81)	(35)	(19)	(102)	sa.	未成品 下部欠損
195	IV D 2	B			"	(48)	36.0	18.0	(46)	di.	14-1類 胴部破片
196	II C 10	S			"	111.5	48.5	31.5	250.0	gre.	未成品
197	III D 10	B			"	(39)	36.0	8.5	(16)	gre.	14-2類 柄部破片
198	III B 2	S			"	(38)	46.0	14.0	(29)	gre.	14-1類 刃部破片
199	III I 9	B			礫 器?	45.0	32.0	6.3	18.6	sh.	
200	III I 9	B			石 斧	(112)	44.0	27.5	(225)	sc.	未成品
201	III H 10	B			"	(75)	(53)	(34)	(160)	gre.	"
45-202	III A 3	B			すり石	130.0	69.0	62.0	710.0	tu.	
203	III C 9	B			凹石	(10)	43.0	33.0	(200)	ho.	
204	III F 7	B			"	125.0	59.0	38.0	435.0	ho.	
205	IV E 10	?			礫 器	160.0	68.0	30.0	400.0	ho.	
206	III H 10	B			砥石	55.5	(63)	43.0	(210)	sa.	
207	IV F 2	B			"	(71)	(65)	25.0	(120)	sa.	
46-208	III G 8	B			有孔石製品	35.5	35.0	11.0	12.7	sh.	
47-209	III J 10	B			骨 器	119.0	35.0	31.0	34.1	—	素材は鹿の左大腿骨

(略号) [層位] S:攪乱層、 B:黒色土層、暗褐色土層、暗茶褐色土層、 Y:暗黄褐色土層

[石質] ob. (obsidian): 黒耀石、 sh. (hard shell): 硬質頁岩、

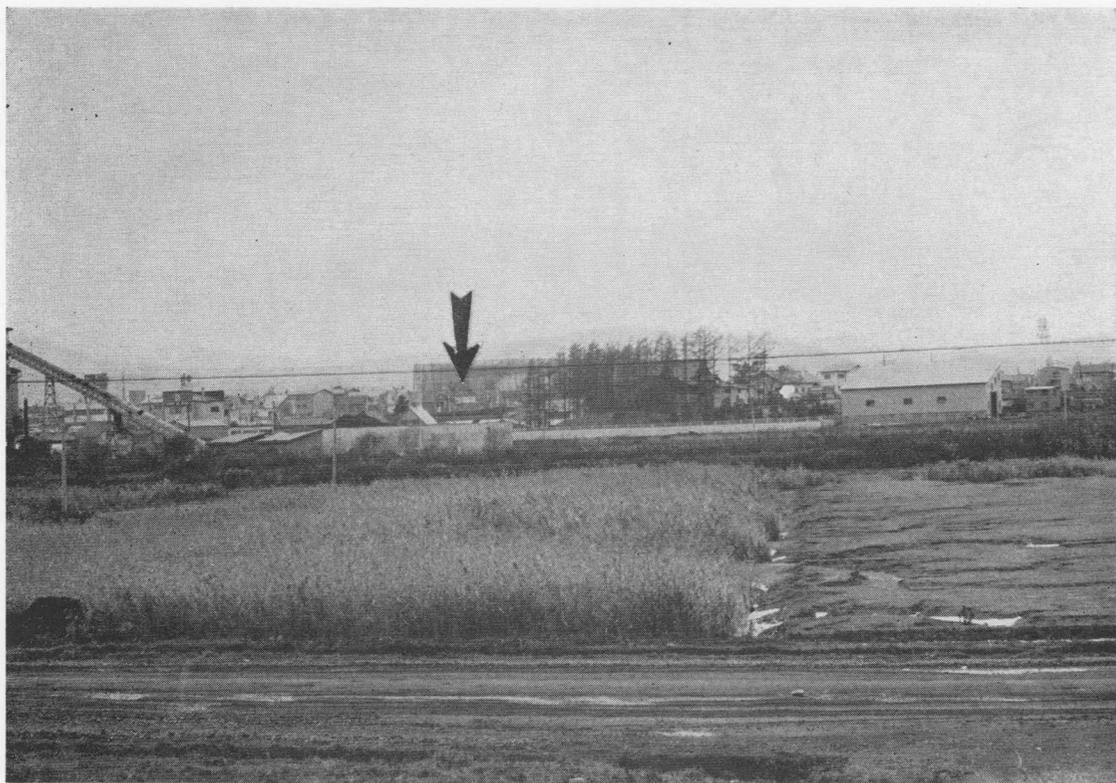
ch. (chert=quartzite): 珪岩、 ga. (gasper): ジャスパー(玉髄質)、  
tu. (tuff): 凝灰岩、 ho. (horenblende andesite): 角閃石安山岩、  
di. (diabase): 輝緑岩、 sc. (schistose amphibolite): 片状角閃岩、  
gra. (graucophane schist): 藍閃石片岩、 gre. (green schist): 緑色片岩、  
ph. (phyllite): 千枚岩、 sa. (sand stone): 砂岩

〔計測値〕 ( ) で、くくった計測値は欠損していること示す。

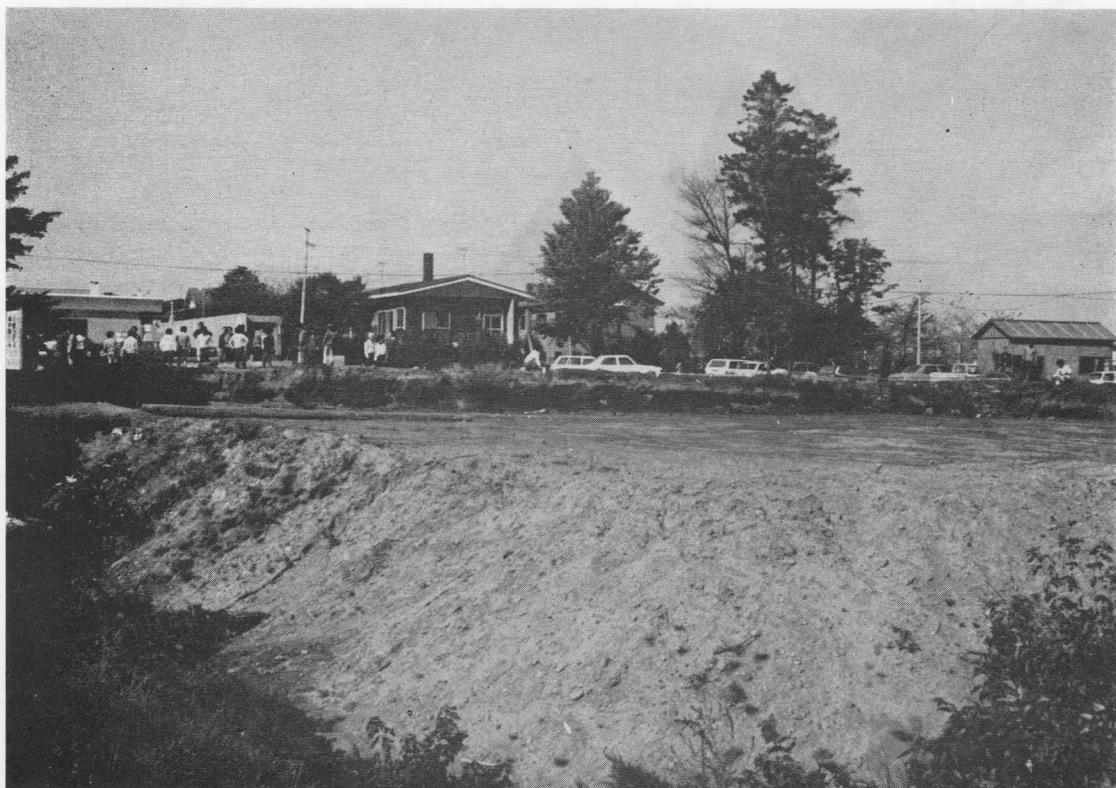
札幌市関係考古学文献目録

(羽賀憲二編)

- 渡瀬荘三郎 「札幌市近傍ピット其他古跡の事」『東京人類学会報告』1—1 1886(明19)年
- 高畑 宣一 「石狩川沿岸穴居人種遺跡」『東人誌』10—103 1891(明24)年
- 伊藤 正三 「先住民民族篇」『札幌区史』 1911(明44)年
- 新岡 武彦・久保田誠二 「札幌市外月寒遺物散布地」『究古』1—3 1929(昭4)年
- 河野 広道 「発寒村発掘記」『蝦夷往来』10 1933(昭8)年
- 高倉新一郎 「発寒村発掘の遺物について」『蝦夷往来』10 1933(昭8)年
- 後藤 寿一 「札幌市及び其附近の遺跡・遺物の二、三に就て」『考古学雑誌』27—9 1937(昭12)年
- 北大調査団 「北大遺跡について」『北方文化研究報告』10 1955(昭30)年
- 河野 広道 「先史時代篇」『琴似町史』 1956(昭31)年
- 大場 利夫・石川 徹 『手稲遺跡』 1956(昭31)年
- 大場 利夫 「北海道札幌市北大遺跡」『日本考古学年報』5 1957(昭32)年
- 大場 利夫 「北海道札幌郡手稲遺跡」『日本考古学年報』7 1957(昭32)年
- 愛下 淳 「手稲遺跡調査報告」『郷土の今昔』8 1958(昭33)年
- 森田 知忠 「石狩附近の遺跡とその分布」『郷土の今昔』8 1958(昭33)年
- 君 尹彦 「札幌市出土のブレード」『北海道学芸大学考古学研究会連絡誌』5 1958(昭33)年
- 札幌西高郷土研究部 「札幌市郊外白石で発見された旧石器のブレード」『郷土の科学』21 1958(昭33)年
- 札幌光星高社会科研究部 「札幌白石出土のブレードについて」『黒耀石』11 1959(昭34)年
- 鈴木 孫平・面 統 「先史時代篇」『豊平町史』 1959(昭34)年
- 岩田 嘉武 「真駒内火山灰丘陵よりの遺物について」『ウタリ』3—5—47 1960(昭35)年
- 札幌西高郷土研究部 「厚別・野幌間表採の資料報告」『黒耀石』17 1960(昭35)年
- 宇田川 洋 「札幌市石山に於ける表面採集・地質構造及び地史」『ウタリ』5—2 1963(昭38)年
- 岩崎・宇田川・河野・西野 「札幌市附近の遺跡—収録篇・分布図篇」『郷土の科学』41.42 1963(昭38)年
- 札幌南高郷土研究部 「平岸及びその附近の二・三の遺跡について」 1964(昭39)年
- 岩崎 隆人・三室 俊昭 「札幌市附近の遺跡—資料篇I—、札幌市発寒小学校裏遺跡」『北海道の文化』10 1966(昭41)年
- 大塚 和義 「石狩・花畔出土の石器“Field” 3 1966(昭41)年
- 畑 宏明 「札幌市附近の遺跡—資料篇—II、札幌市平岸坊主山遺跡“Aynu Moshiri” II 1966(昭41)年
- 石川 徹 「札幌郡手稲町砂山出土の土器について」『北海道考古学』3 1967(昭42)年
- 菊地 俊彦 「札幌市平岸天神山出土の土器について」『北海道考古学』3 1967(昭42)年
- 石附喜三男 「札幌市北栄遺跡の調査」『古代文化』19—2 1967(昭42)年
- 岩崎・宇田川・加藤・河野 「札幌市附近の遺跡—考察篇I—札幌扇状地における遺跡の先史地理学的考察“Aynu Moshiri” III 1968(昭43)年



A 遺跡遠景（東より）



B 遺跡遠景（南より）



A 遺跡発掘前の状態 (北東より)



B 湧 水



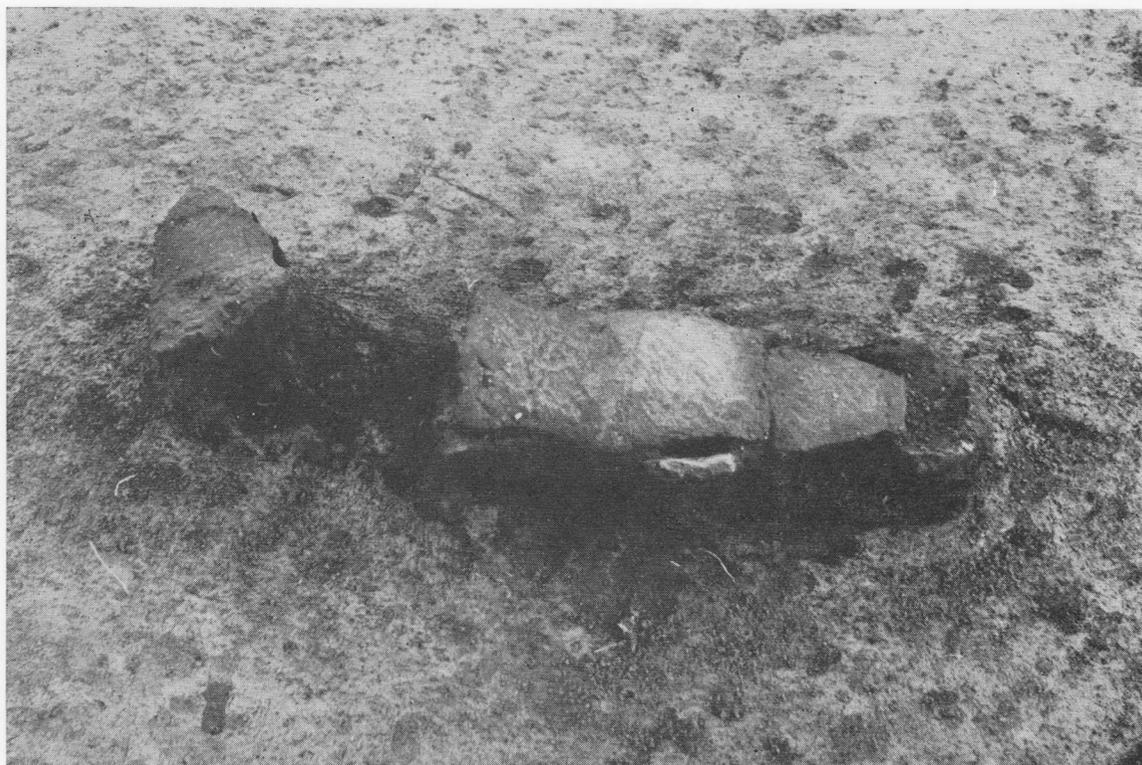
A 第1号竖穴住居跡（北西より）



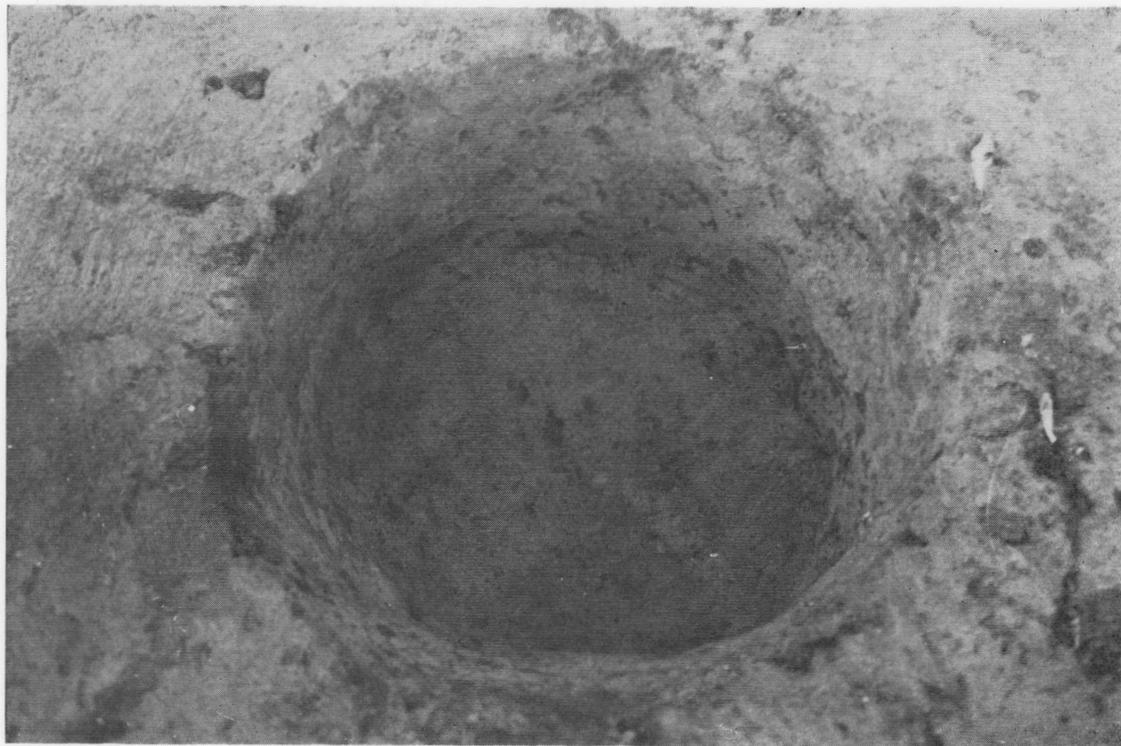
B 第1号竖穴住居跡セクション



A 第1号竖穴住居跡状遺構（北西より）



B 第1号竖穴住居跡状遺構土器出土状態



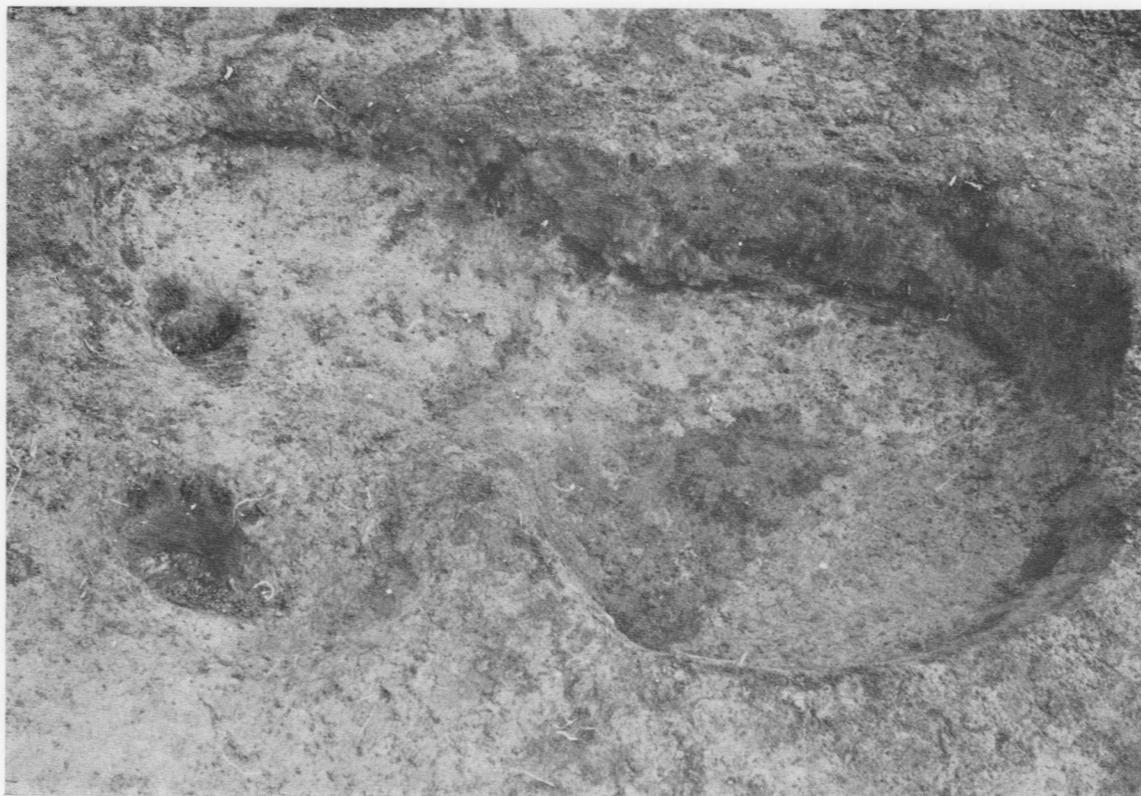
A 第1号ピット (南東より)



B 第2号ピット (南東より)



A 第3号ピット (西より)



B 第4号ピット (南より)



A 神社跡（北東より）



B 発掘風景



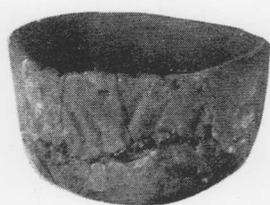
A 瓮掘区遗物出土状态 (1)



B 瓮掘区遗物出土状态 (2)



1



2

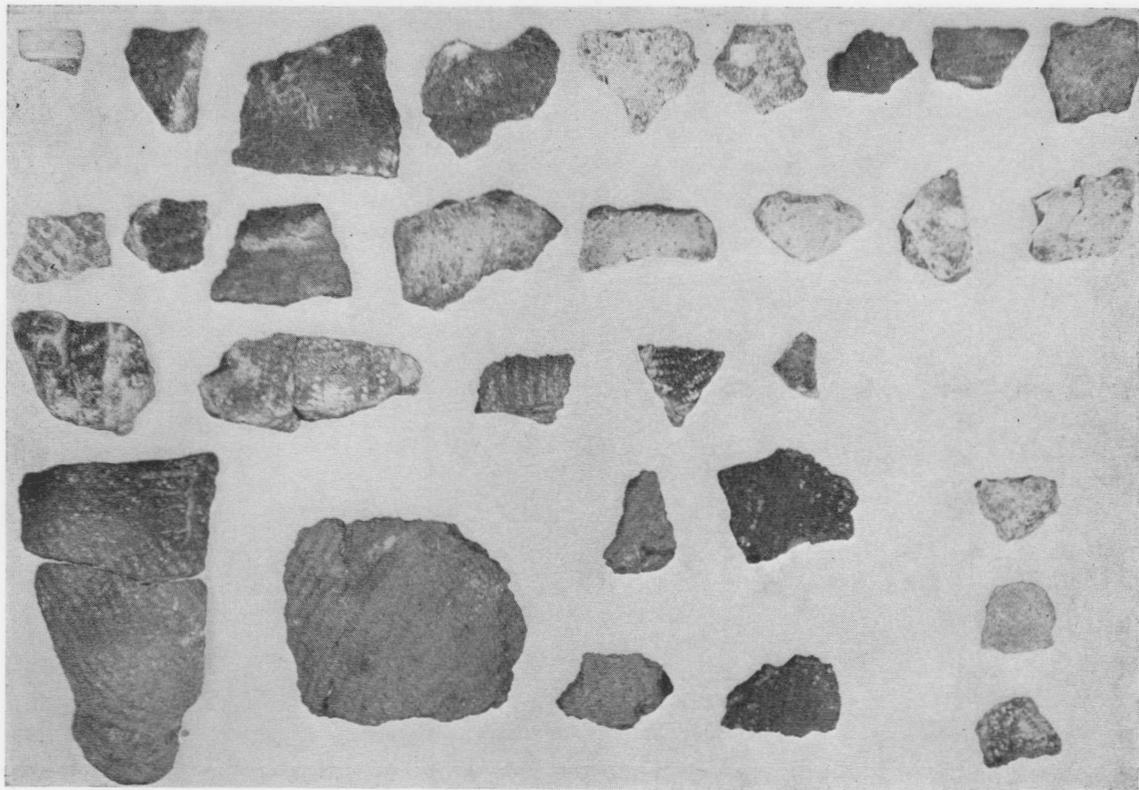


3

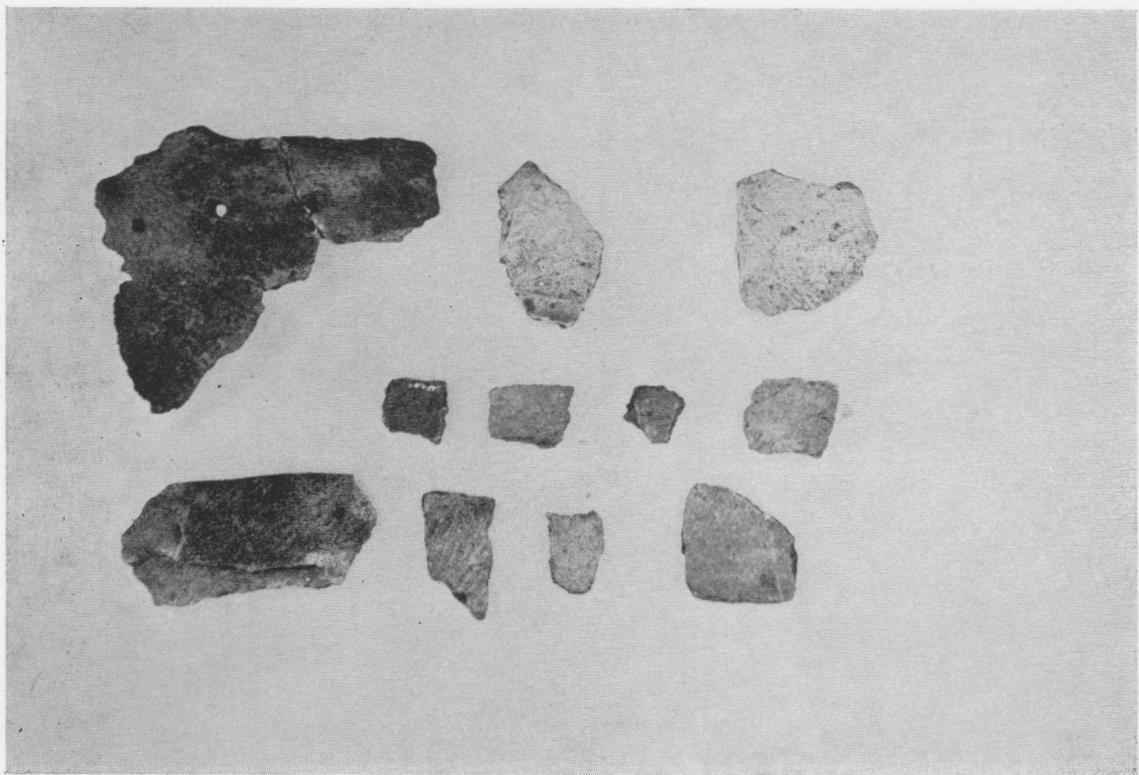


4

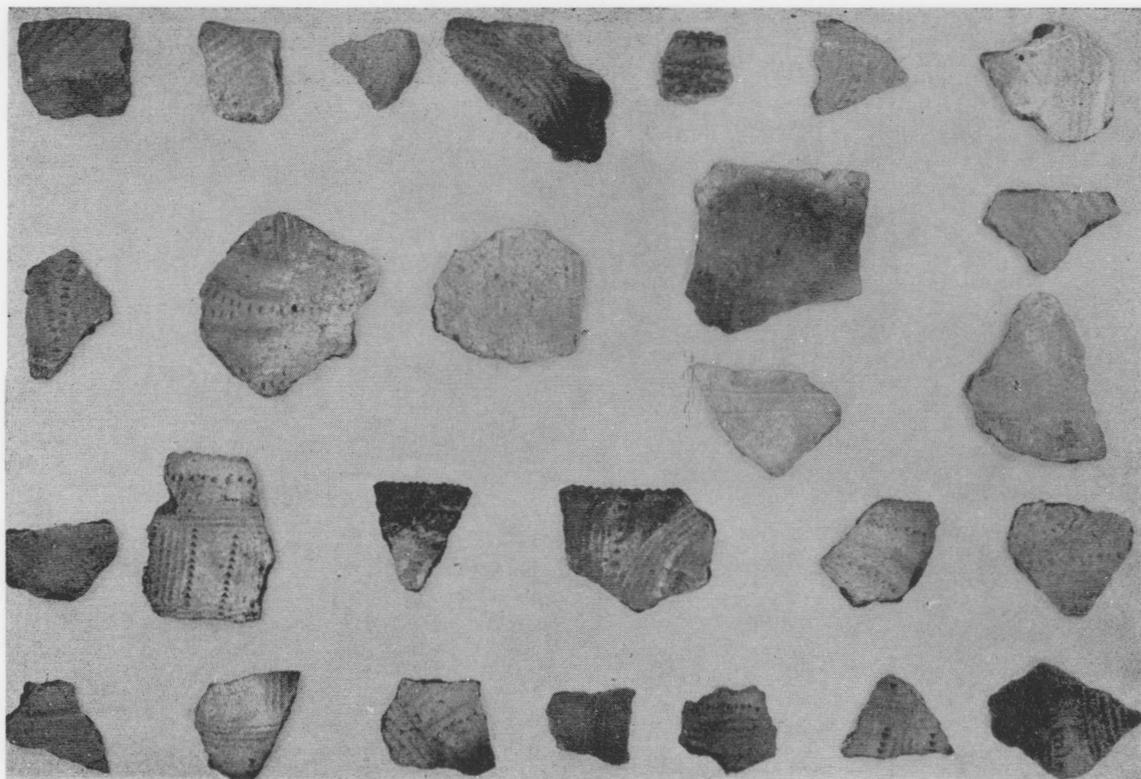
完形土器



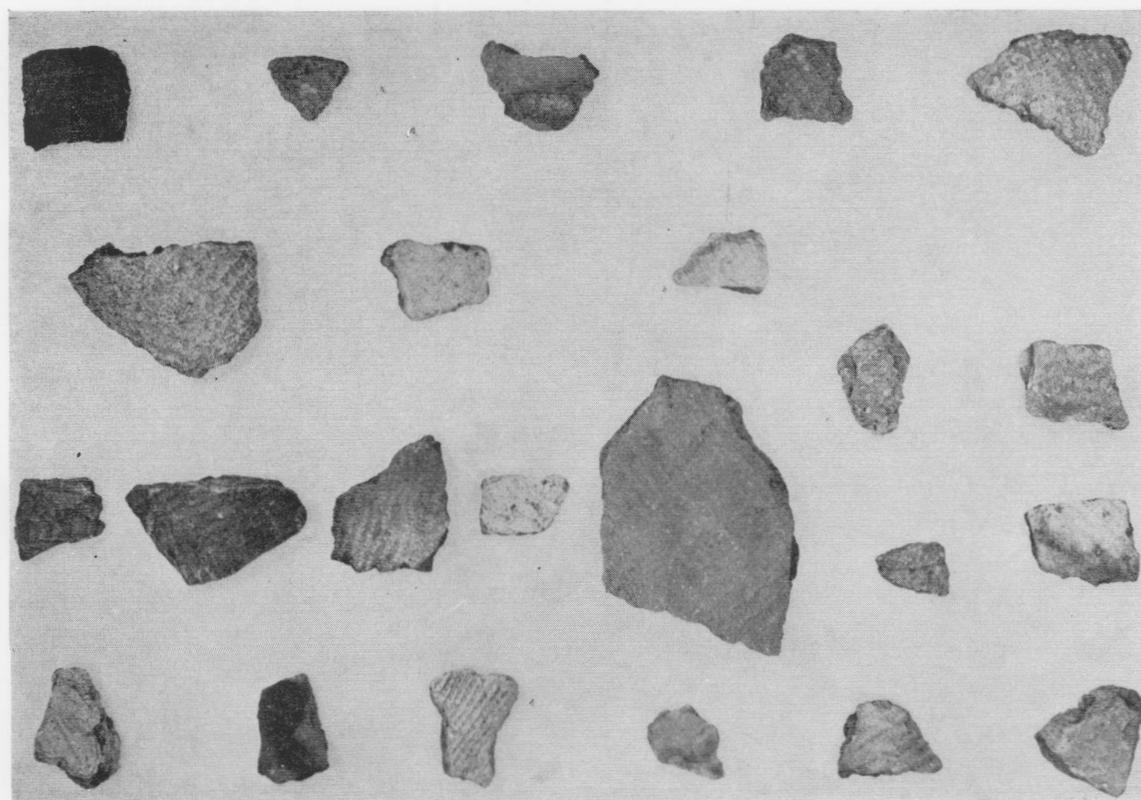
A 第1号竖穴住居跡出土土器



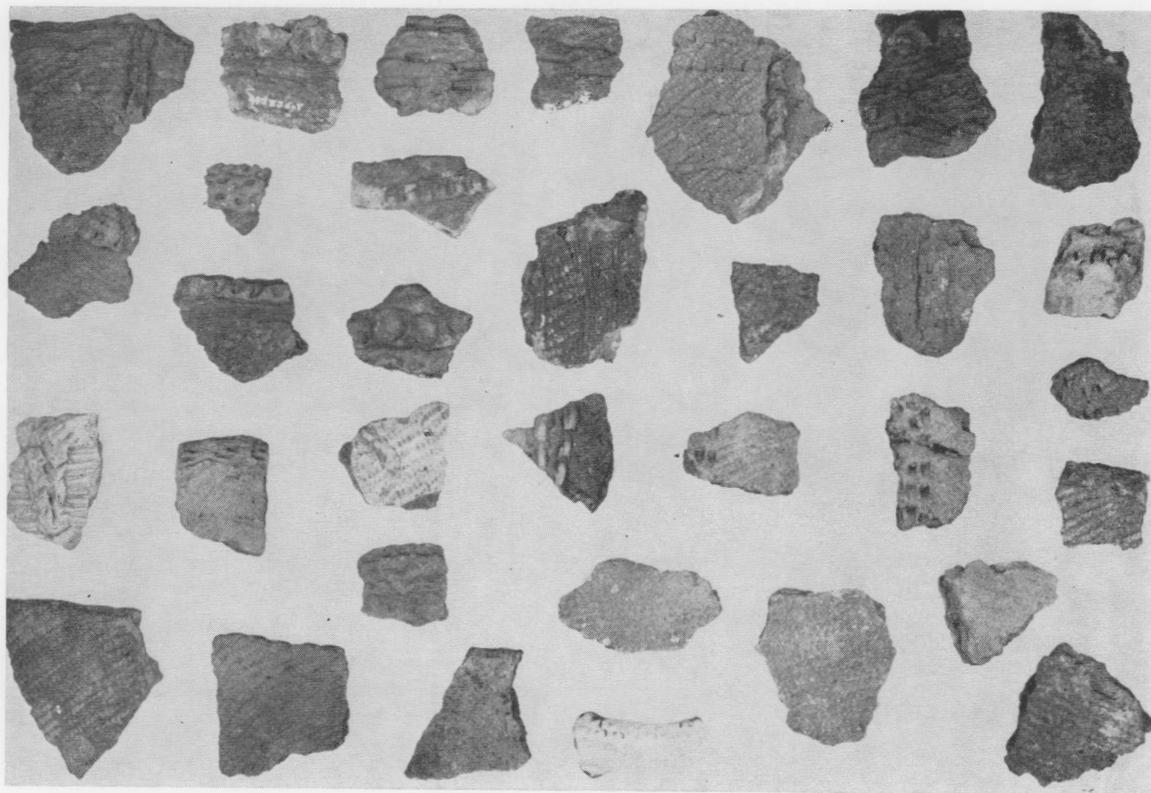
B 第1号竖穴住居跡状遺構出土土器



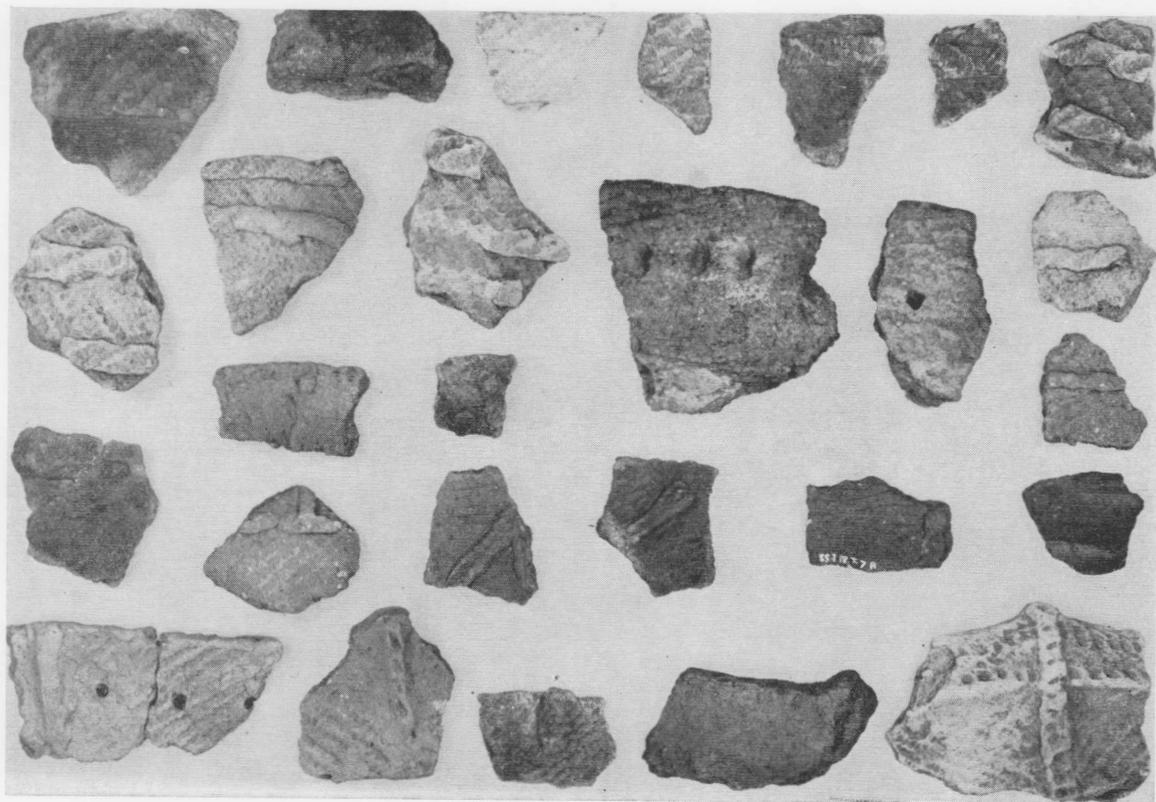
A 第1号、第2号ピット出土土器



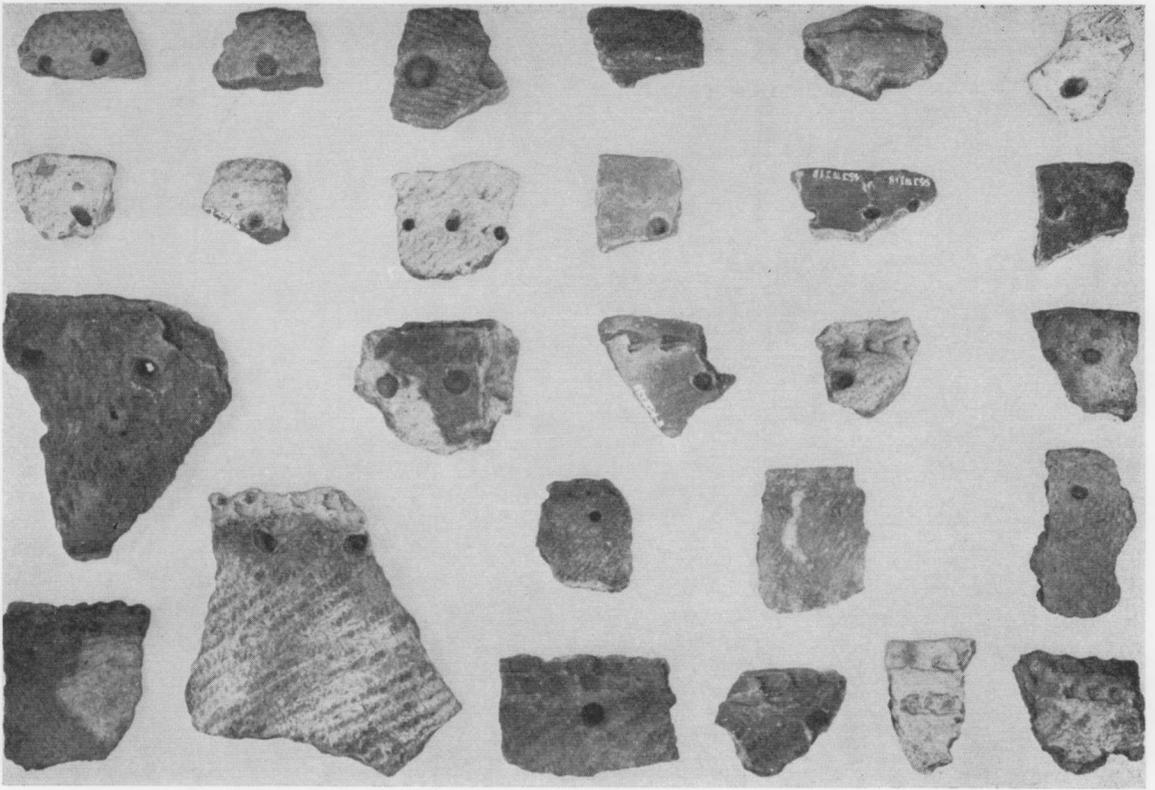
B 第4号、第5号ピット出土土器



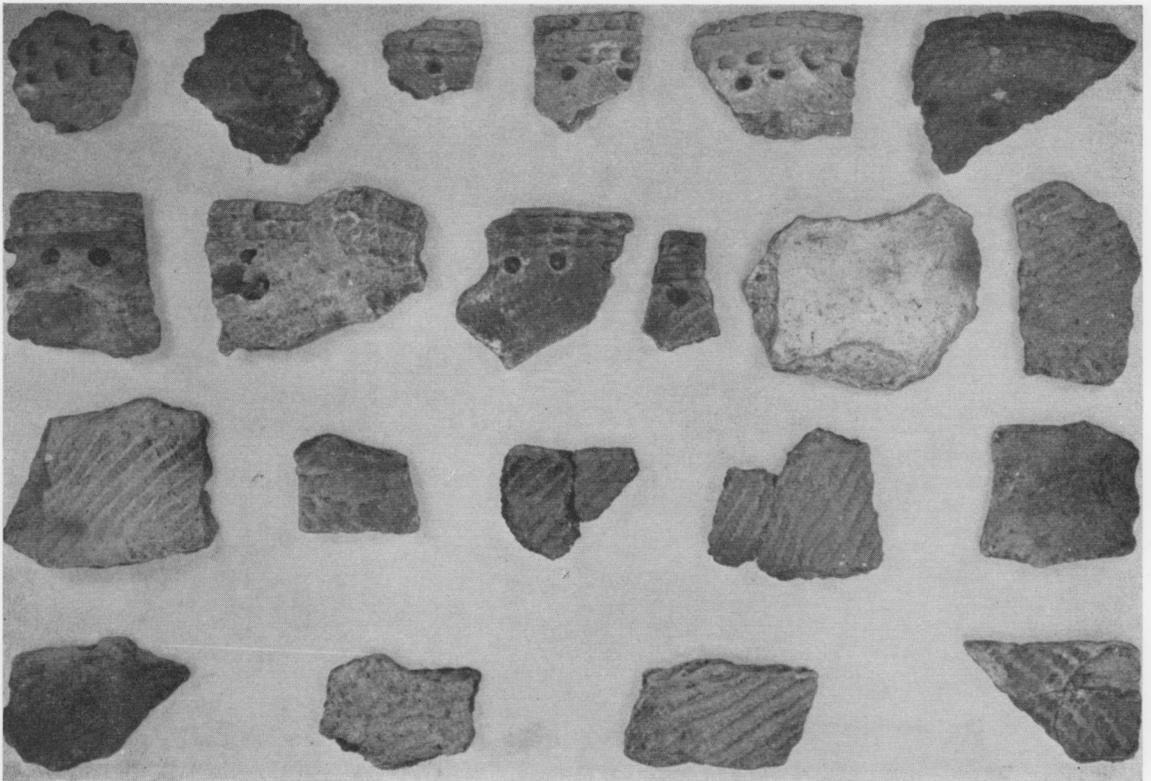
A 土 器 (1)



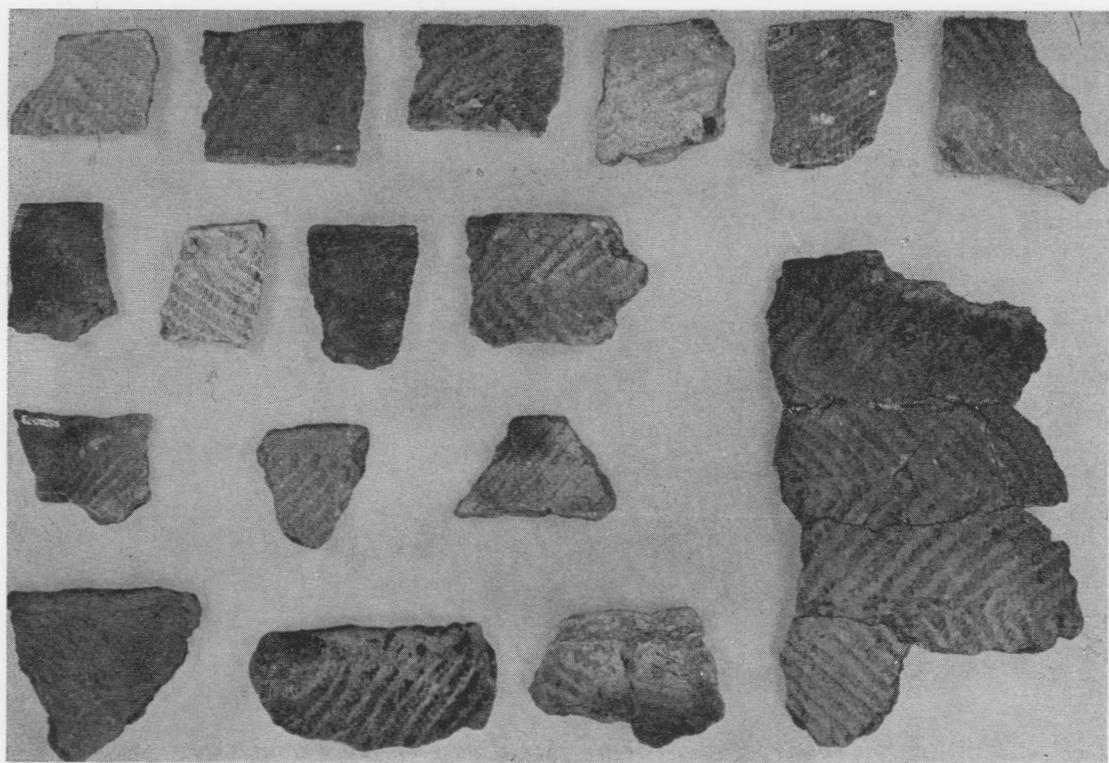
B 土 器 (2)



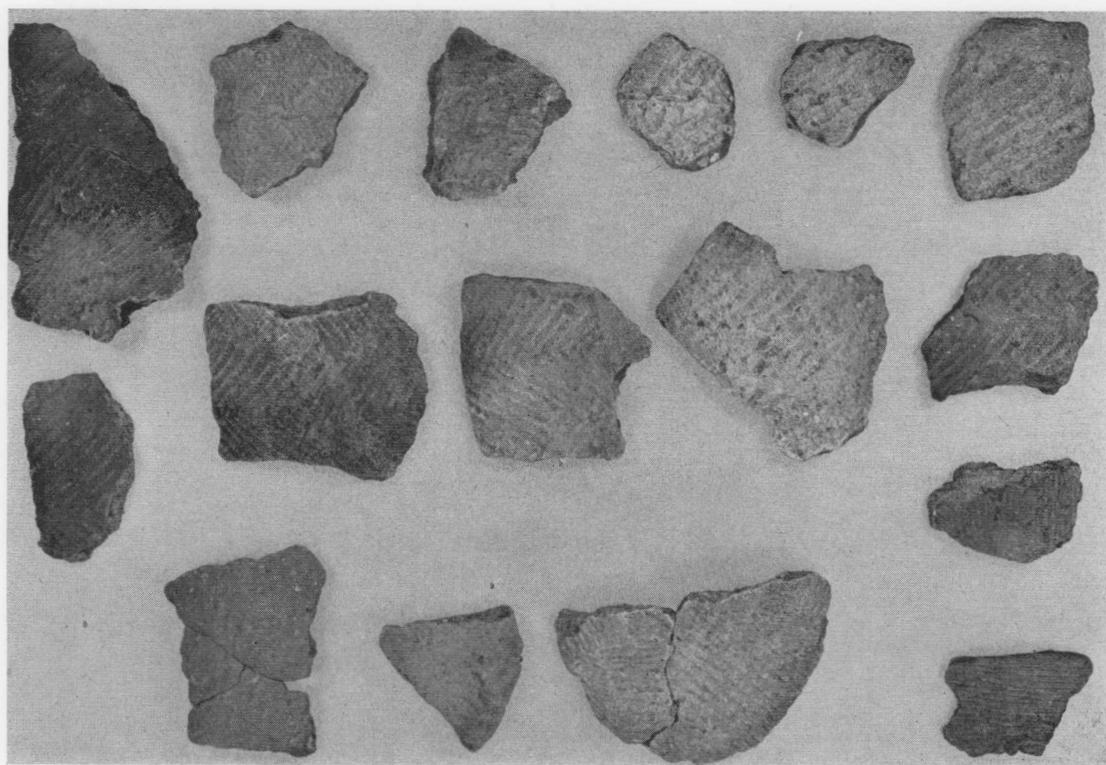
A 土 器 (3)



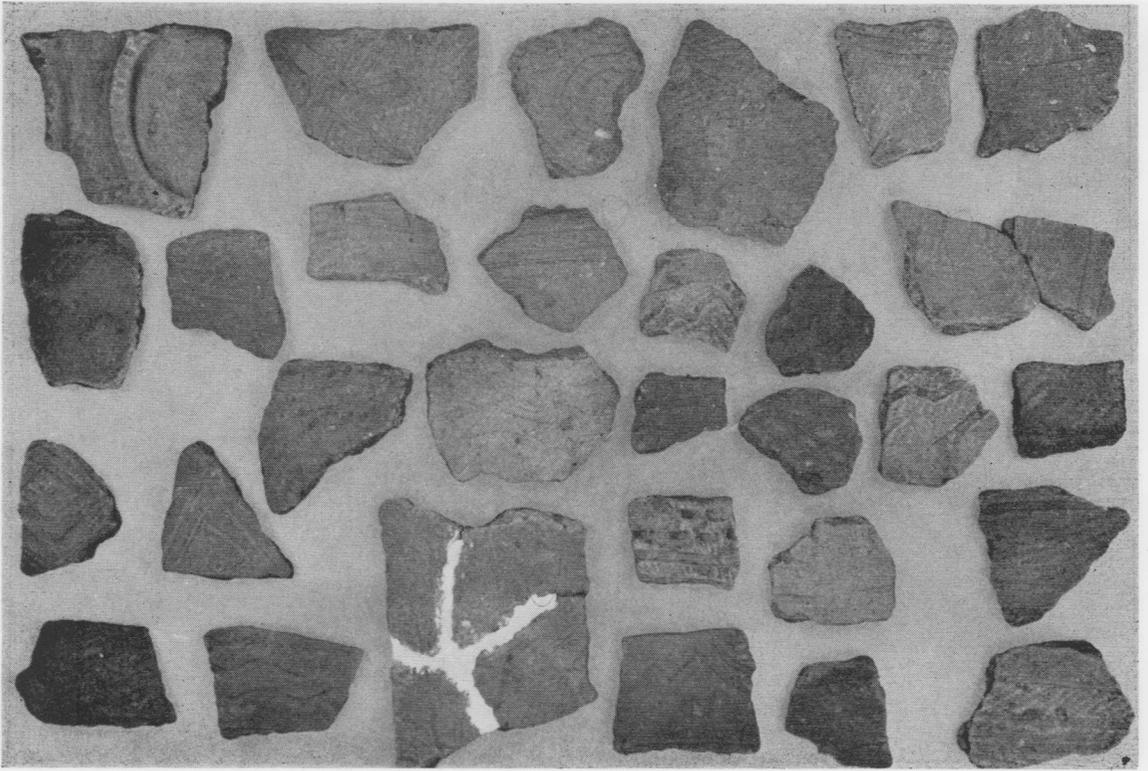
B 土 器 (4)



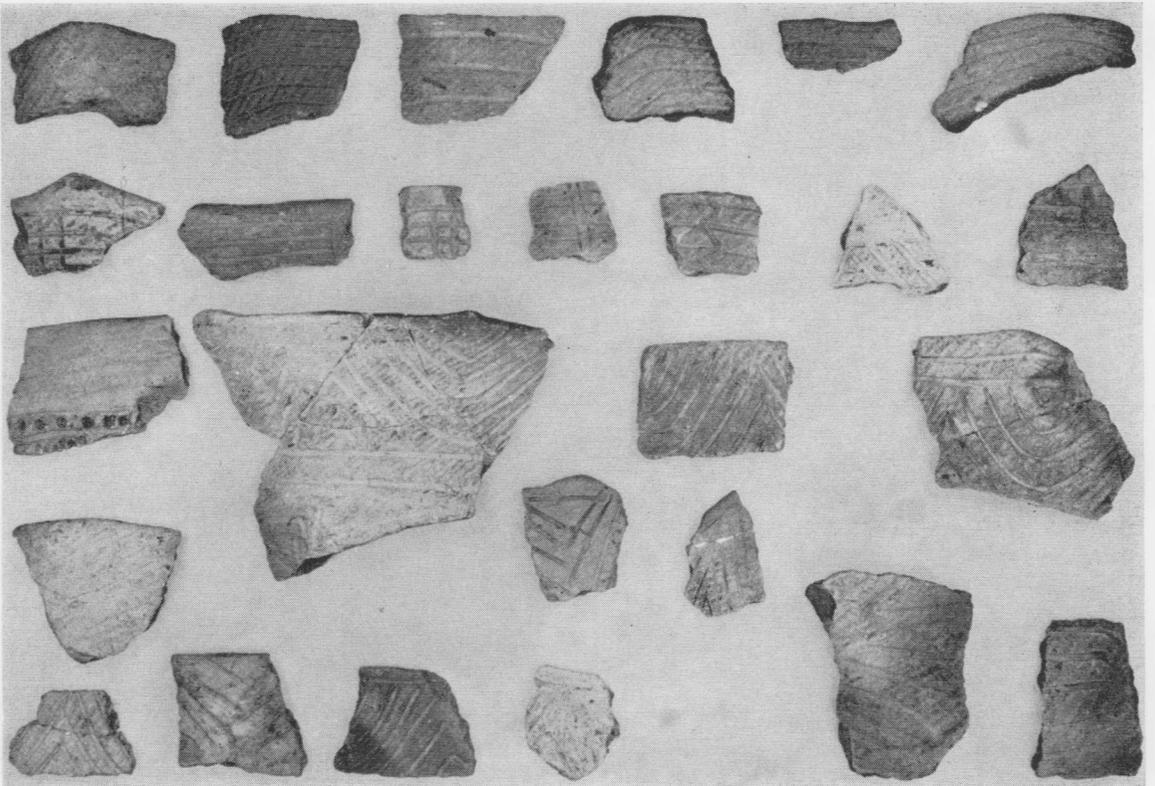
A 土 器 (5)



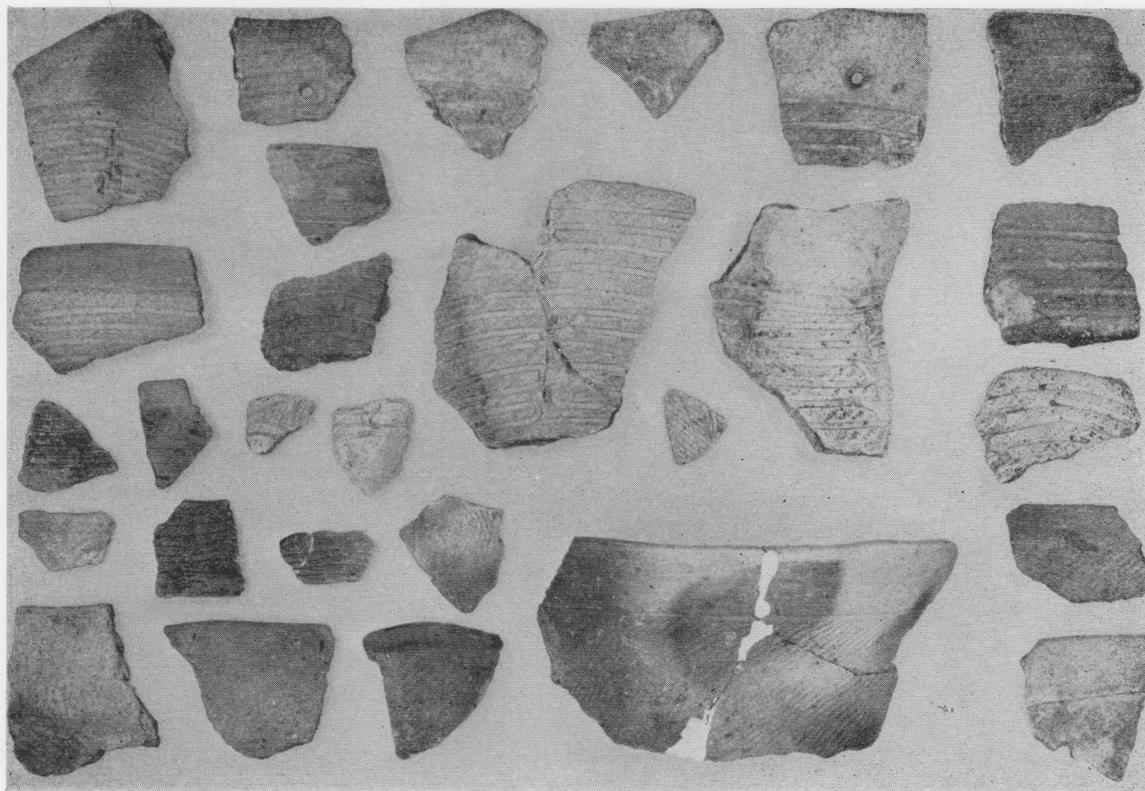
B 土 器 (6)



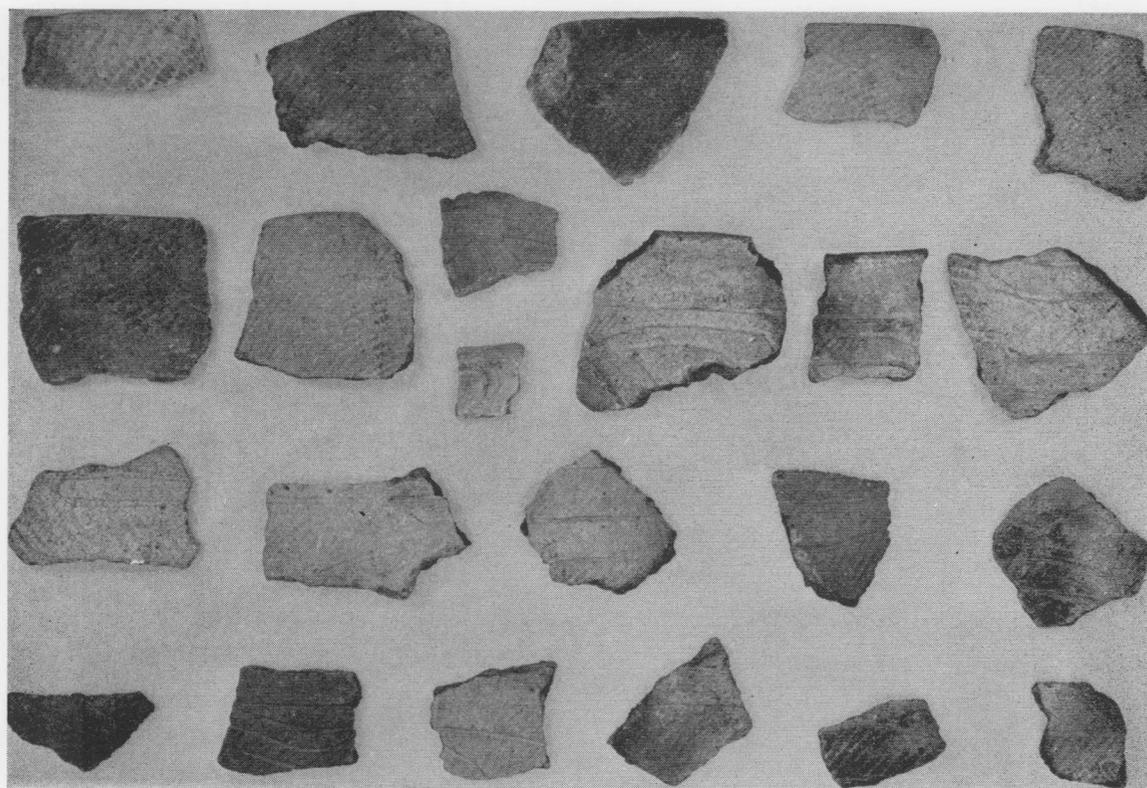
A 土 器 (7)



B 土 器 (8)



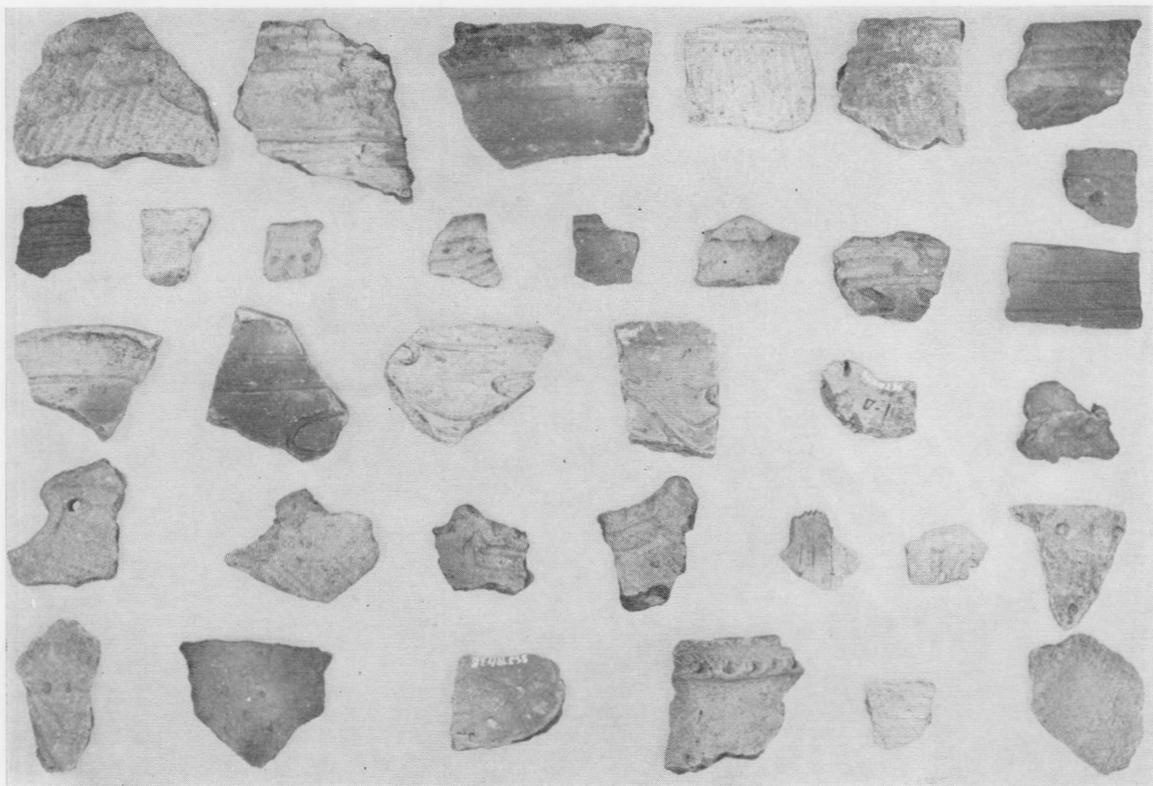
A 土 器 (9)



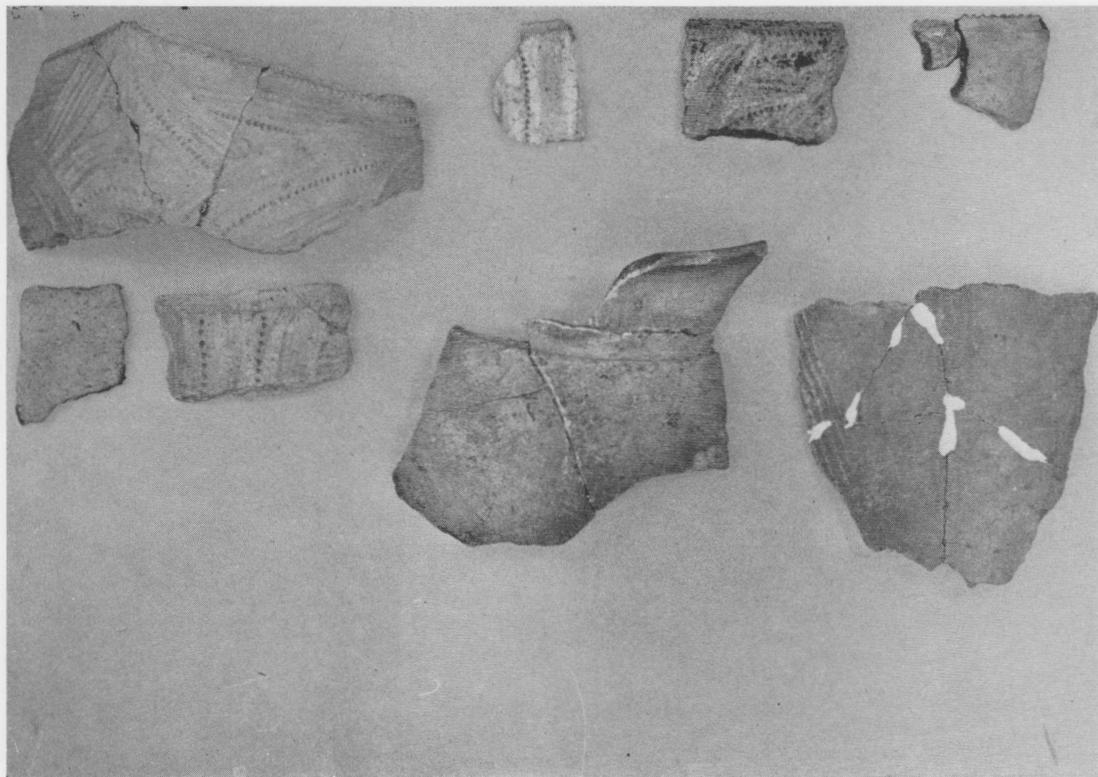
B 土 器 (10)



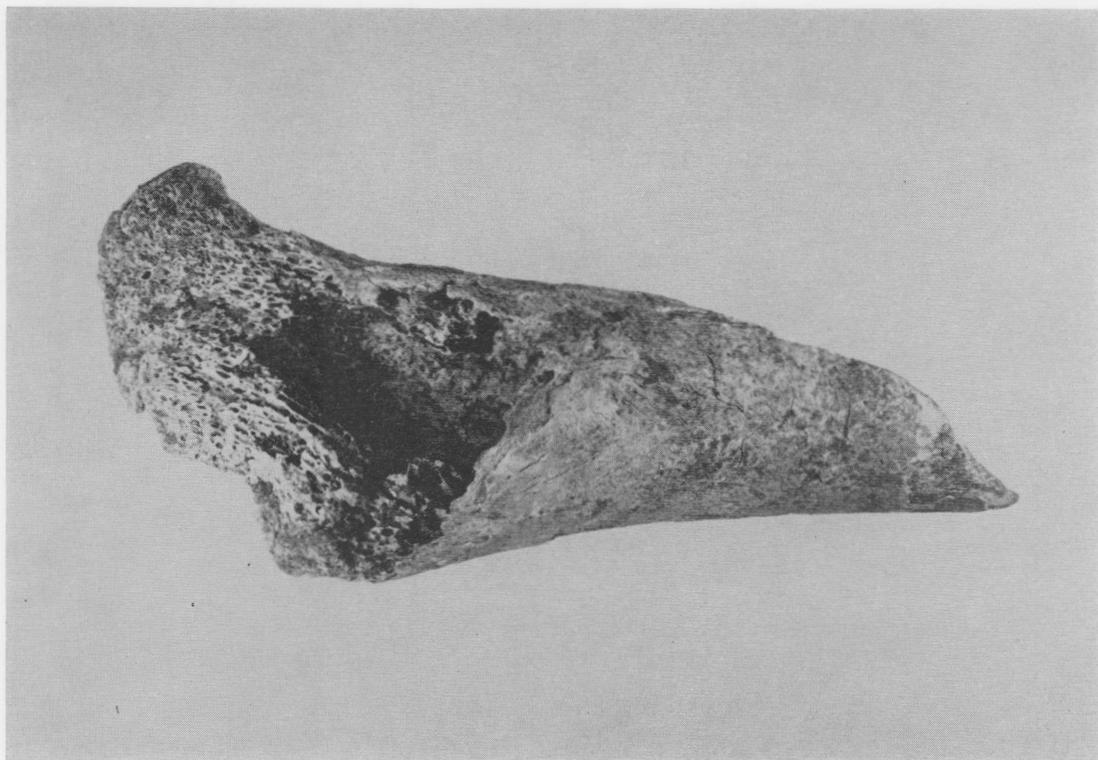
A 土 器 (1)



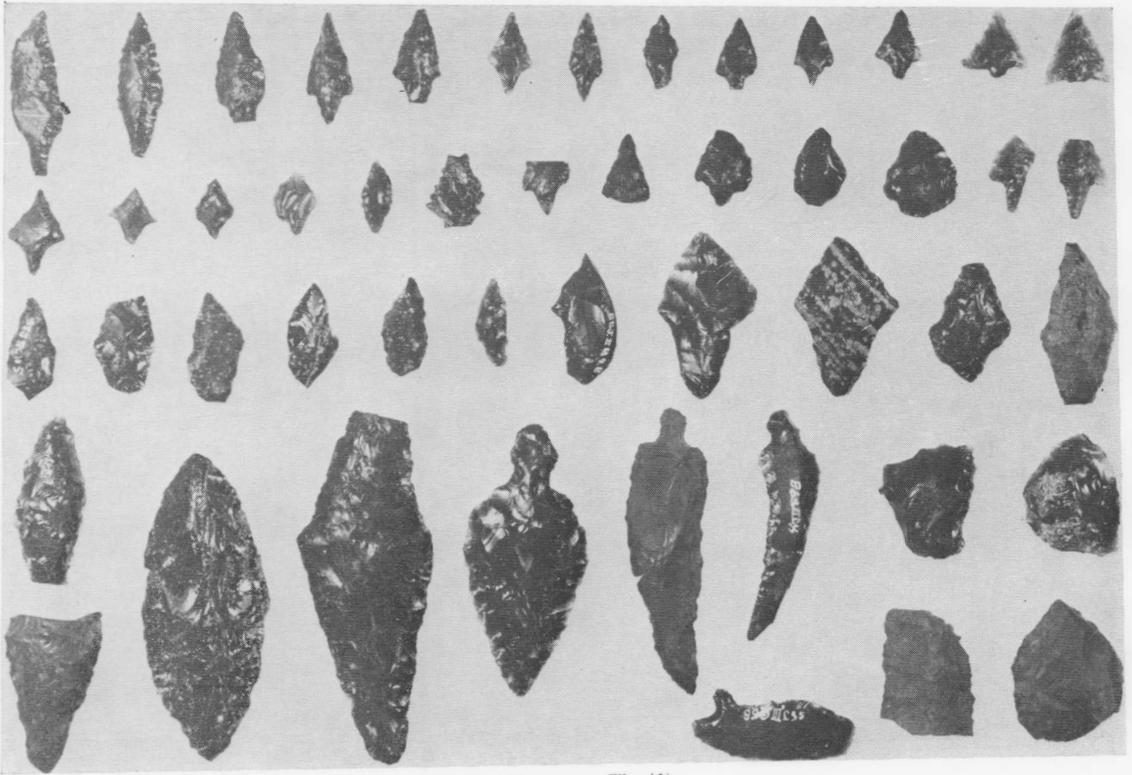
B 土 器 (2)



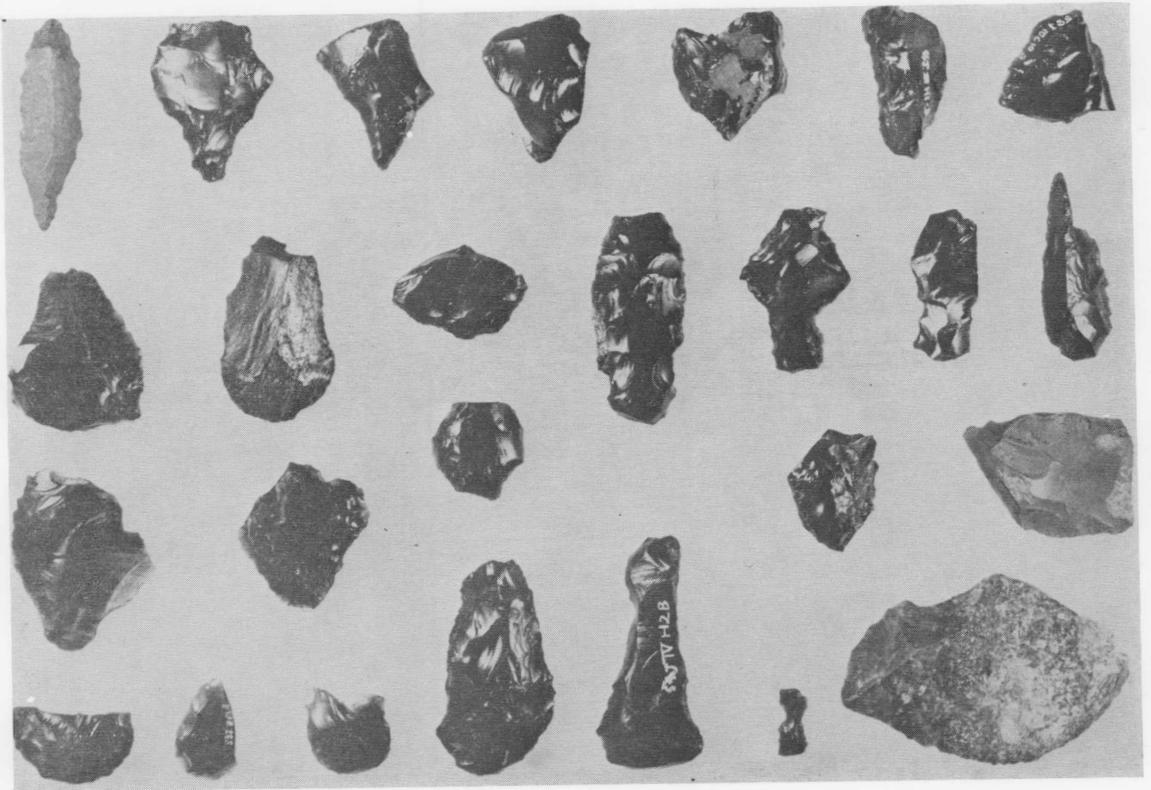
A 土 器 (3)



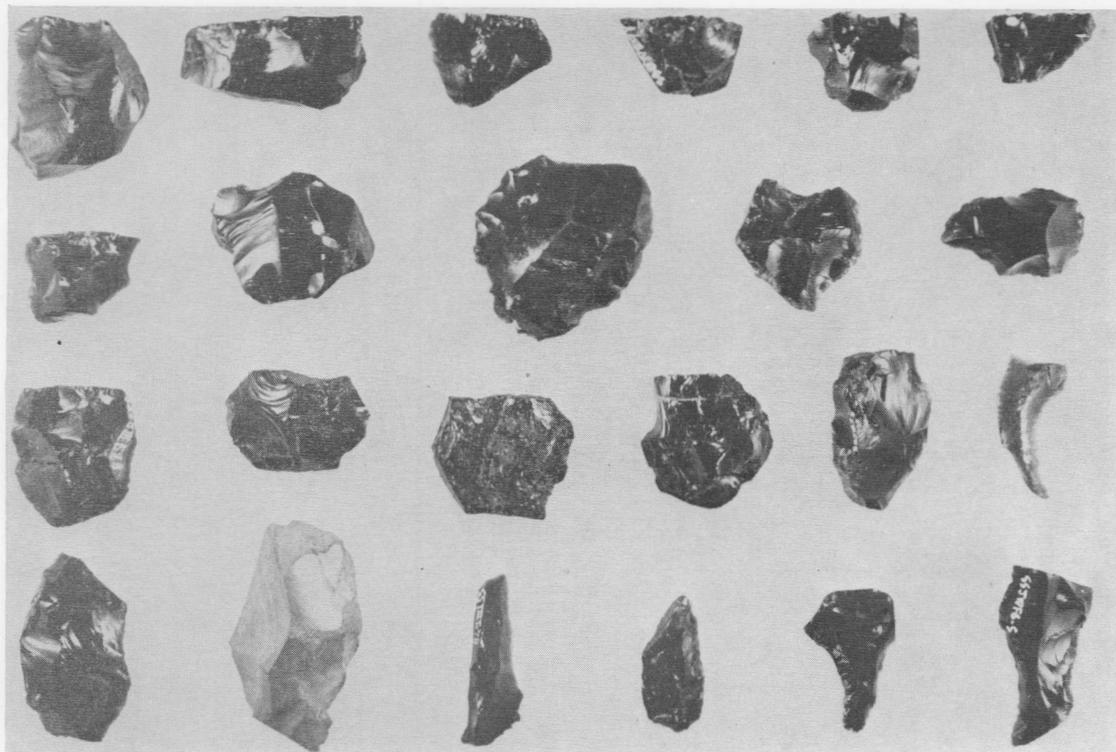
B 骨 器



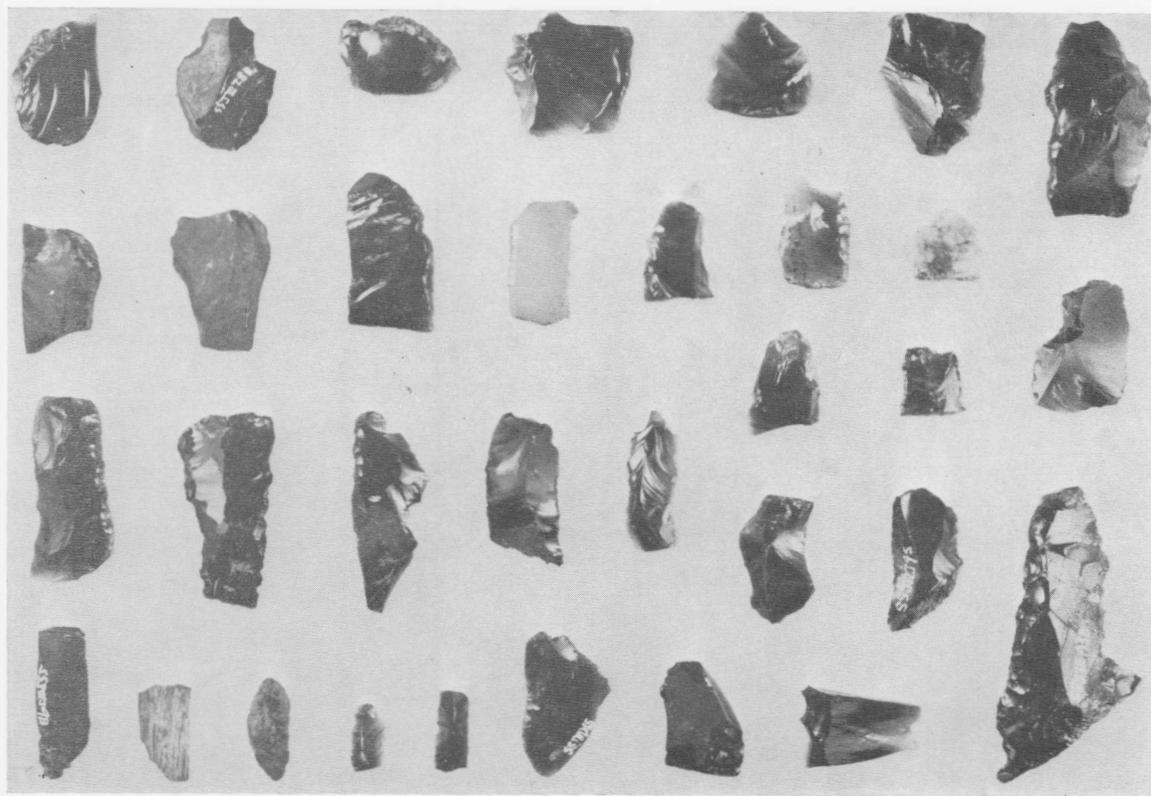
A 石 器 (1)



B 石 器 (2)



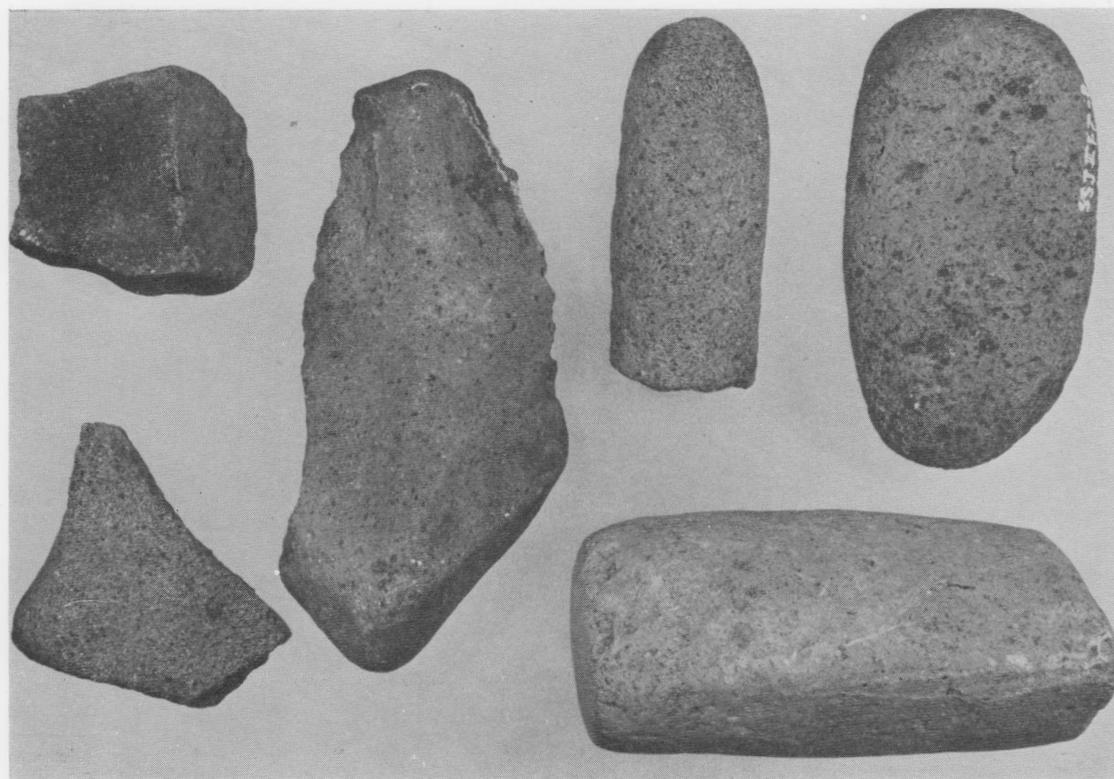
A 石 器 (3)



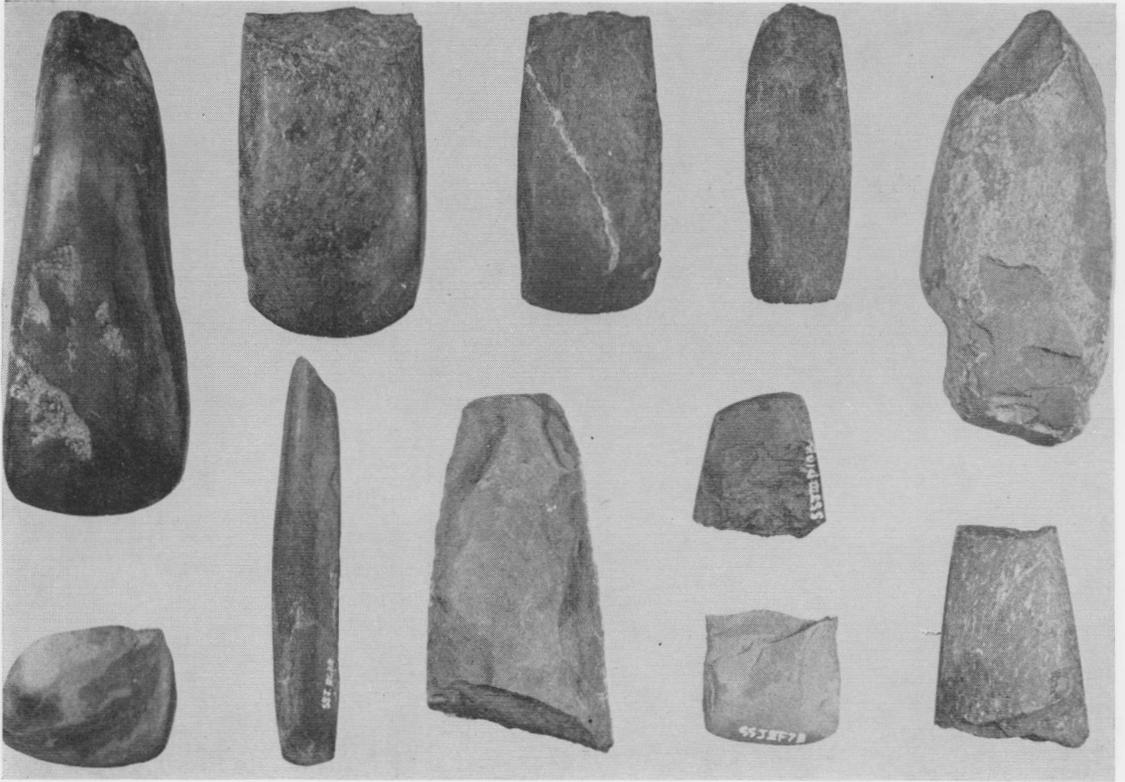
B 石 器 (4)



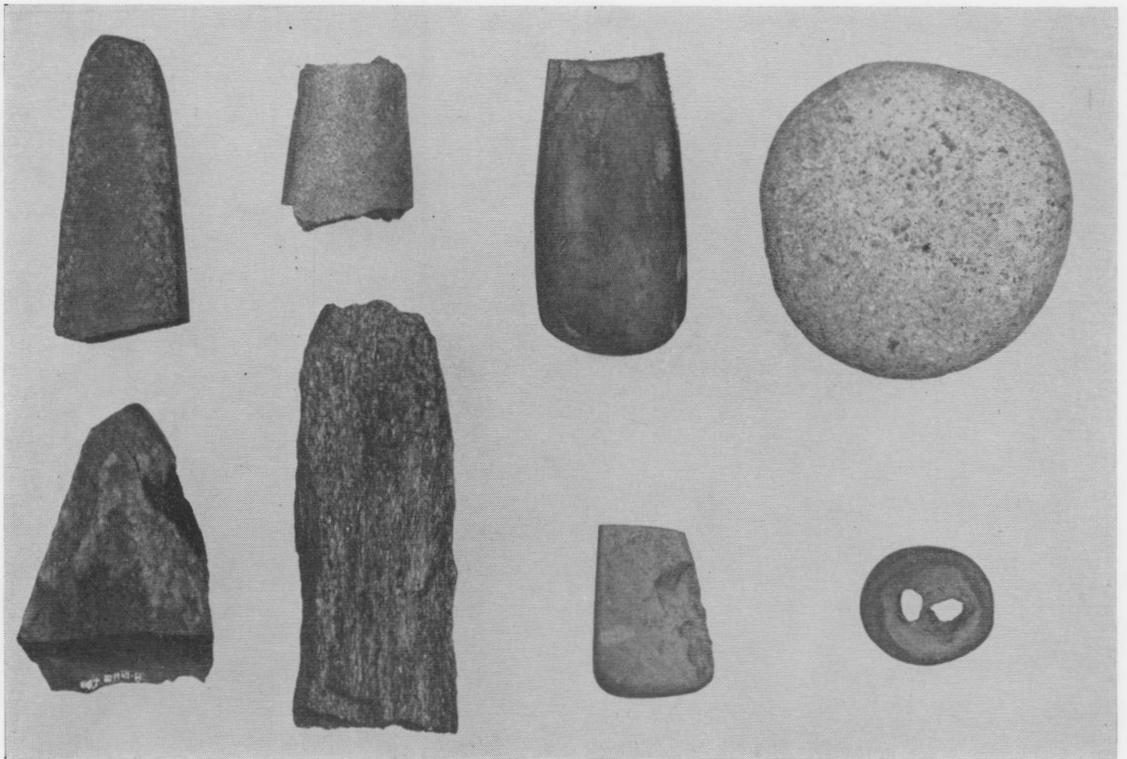
A 石 器 (5)



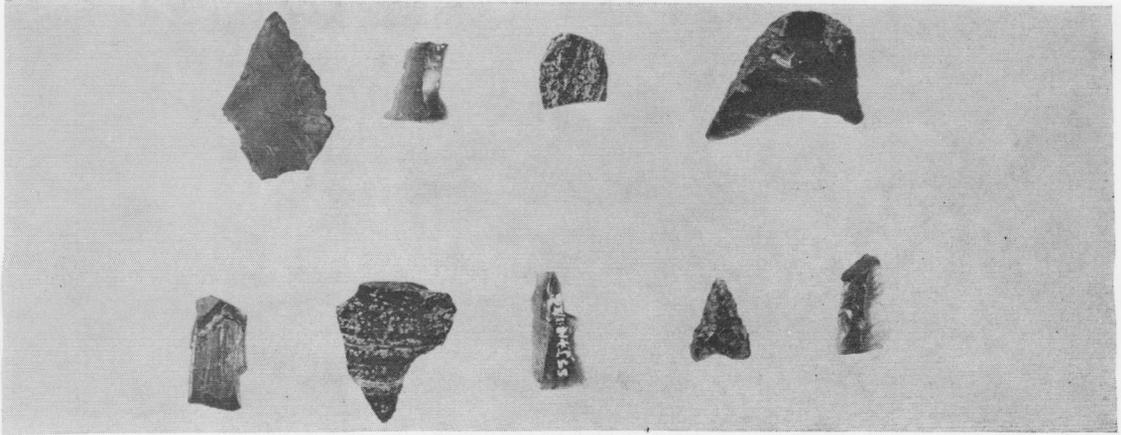
B 石 器 (6)



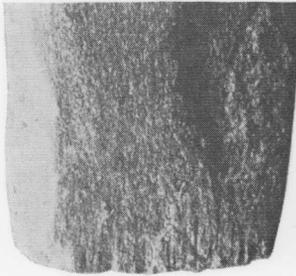
A 石器 (7)



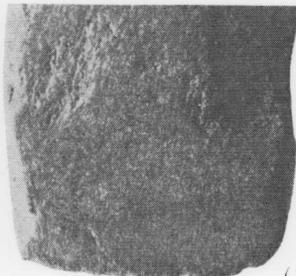
B 石器 (8), 遺構出土石器 (1)



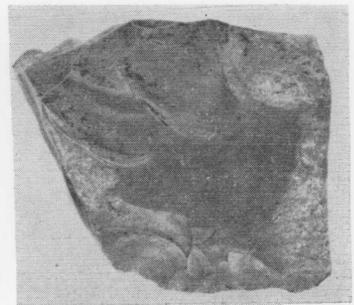
A 遺構出土石器 (2)



1



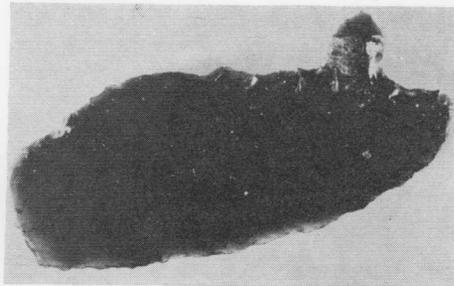
( $\times 1.5$ )



2 ( $\times 1$ )



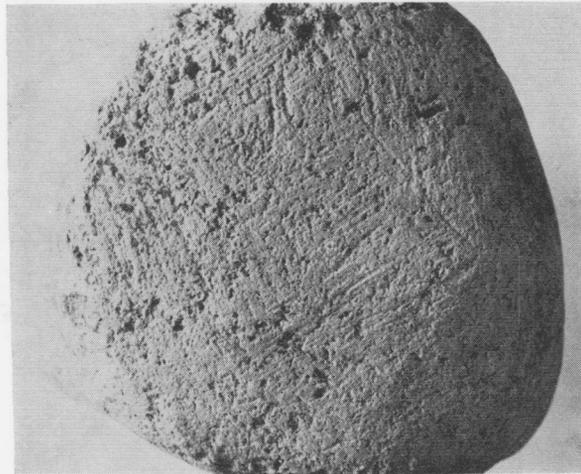
3 ( $\times 1.5$ )



4  
( $\times 1.4$ )



5 ( $\times 1$ )



6  
( $\times 1.2$ )

B 石器使用痕、附着物の拡大写真

札幌市文化財調査報告書 Ⅰ

白石神社遺跡

昭和48年3月1日印刷  
昭和48年3月31日発行

〔非売品〕

発行者 札幌市教育委員会

札幌市白石区中央1条4丁目

印刷所 札幌印刷株式会社